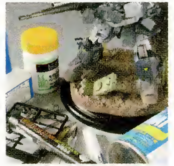
【著者】



海冬レイジ
かいとう・れいじ

あと１回！　あと１回！　あと１回！
（カッキィィィン…）
うわぁあああぁああぁあああ！！！

１月８日生まれ。A型。

【イラストレーター】

るろお

熱暴走なう。

カバーイラスト／るろお　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

MF文庫J
か-08-15

機巧少女(マシンドール)は傷つかない15
海冬レイジ

MEDIA FACTORY
MF文庫J
580

9784040674704
1920193005806

ISBN978-4-04-067470-4
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）
発行：株式会社KADOKAWA
KADOKAWA
メディアファクトリー

機巧少女(マシンドール)は傷つかない15

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。リヴァイアサン撃破により、ブリュー姉妹は救われた。一命をとりとめた雷真はロキとの決戦に臨むが、神性機巧(マシンドール)を巡る策謀もまた夜会同様に最終局面を迎えつつあった。満を持して遂に動き出した日本軍。いざなぎ当主・土門綺羅は英国王エドマンドと結び、学院を強襲、機巧都市を瘴気の海に沈めんとす！　度重なる戦闘で満身創痍の学院にこの奇襲をしのぐ手立てはない。仲間たちと引き離され、獄中で生死の境を彷徨う雷真に、唯一残されていた手段とは……？　シンフォニック学園バトルアクション！

MF文庫J **海冬レイジの本**

機巧少女は傷つかない1～15
［イラスト：るろお］

Unbreakable Machine-Doll

機巧少女（マシンドール）は傷つかない

イメージCD『MACHINE DOLL』発売中!!

サウンドプロデュース：とくP×
（『SPiCa』、『blue bird』／へっどほんトーキョー）

ボーカル：原田ひとみ
（『バカとテストと召喚獣』姫路瑞希 役ほか）

MF文庫J

今、全ての決着の時——。

夜会参加者も残り——３名。

『下から二番目（セカンドラスト）』『自ら廻る焔の剣（セイクリッドブレイズ）』そして『元帥（マーシャル）』。

夜会を制し、神性機巧を手にするのは果たして——!?

MF文庫J

コミック版 漫画：高城 計

『機巧少女（マシンドール）は傷つかない』

月刊（毎月27日発売）コミックアライブで大好評連載中!!

最新情報はこちらをチェック!
http://www.machine-doll.com/

MF文庫J

MF文庫J編集部公式アカウント
@MF_bunkoJ

Twitterやってます!

フォローする

待受画像プレゼント中!

アンケートに答えて無料待受をGET!!

▶▶ この本の巻末にある二次元コードまたはURLに携帯でアクセスしてアンケートページへ飛びます。

▶▶ 最後まで回答してくださった方には、ステキな待受画像をプレゼント。より良い本作りのため、ご協力をお願いいたします。

さらにメールマガジンに登録すると、最新刊情報やメルマガ会員限定情報をメールでGETできます。あなたも是非、メールマガジンにご登録ください!

※実際の画像とは異なる場合があります。※一部対応していない端末もございます。

150930　機巧少女は傷つかない15

機巧少女（マシンドール）は傷つかない15

Facing "Machine doll I"

海冬レイジ

MF文庫J

MF文庫J

機巧少女（マシンドール）は傷つかない15

海冬レイジ

MEDIA FACTORY

MF文庫J

15
機巧少女は傷つかない
マシンドール
Facing "Machine doll I"
Unbreakable Machine-Doll
海冬レイジ
Illustration
るろお

「──転移だ！　いろり！」

「刻んでやれ、ジブリール」
「はい！」

「ご機嫌よう、ミセス・ドモン。
そして、プリンセス。
お目にかかれて光栄です」
日輪は愕然とした。
この貴公子の顔を、
日輪は知っている！

「夜々、おまえは人間の娘に
生まれたかっただろう。
小紫、おまえはもっと力が欲しいと
願っていただろう。
だが私は、雪月花に生まれたことを、
とても幸せに思っていたのだ。
この身体も、力も、
主のお側に仕えられることも、
嬉しかった。そして何より」

「おまえたちの〈姉〉でいられることがな」

Unbreakable Machine-Doll

contents

Prologue おしまいの夜#2 ......p13

Chapter 1 迷いが晴れて p28

Chapter 2 死力を尽くして p69

Chapter 3 友に託して p109

Chapter 4 悲劇が起きて p160

Chapter 5 再び、惑い p206

Chapter 6 天の玉座に挑む者 p252

Intermission おしまいの夜#1 ......p311

マシンドール

機巧少女は傷つかない15
Facing"Machine doll I"

海冬レイジ

MF文庫J

機巧少女(マシンドール)は傷つかない

Unbreakable Machine-Doll

登場人物紹介

夜々(やや)

自称「雷真の妻」。花柳斎秘蔵の真作〈雪月花〉の月。

赤羽雷真(あかばねらいしん)

極東出身の人形使い。一門の仇を討つためマグナスの命を狙う。

イオネラ

17歳で工学部教授の天才少女。花柳斎の熱烈なファンを自称。

キンバリー

機巧物理学の教授で雷真の担任。その正体は〈灰十字〉の戦士。

シャルロット・ブリュー＆シグムント

ブリュー伯爵家の元ご令嬢。父祖伝来の〈魔剣〉は破壊力抜群。

監視

対

ラザフォード

19世紀最強の魔術師にして学院長。神性機巧を欲している。

ロキ

〈剣帝〉の異名を取る実力者。姉のために魔王を目指す。

フレイ

ロキの実姉。いつもガルム犬13頭に囲まれている。巨乳。

アリス

ラザフォードの娘。父のためにあれこれ暗躍。半身が機巧。

アンリエット・ブリュー

シャルの妹。銀薔薇の手で精霊使いとして覚醒。

世界中から俊英が集まる、魔術の最高学府。4年に1度〈夜会〉を開催し、『同時代でもっとも優れた才能』に魔王の称号を与える。ラザフォードの就任後、神性機巧開発を強力に推進中。

王立機巧学院

花柳斎硝子

国内外に名を轟かせる稀代の人形師。雷真に復讐の機会を与えた。

雪月花

小紫

夜々の妹。〈雪月花〉の花。甘え上手で元気いっぱい！

いろり

夜々の姉。〈雪月花〉の雪。最近恋に目覚めてポンコツ気味。

日本軍

土門日輪

名門いざなぎ流の陰陽師。華族の姫君にして雷真の許嫁。

魔術師協会

グリゼルダ

前回の夜会を制した迷宮の魔王。夏頃、雷真を弟子にした。

火垂

マグナスが造った禁忌人形。雷真の妹〈撫子〉にそっくり！

監視

マグナス

赤羽一門を滅亡させた男。天才的人形使いにして超一流の人形師。

黒薔薇セフィラ

金薔薇と双璧をなす大幹部。自称〈冥府の王〉。

黒衣帝エドマンド

覇道を歩む野心の王。常人には理解しがたく、あだ名は〈狂犬〉。

敵

薔薇の師団（結社）

これまでのおはなし

機巧文明華やかなりし20世紀初頭。ひとりの日本男子が至高の自動人形を引き連れ、王立機巧学院の門をくぐった。滅亡した赤羽一門、何より妹の仇を討つために……。学院、協会、ブリュー伯爵の働きで神話級リヴァイアサンの脅威は去った。夜会は再開され、舞台では剣帝ロキが待っている。だが、日輪につけられた雷真の傷は深い。果たして…!?

口絵・本文イラスト●るろお

Prologue　おしまいの夜#2

「まだ逝っちゃダメです雷真！　果てるには早すぎます！」
などという相棒の叫びで、雷真の意識は浮上した。
寒い。手足の感覚がない。雷真は自分が東欧の街ゼムリーンにいるのだと思った。
バッキンガムの地下で硝子に拒絶され、相棒は透明な水槽に入れられ——それからどうしたのだったか。記憶は前後し、錯綜し、上手く思い出せない。
とにかく目を開けると、目の前に相棒の泣き顔があった。
黒目がちの瞳に雷真を映し、夜々はほーっと息をつく。相棒にこんな顔をさせてしまうのは、もう何度目なのだろう。夜々はぽろりと涙をこぼし、雷真の手を握りしめた。
「よかったです……雷真がちゃんと助かって……」
「……また心配かけたらしいな。だが、もう大丈夫だ」
とは言ったものの、まったく根拠がない。そもそも、状況が理解できていない。
夜々の後ろには硝子が立っている。こちらも安堵しているように見えた。
（……何で硝子さんがいるんだ？　ああ……戻ってきてくれたのか、よかった）
彼女が結社の薔薇になったと知ったとき、目の前が真っ暗になった。だが、ここにいる

ということは、雷真は金薔薇を討ち倒し、硝子を救い出せたらしい。
そこで、はっとする。それはもう十日も前の記憶じゃないか！
思い出したように激痛が走る。雷真の胸には真新しい包帯が巻かれ、その下にはたぶん縫合されたばかりの傷があった。麻酔を使わなかったのか、痛みは鋭い。
この傷は誰につけられた？　誰が雷真の胸を貫いた？
（落ち着け……落ち着いて、ゆっくり、ひとつずつ思い出せ……）
目を閉じ、記憶の糸を手繰り寄せる。十日ほど前、ゼムリーンにて、雷真は金薔薇と戦い、これを退けた。硝子は雷真と三姉妹の気持ちに応え、戻ってきてくれた。
同じ頃、機巧都市では仲間たちが王妃グローリアの支配に抗っていた。こちらはシャルやロキ、学院生、教授たちの総力を結集し、グローリア追放に成功する。
（そうだった……それからの数日だけが、穏やかだった……）
英国に戻った雷真は、三姉妹と穏やかな時間を過ごす。ほどなく夜会が再開され、雷真は〈女帝〉ことソーネチカの一件に巻き込まれることとなる。
ソーネチカと一緒にいたのはほんの三日少々だが、実に濃密な時間だった。
ロシアの問題はまだ整理できていない。わかっているのは、灰薔薇シスマがソーネチカの肉体を奪い、己に同化させようとしていたことだけ。そうすることで灰薔薇は強靭な器となり、例の黒い巨人〈ギュネス〉を吸収できるという話だった。
（ソーネチカと合体、ギュネスと合体。合体、合体って粘菌かよ？）

理屈はさっぱりわからないが、ギュネスを身の内に収めるのは、ただの人間には不可能に思える。何かしらの秘術で己を『人智を超えた存在』に引き上げ、それから融合を目指すという考え方は、魔術の理屈とやらに適っているのだろう。

しかし、シスマの野望はくじかれた。ギュネスも、ソーネチカも、虚無石すら得ることができず、シスマは夜々にぶっ飛ばされるハメになったのだ。

（それで、それから……どうなった？　俺は、どうしてこの傷を……？）

灰薔薇撃退後、ほんの数時間の仮眠を取っただけで、雷真はもう動き出した。シャルと日輪を助けたくて、その背後にいる魔女を叩きのめそうとした。

（そうだ……魔女を二人、一度に仕留めようとして……）

夜会は既に結社の薔薇たちの〈代理戦争〉となっていた。金薔薇の遺産を誰が継ぐかで薔薇たちは争っており、その決着方法としてエドマンドが提唱したのが、『夜会の勝者を当てる』ゲームだ。己の手駒が勝ち抜けば、次世代の魔王も、金薔薇の遺産も、神性機巧も、すべてが手に入るという最悪のお遊び。

ソーネチカがシスマに狙われていたように、シャルと日輪の背後にも薔薇の魔女がいる。魔女を誘い出して討ち取れば、結社の思惑を妨害し、仲間も救えて一石二鳥となる。そう考えて動いたのだが、それがどうやら裏目に出た。

この胸の傷は、日輪につけられたものだ。

日輪が雷真の胸を刃で貫き、瀕死の重傷を負わせた。

雷真が動けずにいるうちに、グローリアこと銀薔薇は神話級自動人形リヴァイアサンを持ち出し、市街を猛毒で汚染するという暴挙に出た。

王位を欲した者が無差別攻撃に出るとは、誰も予想しなかった。ラザフォードもこれには備えがなかったようで、学院はまんまと過去最大の窮地に立たされ——

回想と現実がようやくつながる。雷真は飛び起きた。

「アンリはどうした！　シャルは？　学院はどうなった⁉」

「落ち着いて。そのあたりのことは、もう片付いたわ」

見かねたように硝子が言う。表情はいつになくやわらかい。ただ、彼女が緊張を解いていないことは、雷真も肌で感じていた。

「『片付いた』ってのは、『助かった』って意味……だよな？」

「ええ。ブリュー伯爵家のお嬢さん方は無事だし、銀薔薇さまの脅威も去った。私もついさっき聞いたところだけれどね」

すっと目線を背後に投げる。黒コートの魔術師が二人、部屋の出入口で待機していた。——硝子の護衛兼監視役、兼伝令といったところか。

硝子の説明によれば、銀薔薇はブリュー伯爵が倒したということだった。

安堵する一方、雷真の胸はざわめく。シャルもアンリも学院も無事——望んでいた結果なのに、なぜだか気持ちが沈み、濁った感情が込み上げる。

夜々が目ざとく気付き、怪訝そうにのぞき込んできた。

「雷真、ぼーっとしてます。心ここにあらずです」
「ちょっと……な、この十日間のことを思い出してた」
「女狐(めぎつね)たちとの乱交パーティを？」
「おまえの妄想を俺(おれ)の過去にねじ込むな——でででっ」
しゃべると胸の傷に響く。雷真はえびのように丸まりながら、
「たった十日のうちに……東へ西へ、ずいぶん大冒険したもんだな……へへ」
胸にわだかまる感情を、小さく笑ってごまかした。
『日輪(ひのわ)は自分に相応(ふさわ)しい殿方と、一緒になろうと思います』
彼女がそう言ったときの、よそよそしい微笑が甦(よみがえ)る。
「しゃきっとしてください雷真！　いつまでも朦朧(もうろう)としてないで！　それとも」
夜々は不安げに瞳を揺らし、探るように訊(き)いた。
「胸、痛むんですか？」
——それは、どちらの意味だったのだろう？
「いや……痛みはもうどうってことねえ。いくらでも緩和できるしな」
魔力を胸に流す。己の神経に働きかけ、痛覚を鈍(にぶ)らせる——そんな高度な芸当が、無意識にできるようになっている。
硝子が目を細め、いたわるように言った。
「体得できたようね。初めてとは思えないくらい上手だったわよ」

「硝子の言い方……なんかやらしい……っ」
「深読みすんな！　何もやらしくない！」
相棒のボケに突っ込む。このやりとりで、雷真もやっと人心地がついた。
生き残った実感がわいてくる。体力さえ戻ったような気がしている。
硝子が気付き、釘を刺すように言った。
「お調子に乗るのは悪い癖よ。一度体験してると思うけど、坊やに埋めたのは、未分化に近い『生の』精瑠。これから坊やに寄生して、少しずつなじんでいくもの」
雷真は三年前の出来事を思い出した。箱根の山中で瀕死の重傷を負って、硝子の施術を受けたことがある。あのときも、人造細胞〈精瑠〉が治療に使われた。
「精瑠は坊やが魔力で〈飼う〉必要があるの。わかっているわね？」
「……前のときは、まるで理解できてなかった。けど、今ならちょっとはわかる。生き物と同じように〈栄養〉がいる。精瑠も『生きてる』ってことだろ？」
「あら、だいぶお利口になったわね。これも留学の成果かしら？」
硝子はうなずき、そっと雷真の胸に触れた。
「精瑠が包帯の役割を果たし、肺を守っている。だけど、精瑠はあくまで異物。坊やの体はそれを捨てたくてたまらない。精瑠を維持するためには――」
「魔力っていう、エサが必要なんだな？」
「そうよ。坊やの魔力を帯びているあいだは、精瑠も坊やの一部でいられる。しばらくは

絶対に魔力を切らさないで。繊細な器官だからこそ、命取りになるわ」
　雷真の脳裏をロキの影がかすめた。そして、宿敵の影も。
　これから彼らと全力でぶつかって、魔力切れを起こさない保証は……ない。
「わかった。気をつける」
　口ばかりの了解を伝え、雷真は腰を浮かせた。
「夜々、闘技場に向かおう。今夜の夜会、まだ終わってねえよな？」
「まだ午後一〇時です。終了までは二時間あります」
「……そういや、今夜中に〈マグナスへの挑戦者〉を決めるって話だったよな。ここまできて不戦敗は勘弁だ。行こう」
「はい。あ——この……あざ？　は、何でしょう？」
　夜々が雷真の背に触れ、包帯と皮膚の境い目をなぞった。
「刺青みたいな……。かなり色が変わってますけど」
「見せて」
　硝子が夜々と位置を入れ替え、機巧眼帯のレンズ越しに確認する。あざの正体は硝子にもわからなかったようで、それが何だという答えはない。
　夜々は心配そうに、こんなことを言った。
「これ、内出血じゃないですね。ひょっとして、毒でも塗られたんじゃ……？」
　そこで失言に気付き、あわてて自分の言を否定する。

「そ、そんなはずありませんよね！　すみません、おかしなこと言って！」
「いや、その可能性はあるだろ。日輪は本気で俺を刺したんだ」
日輪は明らかに、重傷を負わせる目的で雷真を刺した。刃に毒を塗っていてもおかしくないし、呪いや魔術を仕掛けた可能性もある。
雷真の胸に、得体のしれない不快感が込み上げた。
日輪があんなことをしなければ、雷真は対リヴァイアサン戦に参加できたのだ。
雷真はかぶりを振り、黒い感情を追い散らした。
「急ごう。夜会の前に寄り道しなけりゃならない」
「あ、はい！　もちろんわかってます！」
「――なに？　おまえ、俺がどこに行くつもりかわかってるのか？」
「もちろんです。日輪さんを助けに行くんですよね？」
言葉を失う雷真に、夜々は凛とした声で言った。
「もちろん夜々もお供します！　夜々こそ、唯一無二の〈相棒〉ですから！」
「……悪い。俺が寄り道したいのは、そっちじゃないんだ」
えっ、という顔で夜々が固まる。視線から逃れるように、雷真は背を向けた。
「おまえも知ってる先約だよ。ロキと戦う前に話をつけておかないと」
「何を言ってるんですか！　日輪さんは望まぬ結婚を強いられて――今この瞬間も、ひどいことをされてるかもしれないのに！」

「あの婆さまが側にいるんだ、そこまでひどい状況じゃないさ」
夜々が裏切られたような顔をする。雷真は目をそらし、言い訳のように言った。
「婆さまのお眼鏡に適う相手なら、かなりの良縁だ。この街で引き合わせたってことは、英国の貴族さまじゃねえかな？　本人も乗り気だったじゃねえか」
本人が言ったのだ。自分に相応しい男と一緒になると。
「日輪のことは忘れよう。ロキに勝たないことには、天全と戦えない――」
「自分に嘘をつかないでくださいっ！」
だんっと床を蹴りつける。床が大きく揺れ、天井から石のかけらが降ってきた。
「雷真は日輪さんを助けたいと思ってます！　こんなお別れ、望んでません！」
「……なあ、夜々。客観的にみてよ、これから兄貴を殺そうっていう『人殺し』と、地位も資産もある『立派な名士』と、どっちを選ぶのが幸せだと思う？」
夜々はのけぞり、それから顔を伏せ、肩を震わせた。
腹立たしそうに、そして哀しげに、振りしぼるような声を出す。
「その質問は……ずるい、です……っ」
言われて初めて、雷真は自分の落ち度に気がついた。夜々にしてみれば、日輪はほかの男と結ばれて欲しいだろう。それが夜々の主観――だからこそ、『客観的に』と言われたら、その逆を言わねばならない気持ちになる。
確かに狡い訊き方だった。夜々は苦しそうにしたが、正直に答えた。

「望まない相手と結婚するなんて……幸福とは言えないと思います。これから一生、好きでもない人と暮らすなんて」
「『結婚は惰れ』だって、おふくろが言ってたぜ？」
「それは意味が違います！　夜々が人形だからって馬鹿にしないでください！」
「おい！　俺は何も、そんなつもりで言ったわけじゃ——」
「夜々にだって人間の機微はわかります！　そんなのは、おのろけです！　相手が好きだから、嫌な部分にも慣れていけるって、そう言ったんです！」
夜々は髪を振り乱し、雷真を指差して言い放った。
「とにかく雷真は間違っています！　何もかも間違ってます！」
「……頭ごなしだな」
乾いた笑いが漏れる。だが、相棒の言うことには説得力があった。
これではまるで、こちらが駄々をこねているみたいだ。
「おまえは優しいな。やたら日輪に突っかかってたわりにさ」
「そ、それとこれとは話が別です。それに、夜々は日輪さんのためじゃなくて……雷真が後悔するところを見たくないんです」
相棒の言葉に、ぐっと詰まる。
この三年、夜々は一番近いところから、ずっと雷真を見ていた。
妹の死を引きずり、悔やみ続ける雷真を。罰を求めるように己を虐め、無茶な鍛錬を続

けた雷真を。いろりが『飢えた山犬のよう』と評した、あの雷真を。
　そんな雷真をもう見たくないと、夜々は言っている。言ってくれている。
　夜々は雷真の肩に触れ、至近距離から目をのぞき込んできた。
「ねえ雷真。何のために夜々がいると思いますか？」
「そりゃ……天全を倒すためだろ」
「違います。硝子が最初に言ったことです。『坊やに仕えなさい』って」
「――――」
「いつだって、夜々は雷真のお役に立ちます。そのためのどうぐ――」
　夜々は少しはにかんで、誇らしげに言い直した。
「〈相棒〉なんですから！」
　じん、と雷真の胸が震えた。
（こんな、口先だけの……みっともねえ男に……おまえは……！）
　どこまでもついて行くから、後悔しない道を行けと――そう言ってくれるのか。
　涙ぐみそうになる。そんな雷真を見て、硝子がくすりと笑った。
「坊やの負けみたいね。私も夜々と同意見だわ。普段の坊やなら、たとえ私にぶたれたって、夜会がおじゃんになったって、日輪さまをさらいに行ったと思うのだけど？」
　どこか申し訳なさそうな口ぶり。硝子もわかっている。雷真に『らしくない』状況が続いているのは、『どうしても護りたいもの』を抱えてしまったからだ。

この健気な相棒を死なせたくないばかりに、かつてのような無茶ができない。
雷真は相棒の頭を抱え込み、抱き寄せた。
「ありがとよ。やっぱおまえは、世界一の相棒だ」
夜々は懐いた猫のように、されるがまま、頬をすり寄せてくる。そのぬくもりに、雷真は想いを新たにした。この相棒を死なせてはいけない。絶対に。
「それを踏まえた上で、日輪はやっぱ後回しだ」
「なっ――まだそんなこと言って！」
「最後まで聞け。婆さまの力はよーくわかった。今喧嘩を売っても勝ち目はない」
「それは……そうかもしれませんけどっ」
「俺がやるべきは、魔王になることだ。だから今は夜会に専念する。まずはロキを倒して、日輪はその後だ。わかったら、今度こそ出発するぞ」
「お待ちください雷真殿！」
不意に、鋭い声が割り込んできた。
黒コートの前をすり抜けて、銀髪の乙女が駆け込んでくる。
顔色がよくない。青ざめた肌に、隠しきれない不安がのぞいている。彼女がこんな顔をするのは、決まって妹たちの身を案じているときだ。
いろりは小走りに駆けてきて、雷真ではなく硝子に言った。
「主！　もう一度、正確な場所を教えてください！」

「……伝えた通りよ。おまえも把握している場所でしょう？」
「ですが、そこには誰もおりませんでした！」
硝子が漂わせていた緊張感の理由を、雷真は今さら察した。
「ひょっとして……小紫が、戻ってねえのか？」
誰も応えない。それは肯定と同じだ。
硝子が袖口から八角形の式盤を取り出し、魔力を流した。盤の表面に光がともり、雪月花の位置を示す。反応を示す光点は二つで、あるべき『三つ目』がない。
「……いろり、おまえはどこを探したんだ？」
「それは、この建物――〈愚者の聖堂〉の最深部です……」
「やっぱここ、そうなのか。灰薔薇がぶっ壊したんじゃなかったのか」
「半壊しています。ですが、以前我らが入り込んだ、巨人の穴ぐらは健在でした」
「なら、あの〈ニンゲン〉も、ここに戻されたのかな？」
「さあ、そこまでは……。とりあえず、見当たりませんでしたが」
「色々おかしいぞ。何でそんなところに小紫がいるんだよ？」
「反応があったのよ。さっきまでね」
硝子がつぶやく。硝子にも状況は理解できていないらしく、もどかしげだ。
「思うに、誰かが小紫を連れ込んだのではないかしら」
「連れ込んだ？　シンか？　小紫と一緒だったはずだ」

「いえ……味方ではないと思うわ。いろりの接近に気付き、どこかへ連れ出したのよ。小紫を取り上げてしまえば、坊やは夜会で不利になるでしょう？」
「連れ出す……って冗談じゃねえぞ。この大空洞には化け物が徘徊してるんだ」
「それが雷真殿、例の目玉の怪物は、きれいさっぱりいなくなっているのです」
「何だって？」
いなくなった？　無数に存在していたのに？
「親玉に吸収されたんじゃないですか？」
夜々が横から言う。硝子は腑に落ちない様子で、首をひねった。
「キンバリー先生がおっしゃるには、あれは本体から漏れ出た〈余剰品〉だそうよ。一度排出されたものをもう一度取り込むなんて、非効率的じゃないかしら？」
吸収し直すくらいなら、最初から排出しなければいい。
行方不明の小紫、不在の巨人、いなくなった怪物たち。
薔薇たちの賭け、日輪の豹変、そして神性機巧の誕生。
いくつもの謎と、いくつもの問題を抱えたまま、夜会最後の夜が更けていく――

Chapter 1　迷いが晴れて

1

『さあ行きましょう。夜々と雷真のすべてを、今こそ見せます！』
『脱ぐな！　脱がすな！』
などとお約束のボケをかましながら、今にも夜々と雷真が現れるのではないか。
そんな期待と、胸騒ぎ。両方に翻弄されながら、シャルは闘技場の客席にいた。帽子の上には仔竜の姿のシグムントがいて、ともに入口の方を見つめている。
ここはヴァルプルギス王立機巧学院。夜会の舞台、闘技場。
時刻は既に午後十時を回った。四年に一度の夜会も、残すところはあと二戦だ。
連日満員だった客席は、今夜は空席が目立つ。客はせいぜい千人かそこら。客層も普段のような紳士淑女ではなく、各国の軍事に関わる者や、学生が多い。それもそのはずで、リヴァイアサンによって市街地は甚大な被害を受けている。周辺地区の市民は、軍が設営したキャンプや、避難所に指定された建物などに移っていた。
今も英国軍が復旧作業を続けていて、シャルも先刻まで建物の洗浄を手伝っていた。

「こんなときでも客はくる。人間というのは物見高いものだな」
シャルの帽子の上でシグムントがつぶやく。
「昨夜の〈黒い巨人〉を忘れたわけでもあるまいに。あれこそが学院長の〈極秘研究〉であろうと、誰しも察したはずだが」
「まあ、学院長が何か企んでるなんて、公然の秘密みたいなものだしね」
「だが、今夜また騒動があれば、今度こそ学院はもつまい。警備は瓦解、主だった魔術師たちも昼間の一件で消耗している」
「そのときは私たちブリューの出番よ。大丈夫、お父さまも近くにいらっしゃるし、協会の人たちもいるし！」
「……であれば、よいのだが」
シャルは不安な気分で舞台を眺めた。
今夜の主役の一人、〈剣帝〉ことロキが照明を浴びて立っている。かたわらには白銀の機械天使ジブリール。彼らが相手では、雷真も苦戦を免れまい。
そして、それ以前の問題として、雷真が舞台に現れない。
「どこで油売ってるのよ、あのバカ……！　このままじゃ、ロキの不戦勝になっちゃうわ。もうこの際、私たちがロキと戦っちゃう？」
「君はもう手袋持ちではないだろう。王妃の前で消し炭にしたぞ」
「そうだった！　かっこつけなきゃよかったわ……！」

「それに、たとえ手袋があったとしても、君も私もまともに戦える状況ではない」
シグムントは昼の戦闘で翼と頭部を損傷している。シャルも使いきった魔力が回復していない。一方、ロキは魔力が充実している。力をセーブしていたに違いない。
「何か、ないの？　私がライシンにしてあげられること」
「ある。何もしないことだ。君が倒れでもしたら、雷真も胸を痛める。今は心身を休めておけ。君は日輪を助けたいのだろう？」
シグムントの言うことは、いつももっともだ。そう――シャルにもまだ、やらなければならない戦いがある。
もう友達ではないと言われても、シャルは日輪が好きだ。控えめなところも、本当は芯が強いところも。清らかなところも、そうではないところも。
日輪が困っているのなら、助けたい。そしてまた、シャルを好きになってもらえるよう努力する。そのためにも、魔女との戦いは避けられない。
ならば、余計なことはせず、大人しく雷真を待つべきだ。
無力感に苛まれながら待つこと数分、場内にざわめきが広がった。
入場ゲートの奥から、待望の人物が歩いてくる。
赤羽雷真。けろりとした顔が腹立たしい。少なくとも表面上、気負いはないように見える。洗いたてのようにパリッとした制服姿で、怪我をしている様子もない。
その彼の腕に、美しい乙女型自動人形がしがみついていた。

「見てください雷真！　お客さんがまだこんなに！」

夜々だ。まぶしそうにライトを見上げ、はしゃいだ声を出す。雷真も笑って、

「仕事で観にきてる人が多いんじゃねえか？　ご苦労なこった」

「嬉しいです。こんなにたくさんの人が、夜々と雷真の愛の営みを見学に――」

「いろり、気を抜くなよ。ロキは強敵だ」

「どうして流すんですかー！　妻のボケを放置しないでくださいっ」

「おまえが進歩のないネタをかますからだよ！」

本当に、相変わらずのやりとり。安堵のあまり、シャルは座席の上で脱力した。

「何よ、あいつ……人にさんざん心配かけて、準備万端じゃない……」

「……いや」

シグムントの声が硬くなる。ほどなく、シャルもその理由に気付いた。

雷真が連れているのは、黒髪の夜々と、銀髪のいろりだけ。小さな体で愛嬌を振りまく、三姉妹の三女がいない。

雷真は気にしたふうもなく、ロキの方へと歩を進める。シャルの帽子の上で、思わずと言ったふうに、シグムントが身を起こした。

「やる気だな。花の乙女抜きで、ロキに挑むつもりか」

「まさか！　そのへんに隠してるのよ。お得意の奇襲戦法でしょ？」

「どうかな。昼間の実戦で破壊された可能性もある」

「それこそ、まさかよ。あの子に何かあったのなら、イロリは半狂乱のはず……」
そう言いながらいろりの顔を見て、シャルは凍りついた。
いろりの表情は、暗い。目を伏せ、足もとばかりを見つめている。半狂乱とまではいかないが、彼女がひどく感情を抑圧していることは、傍目にも明らかだった。
一度は晴れた不安の霧が、再びシャルの胸を覆う。
やがて場内のざわめきをかき消して、夜会執行部の女子学生がアナウンスした。
『第百位〈下から二番目〉の入場を確認しました。両者、試合を始めてください！』

2

日本魔術の最大派閥〈いざなぎ流〉——その現当主、土門綺羅は上機嫌だった。
「花の傀儡を取り逃したんは失態やったな。けどまあ、まずは重畳、重畳！」
祖母らしい口ぶりだと日輪は思った。結果に満足しているときでも、必ずどこかに不足を探す。まるで、そうするのが義務だと思っているかのように。
二人がいるのはグリフォン女子寮の応接間。寮生の親族や後援者をもてなすための部屋であり、調度も格調高く、学院長公邸なみに豪勢だった。
綺羅は豪奢なソファに浅く腰掛け、しゃんと背筋を伸ばしている。さすがに酒呑童子は引っ込めており、一見は無害な貴婦人に見える。

寮つきのメイドが台車を押してきて、綺羅と日輪に紅茶を淹れた。

一礼して、壁際に下がる。どうせ日本語がわからないと思っているのか、綺羅はメイドの存在など気にも留めず、堂々と言葉を続けた。

「学院長はんとこの家礼、大した気骨やな。留学生の傀儡ごときに命を張って……。まぁ、お嬢さんのためかもわからんね。あのお嬢さん、小僧に大層な入れ込みようや」

「……申し訳ありません。人形も、使い手も、わたくしが仕損じました」

日輪はテーブルにそっと手をつき、平伏した。

「人を殺めたことはありませんでしたので。急所を外してしまったようです」

「ましてあんたの婿になるかもわからんかった小僧や、覚悟も鈍る」

日輪は畏まる。追加の皮肉も覚悟していたが、意外にも綺羅は優しく、

「それでも、ようやった。あれはもうまともに戦われへん。次は取れる」

「そう……でしょうか？」

「赤羽一門は化生のはらから、とにかくしぶとい連中や。勘のよさも獣なみ。術を使わんかったんはええ判断やで。使ぉてたら、悟られとったかもわからん」

「はい、雷真さまは一筋縄ではいかぬ方です。知恵者でいらっしゃいますし、知覚も胆力もずば抜けておいでです。今や魔性においても――」

途中で口をつぐむ。綺羅の視線が冷たくなっていた。

「よその男をみだりに誉めるもんやない。あんた、人妻になるんやで？」

「……申し訳ありません」
再び畏まる。しかし、祖母は機嫌を損ねたわけではなかった。
「並外れた男なんは、わても認めます。まずはひと安心や」
ほくそ笑む。が、すぐに真顔に戻り、咳払いをした。
「油断はあきまへんな。この千年、叩いても叩いても死なへんかった連中や」
赤羽といざなぎの千年にわたる確執は、日輪も既に知っている。
先日この祖母が語った〈いざなぎの陰〉を思い出し、日輪は身震いした。
己の血が恐ろしく——そして憎い。
柱時計を見上げ、綺羅が腰を浮かせた。
「一〇時や。ほな、ぼちぼち旦那さまに会わせたろな——弓削」
「——へえ、ここに」
やや間があったのは、ためらったからか。
どん帳が落ちるように、背景の一部がすとんと抜け、虚空から陰陽師が現れた。
隠形の式神〈衛真奇〉で潜んでいたらしい。メイドがびくっと肩を跳ねさせる。彼女も驚いたろうが、日輪も驚いた。日輪の感覚をもってしても、察知できなかった。
陰陽師の体躯は引き締まり、面構えは精悍だった。眉間と口角に深いしわの刻まれた、壮年の術者。日輪もよく知っている、最高幹部クラスの男だ。
「弓削……！　英国にきとったん……!?」

弓削は日輪に深々と頭を下げた。
「ご無沙汰しております、日輪さま。昼間は六連がとんだ不始末をいたしました……わてからもきつぅゆうときますんで」
「あまり六連をいじめんといてな。うちを思ぉてしたことや」
顔を上げた弓削は、厳しい顔から一転、優しげに目を細めた。
「日輪さまは優しおすなぁ……。ちぃさい頃のまんまや！」
一瞬、強烈な郷愁が日輪の胸を満たした。
三年前の記憶が蘇る。この弓削とともに東京を訪れた、あの日の記憶が。
今なら、わかる。自分がどれだけ大事にされていたか。
己の血を怖れる気持ちは変わらない。綺羅を憎む気持ちはあるし、一門を呪う気持ちもある。だが、自分を見守り、育んでくれた大人たちの優しさを否定することはできない。それは確かに存在していたものだ。
綺羅は信頼に満ちた目で、腹心の幹部を見つめた。
「弓削、今から日輪の旦那さま――にならはるお人がきはる」
「へえ。ほな、わては外さしてもろて」
「あんたさんもご挨拶するのや。天下の要となられる御方やさかいな」
「――ちゅうことは、その御方のお働きで、今宵〈比良坂の岩〉が」
「そや、玄獄門が開く。誰もわてらに勝てんようになる」

「畏まりました。ほな、ご一緒さしてもらいます」

天下の要？　玄獄門？

どちらも意味は知っている。だが、意図がわからない。

天下の要とはどういう意味だ？　玄獄門を開く？　どうやって？　何のために？

日輪が口を差し挟む前に、綺羅が席を立ち、扉の前に立った。

ノブに手もかけず、ただ立ち尽くす。メイドが怪訝そうにしたが、その謎めいた行為の理由はすぐにわかった。

ライトが窓の向こうを横切り、前庭に自動車がすべり込んでくる。

乗っていた者が車を降り、夜の女子寮に入ってくる。これが自分の『旦那さま』なのだと日輪は察した。護衛は三名。卓越した第六感を持つ日輪は、彼らが魔術師であることを即座に見抜く。学生レベルではなく、第一級の魔術師だ。

綺羅と弓削が扉に向かって腰を折る。よほどの貴人なのだろう。日輪もあわててそれにならう。その数秒後、黒い衣装に身を包んだ、一人の貴公子が現れた。

あちらも予期していたのか、驚いた様子はない。騎士が淑女に接するように、しかし王者の威厳は失わず、一礼した。

「ご機嫌よう、ミセス・ドモン。そして、プリンセス。お目にかかれて光栄です」

日輪は愕然とした。この貴公子の顔を、日輪は知っている！

なぜ、彼がここに？　なぜ、この人物が『旦那さま』……？

綺羅は英国式の作法にのっとり、恭しく言った。

「お目通りかない恐悦至極にございます、エドマンド三世陛下」

挨拶は流暢な英語で、発音も上流階級のものだった。意外に思ったが、考えてみれば、祖母は数十年にわたり、こうして国外の人間と渡り合ってきたのだ。語学くらいは、習得していて当然なのかもしれない。

「本来ならてまえどもが参上いたすべきところ、ほんにありがたいことどす」

「お気になさらず。私は夜会観戦のため学院に滞在しておりますし――聞けば、姫君は賊に襲われたとか。外出は差し障りもありましょう」

エドマンドは微笑み、寛大な調子で言った。

「ともあれ、ご無事で何よりです。お怪我はありませんか？」

「もったいなきお言葉。どうかご心配なく。わてらの敵やおへんどしたわ」

にこやかに談笑する二人の後ろで、護衛が目が光らせている。こちらが少しでも怪しい動きをすれば、即座に攻撃するつもりだろう。護衛は知性的な男性で、年の頃は三〇前後。若くして重職にあるらしく、真新しい階級章が光っていた。

こちらの視線に気付き、エドマンドが護衛を手で示した。

「紹介しましょう、ミセス。彼はディラック。私の親衛隊を率いる、優秀な魔術師です。――少佐、こちらの貴婦人は私の義理の祖母となる方だ」

ディラックは表情を変えなかったが、顔色が変わった。日輪をちらりと一瞥し、

「自分は聞かされておりませんが……まさか、そちらのご令嬢と……?」
「そのまさかだ。あちらは同盟国日本の大貴族、ドモン家のプリンセスだよ」
やはり。エドマンドは日輪を娶るつもりでいるらしい。
最悪の予想が当たったことを知り、日輪の目の前が真っ暗になった。
ディラックも同じ衝撃を受けたようだ。二の句が継げずに黙り込んでいる。エドマンドは意地悪く微笑み、とぼけた調子で訊いた。
「私の婚約が不満かな、少佐?」
「……畏れながら申し上げます。先に議会にはかるべきでは?」
ディラックは生真面目な性格らしく、しっかり意見具申した。
「現在、国政は混乱が続いています。このようなスキャンダル、命取りともなりましょう。高貴な方とのことですが、それはあくまでも極東における身分です」
「スキャンダルとは心外だな。それに、君の口ぶりはいささか無礼だ」
ディラックは口をつぐみ、ばつの悪そうな顔をした。
彼の葛藤はよくわかる。英国から見れば、日本はあくまで後進国。そして、ここは伝統を重んじる国だ。東洋人を王妃に迎えると言って、世間が納得するかどうか……。
だが、当のエドマンドにそうした意識はないらしい。軽い調子で言う。
「国際結婚くらい、ローマの昔からある話さ。英王室にも前例がある」
「それは……欧州人同士の話です」

「世は二〇世紀だよ、少佐。その手の偏見は捨て去るときがきている。そのためにも、まず王が率先して範を示さなくては。なに、私の息子か孫の代には、王室は平民の妻を迎えるようになるよ。それに比べれば、人種の違いなど瑣末なことさ」

本気らしい。エドマンドは綺羅と日輪に向き直り、真摯な口ぶりで言った。

「私の兵が失礼を申しました。どうかお許しください」

王の口から謝罪まで飛び出す。意外にも紳士的な態度に、日輪は唖然とした。雷真から聞いていた人物像と、ずいぶん違う。

ぼんやりする日輪に、エドマンドはさらに踏み込んで言った。

「改めまして、ミス・ドモン。貴女を我がディランド朝の花嫁として迎え入れたい」

一蹴したいと思ったが、日輪はそうしなかった。

「……もらっていただき、ありがとうございます。このような傷物の女」

「日輪！」

綺羅が叱る。エドマンドは笑い出した。

「そのようなことをおっしゃるものではありません。それに、たとえその言葉が真実だとしても、私は気にしませんよ。誰のものであったかなど問題ではなく、最後に誰のものになったかが重要なのです」

「……女というものを、まるで領土のようにおっしゃるのですね」

「どちらも同じように尊く、恵みを与え、男を惹きつけるものです。違いますか？」

とっさに言い返す言葉が見つからない。日輪は負け惜しみのように言った。
「わ、わたくしは許婚に刃をねじ込むような女です。どうか油断なされませぬよう！」
「――いいねえ、実にいい」
突然、エドマンドの声音が変わった。貴公子然とした顔つきが崩れ、野性味がにじむ。
ざらりとした本性が透けて見え、日輪は怯んだ。
「俺の首が欲しけりゃ、いつでも狙ってくるがいい。だが、おまえは俺に従うのが正解だ。なぜなら、帝王が正しいから」
「……た、大した自惚れですね！　では、いつか本当に寝首を」
「日輪！　もう黙りよし！」
髪を引っ張られる。綺羅が日輪の頭を押さえ、強引に下げさせた。
「まあまあ、ごめんください……しつけのなっとらん娘で、恥ずかしわぁ……！」
「いえ、素晴らしい教育です。実に俺好みのご令嬢だ」
エドマンドは日輪の前を離れ、ソファの上にふんぞり返った。
「表向きの挨拶はもう結構。普段のようにふるまってくださってかまいませんよ。近くにいるのは俺の腹心――一人、違うのも交じってるがね」
一同の視線がメイドに向く。メイドは聞こえないふりをしていたが、身の危険を察したらしく、弾かれたように扉へ向かった。
弓削とディラックが同時に反応した――が、彼らより早く動いた者がいた。

障子を破るようにたやすく、出入口の扉が破られる。

廊下から白い手が突き出され、そのままメイドの首をつかみ、片手で軽々と吊り上げた。手の主はメイドよりも小柄な、乙女型自動人形だ。髪は金色だが、顔立ちは東洋人ふうで、はっきり言えば、雪月花にそっくりだった。

エドマンドが笑い出し、自動人形に注意した。

「殺すなよ、七號。そいつはとんだ拾いもんだ。まったくもって、俺は世界に愛されている。まさか、こんなところで手に入るとは思わなかった」

「うぅ……陛下が、今回のご結婚を考え直してくださるなら……っ」

「人形風情が何を条件つけてんだ。解体すぞ糞が」

自動人形がしくしくと泣き、メイドはじたばたと苦しげにもがいた。弓削と綺羅はあんぐりと口を開け、呆然とその乙女型自動人形を見つめた。

表情を硬くして、綺羅が問う。

「陛下……いま、七號て……言わはりましたな……？」

「ああ、言った。なるほど、貴女には因縁のある道具だな？」

「へえ……それに、そのメイド――ただの間者ではないと？」

ほとんど直感的に、日輪はメイドの正体を悟った。かつて共に戦った仲間の中に、変装の魔術を得意とする者がいた。

もし、このメイドが彼女なら。

拾い物、というエドマンドの言葉が、具体的な脅威として迫ってくる……。

エドマンドはにやりとして、人を食ったような調子で言った。

「積もる話は後にして、先に乾杯といこう。歴史的な結婚と、世界帝国の夜明けに」

世界帝国。その不穏な単語が日輪の胸をかき乱す。

エドマンドがなぜ日輪を妻に選んだのかを、やはり直感で理解する。

土門は日本の高貴な血筋――エドマンドが欲しているのは、その血統だ。

綺羅は何度も首を上下させ、満足げに微笑んだ。

「ほんに大したお人や。世界帝国、太閤さんでもできんかったことやで」

「お祖母さま！　この方は、日の本の……陛下の御身をあやうくするつもり――」

「黙りよし。滅多なことゆうもんやない」

滅多なことを言っているのはどっちだろう。日輪は絶望的な気分になった。

「結婚式が楽しみどすなァ。上等な白無垢、ご用意しますえ」

「日本のドレスか、そりゃあいい。結婚式は派手にいこう」

動き出した歴史の歯車が、加速度をつけて回り出す。そんなビジョンが脳裏をよぎったが、その回転を止める術は日輪にはなかった。

（これも一応、『準決勝』って言うのかね？）

そんなことを考えながら、雷真は闘技場へ続くゲートをくぐった。

空席だらけの客席から、意外にも大きな拍手が飛ぶ。これまでの戦いが走馬灯のように駆け巡り、ガラにもなく感傷的になった。

——ついに、きた。ここまで。

そっといろりを盗み見る。いろりは半日前、綺羅の鬼によって半壊に追い込まれている。修復は不十分のはずだし、何よりも精神状態が普通ではない。行方知れずの小紫と、寿命が近付きつつある夜々——二人の妹を案じ、胸をつぶしているだろう。

雷真の視線に気付き、夜々が早速へそを曲げた。

「雷真！　こんなときまで姉さまに見とれて！」

「夜々もこんなときまでバカ！　つうか」

笑ってしまう。いつもと変わらない相棒の様子に、どれだけ救われただろう？

「昨夜も昼間もさんざんだったってのに、全然変わらないのな？」

「もちろん、夜々の愛は永久不滅です！」

手痛い裏切りに遭った直後だけに、相棒の言葉は胸に染みた。そんな気持ちはおくびにも出さず、雷真は話をすり替えてごまかす。

「いや、学院がさ。あんだけ色々あったのに、まだ学院のカタチをしてて、のんきに夜会をやってる。世界が滅んだって、ここだけ残ってる気がするぞ」

「だって、ここは魔術師の学校ですから。魔術師は前にしか進めないんですよね？」

背中を押すように、微笑んで言う。雷真は弱気な思考を捨て、うなずいた。

そのとき、客席の最前列からシャルが飛び降りてきた。

普段通りの格好だが、ひたいに真新しい包帯を巻いている。雷真はぎょっとした。

「シャル！　おまえ、怪我して……」

「きたのね馬鹿！　心配かけて変態！　ちゃんと無事なの朴念仁っ？」

「悪口混ぜんな！　つか、おまえの方こそ大丈夫かよ？　それに、アンリは……？」

「もちろん無事よ！　私のこれだって、ちょっとこすっただけ！」

まぶしい笑顔を向けてくれる。その表情に、雷真は心底から安堵した。

と同時に、大きな罪悪感がこみ上げ、呼吸が苦しくなった。

「……悪い、シャル。俺はおまえに謝らなくちゃならない」

「何つまんないこと言ってるの。さっきからロキがお待ちかねなのよ？　さっさと舞台に上がって、ちょっとはいいとこ見せなさい！」

「――おまえは参加しないのか？」

「私の夜会は終わったわ。あとは貴方とロキの戦いよ」

ほがらかに言う。今夜のシャルにはまるで屈託がない。長らく彼女を苦しめていた伯爵家の問題が、本当に片付いたのだろう。

雷真が申し訳なく思っていることも、シャルにはわかったはずだ。わかっていて、言わ

せないようにした。その心遣いを嬉しく思い、雷真も笑顔を返した。
「そうか。わかった。ありがとう」
シャルが道を開ける。シャルもシグムントも小紫の不在には触れなかったが、別の者が遠慮なく指摘した。
「どういうつもりだ、底なしバカ。一人、足りないだろう？」
舞台の上から、ロキが冷ややかな目を向けている。
ロキの言葉には確信があった。つまり、八重霞を看破した上で、小紫がここにいないと言ったのだ。ロキもまた雲雀と同じ〈心眼〉に到達しているらしい。
彼にごまかしは利かない。雷真は観念して、小紫がいないことを認めた。
「ちょいと事情があってな。今夜は小紫を温存させてもらう」
「ふざけるな！」
ロキは舞台を飛び降り、雷真の胸倉をつかんだ。痛みで雷真の顔が引きつる、その些細な変化さえ、ロキは見逃さない。声を殺し、至近距離から厳しく言った。
「オレの目は節穴じゃない。こんな体で、三体そろわず勝負になるか！」
「……なると思うぜ。俺だってこの半年、遊んでたわけじゃねえ」
「底抜けバカめ！　そんな勝負に意味はないと言っているんだ！」
シャルがハラハラした様子で——妙に頬を染めて——見守る中、ロキはマントをばさりとひるがえし、舞台ではなく入場ゲートの方へ歩き出した。

「こい、ジブリール」
機械天使を呼び寄せ、闘技場を出て行こうとする。客席に動揺が広がった。
「ちょ……おいロキ！　どこ行くんだよ！」
「花の乙女を探しに行く。姉貴、手を貸してくれ」
「うん！」
客席でフレイが立ち上がる。シャルもやれやれと言った様子で、
「まったく世話が焼けるわね～。貴方たちはここでじっとしてなさい」
雷真は愕然とした。既に利害関係のないシャルはともかく、対戦相手のロキ、その姉のフレイまで、小紫を探してくれると言っている。
雷真の戸惑いをよそに、仲間たちはさっさと闘技場を出て行った。
「何だよ……あいつら……」
「皆さん、お優しいですね」
夜々は嬉しそうに微笑む。それで、雷真も改めて、彼らの友情に気付かされた。
夜々はきりっと表情を引き締め、
「私たちも行きましょう雷真。じっとしてなんていられません！」
「……そうだな。任せっきりにするなんざ」
「いけません！　自重してください！」
早速駆け出そうとする二人を、いろりがあわてて引き止めた。

「昼の騒動をお忘れですか！　雷真殿はいざなぎさまに盾突いたのですよ！」

もちろん、忘れてはいない。日輪を力尽くで誘拐し、綺羅に攻撃を加えた。夜々は綺羅が乗った車を投げ飛ばすことまでした。

「日輪さまをいざなぎ当主に据え、新たな〈お館〉の威光で我らの狼藉を不問とする――などという遠大な計画は、最初の一歩でつまずいたことになります。現時点で、雷真殿はただの暴漢です。軍が雷真殿を狙っていてもおかしくありません！」

「……そうだな。そうだった」

「幸い、ここは学院長殿の目が光っています。これだけの人目があれば、日本軍も手出しはできぬでしょう。ですが、闘技場の外では何が起こるか……」

「わかった、わかったよ。自重する」

やっと、ここまできたのだ。今夜ロキに勝てば、赤羽天全にも魔王の座にも手が届く。その絶好機を判断ミスで失いたくはない。

（……くそったれ。我ながら、小利口になったもんだな）

自嘲が浮かぶ。いつから自分は、こんな臆病になったのだろう？

以前はもっと自由に、思うがままに生きていた気がする。身の安全など二の次で、己の信念のみに従い、好き勝手をやっていた。

だが――硝子とも約束したことだ。魔王になって、夜々を生かす方法を探す。今日まで尽くしてくれた相棒に、それが唯一、雷真のしてやれることなのだ。

自分はもう失敗できない。誰にも負けられない。苦戦すら許されない。その切迫感が己を縛る枷となり、かえって昼間の失態につながった。ソーネチカのときも、それが判断の遅れを生み、ほかならぬ夜々に叱られた。

こんな自分が、本当に歯がゆい。

雷真は苦い、苦い、苦笑いを浮かべた。

「……人に助けてもらうだけってのは、この世で一番つらいことかも知れない」

「それがわかったのなら、君はもっと強くなれるさ」

不意に、ゲートの奥から声がかかった。

ロキたちが出て行った方、薄暗い廊下に紳士が立っている。麗しい夫人をともなってい て、二人が現れただけで、照明がともったように明るくなった。

その紳士が誰か、理解するのに数瞬かかる。それも仕方のないことで、以前会ったときの彼は、もっとやつれて、みすぼらしかった。

「ひょっとして、シャルの親父さん——エドガー・ブリュー伯爵かっ？」

「久しぶり、というほどでもないかな。また会えて嬉しいよ、ライシンくん」

口ぶりは穏やかなのに、どっしり据わった魔力の質は、力強く、勇壮だった。かつての衰弱ぶりが嘘のようだ。力感に圧倒されながら、雷真は深々と頭を下げた。

「すまない、親父さん……」

伯爵は『ほう』と息をついた。雷真は畳み掛けるように、

「以前、生意気を言っちまったこと、謝りたい。許してくれ」

「――自分の手で娘たちを護れ、と言ったことかい？」

「そうだ。その上、俺はあんたとの約束も果たせず……アンリをどうしてやることもできなかった。銀薔薇は結局、あんたが倒してくれたんだってな」

「あれは私の宿敵だった。君の代わりに戦ったわけではないし、そもそもアンリは私の娘だよ。それでも君は、私に謝りたいと言うのかな？」

「ああ。この通りだ」

　さらに頭を低くする。夫妻が顔を見合わせ、ふふっと笑みをこぼした。

「ところが私たち夫婦は、君にお礼を言いにきたんだ」

「え？　礼……って、何の？」

「君がしてくれたこと、そのすべてに。君は何度も、私の代わりに娘たちを護ってくれた。約束通り、私の帰還までもたせてくれたじゃないか」

「あんたが間に合ってくれたんだ。それに……これまでのことだって俺の手柄じゃない。相棒や、仲間や、シャル自身が、俺の身勝手に付き合ってくれたから――」

「そう、君の身勝手が始まりだ。君がいなければ、始まっていないことなんだよ」

たとえば今、ロキが対戦相手の雷真のために力を貸してくれるのも。

フレイとシャルが当たり前という顔で、それを手伝ってくれるのも。

もっと言えば、彼らが生きてこの場に存在しているのも。

雷真が無茶をしようとしなければ、あり得なかった未来――
エドガーはぽん、と雷真の肩を叩いた。
「もっと自分に胸を張れ。君はブリューの恩人だ」
自責の念に苛まれていただけに、エドガーの言葉は涙腺にきた。
エドガーがくれたのは、飾り気も洒落っ気もない、素朴な言葉だった。だが、この先の人生において、幾度も雷真を支えてくれるに違いない、強靭な言葉でもあった。
雷真の様子を見て、エドガーは見透かしたように笑った。
「どうやら自分を責めているようだね？　自分はもっと上手くやれたはずだ――と、そう考えているんだろうけど、それはとても危険な兆候だよ」
「危険？　なぜだ？」
「それは自惚れだ。そういうとき、人は全部を一人で背負い込もうとしているものさ」
「……親父さん、俺は今までだって、一人でやってきたつもりはねえんだ。いつだって誰かにすがって……相棒や、仲間に頼ってやってきた」
「では、君が今抱えている悩みは、仲間たちも知っているのかい？」
「――――」
思わず相棒の顔を見てしまう。夜々はきょとんとして、まばたきした。
相棒の寿命が近付いていること、相棒の死を回避するために奮闘していることを、雷真は仲間たちに相談できていない。そんな余裕はまったくなかった。

「今の君は、いつかの私と同じ轍を踏もうとしているのかもしれないよ——なんて」
エドガーは自嘲気味に笑って、再び雷真の肩を叩いた。
「どうか気を悪くしないでくれ。大人はつい、若者のやり方に口出ししたくなるものなんだ。自分はさんざん間違えてきたくせにね」
「いや……ありがとう。参考になった」
重大な手がかりを得たような気がしている。行き詰まりを感じていた雷真に、エドガーの指摘が道を示してくれたような。
「ねえ、私もお話に混ぜて？」
夫人がつついと前に出て、無防備に距離を縮めた。亜麻色の髪はアンリのそれと同じ色で、目鼻立ちは整い、薄化粧が大人っぽかった。
初対面の美人——おまけに友達の母親だ。雷真は硬くなったが、夫人は無邪気に、
「ライシンさんが、シャルの『いい人』なの？」
爆弾を投下した。夜々の髪が反射的に逆立つ。雷真は震え上がった。
「いやっ、そんなんじゃねえ！　デス！」
「あら残念。じゃあ、まだあの子の片おも——」
「お母さまーっ！」
ぶわっと突風が吹き込んで、夫人の前髪をめくれ上がらせた。
夫人は手櫛で髪を整えながら、不満げに犯人を振り返った。

「あら、シャル。戻ってきちゃったの？」
「こんなことじゃないかと思ったの！　お母さまはすみっこで大人しくしてて！」
「まあ！　久しぶりに会った母に、その言い方はあんまりじゃない？」
「久しぶりに会った娘に、今の仕打ちはあんまりでしょ!?」
引きずるようにして、雷真から母を引き離す。シグムントが苦笑して、しかし楽しげに、母子のやり取りを見守っていた。
母と娘が遠ざかると、雷真ははーっと深い息をついた。
「ビックリした……あれがシャルのおふくろさんか。すげえ綺麗な母ちゃんだな」
「雷真〜〜〜〜〜その年上好きはどうにかならないんですか〜〜〜〜〜！」
「はあ!?　旦那さんの前で何言ってんだバカ！　人妻だぞ!?」
「雷真はそんなの全然問題にしません！　むしろそういうのが好きなくせにー！」
「阿呆、そんなわけ……どうだろう？」
「やっぱり〜〜〜〜〜！」
ぎゃあぎゃあと不毛な言い争いになる。エドガーがたまらず笑い出し、雷真を大いに赤面させた。いろりが恥じ入り、見えないところで夜々の尻をつねる。
遠ざかるシャルの背中を見て、雷真はいくぶん、気持ちが軽くなるのを感じた。
「シャルのやつ、元気そうだな。あのぶんなら、アンリも本当に……」
「ああ、娘たちは二人とも元気だよ」

エドガーが肯定してくれる。雷真はほっとして、あたりを見回した。
「そういや、アンリはどこだ？　会ってワビを入れたいところなんだが」
「謝罪なんて必要ないと、たった今結論づけたばかりじゃないか」
エドガーは苦笑して、思慮深げな眼差しを遠くに投げた。
「ちょうど今、灰十字の戦士に引き合わせているところだよ」
「魔術師協会に？　一人で？」
「相手は信頼できる魔術師だ。私と妻もこれから向かう。そして一家そろって協会と話し合うつもりだ。昼間の大惨事は我がブリュー家の責任だからね」
「……そうか」
「ライシンくん。これから君は、とてもつらい戦いを経験するだろう」
「え……？」
「君の力になってあげたいが、私にも役目がある。君の戦いに助勢はできない」
予言めいた言葉。エドガーは雷真を見つめ、真正面から言った。
「だが、心はいつも君の味方だ。離れていても、一緒に戦っていると思ってくれ」
右手を差し出す。雷真はその手を握り返し、再会を約束して別れた。

それから、およそ三〇分。
じりじりと燻されるような時間が過ぎた後で、ロキが夜空を飛んできた。

完全統制振動(フラガラッハ)とは違い、風に乗って飛んでいるように見えた。
すっとなめらかに着地して、あごをしゃくる。
「見つかったぞ」
「本当か⁉」
雷真(らいしん)、夜々(やや)、いろりが闘技場を飛び出し、外の木立ちに目を凝(こ)らす。屋外灯の光の下、ガルム犬の群れが駆けてくるのが見えた。
先頭はオオカミ犬のラビ。その首筋にはフレイがしがみつき——
続くコリー犬の首筋に、和装の乙女がしがみついていた。

4

「小紫(こむらさき)！　この、うつけ者！」
いろりが飛び出す。コリーのリビエラがびくっと飛びのき、弾みで小紫が振り落とされた。軽やかに着地する小紫を、いろりが力いっぱい抱きしめる。
「わわっ、姉さま、らんぼう！」
「愚か者っ……おまえといい、夜々といい、心配ばかりかけて……！」
「あの……姉さま？　夜々まで叱られるのは納得いかないんですけど？」
夜々が不満を漏(も)らす。だが、妹の無事を喜ぶ気持ちはいろりと一緒だ。

いろりはとっくに半べそをかいていたが、小紫が本物だとわかると、ひと目もはばからずに泣き始めた。姉二人にもみくちゃにされ、小紫が恥ずかしそうにうつむく。
雷真はほっと息をついた。ひとまず、よかった。
だが――同時に、大きな違和感に悩まされることにもなった。
なぜ、こんなに簡単に見つけることができたのか？
誰かの作為を感じる。もっと言えば、罠の臭いがした。
「小紫、おまえ一体どうしてたんだ？」
「ええっと……」
案の定、言いよどむ。普段は天真爛漫な小紫の顔に、憂いが翳を落としていた。
「とにかく、ごめんなさい！」
「いや、叱ってるわけじゃないんだが……」
雷真は助けを求めるようにフレイを振り向き、ふと、それに気付いた。
「――フレイ、何かいい匂いがする」
「う⁉」
フレイはびくっとなり、ラビの首を抱えて、一緒に退がった。
「犬のにおい？」
「いや、そういうんじゃなくて。花――とか、果物みたいな」
「う、腐った果物……？」

「だからそういうんじゃねえよ！　もっとこう、嗅ぎたくなるような匂いだよ！」
「だからって露骨に嗅がないでよ変態！　ほんっっとデリカシー皆無！」
遅れてきたシャルが怒る。当然と言うか何と言うか、夜々の髪も逆立った。
「雷真〜〜〜〜〜小紫が戻ってきたっていうのに、女狐くんかくんかなんて〜〜〜〜〜！」
外野の罵声がうるさい。確かに、客観的には変態的かつ、場にそぐわない言動だった。
雷真は大いに反省し、急いで話を戻した。
「そんなことより小紫だろ！　見つけてくれたのはフレイか？　どこにいたんだ？」
「う。すぐそこの、林にいたよ？」
「あ、あのね、地下に隠れてたの！」
小紫が早口で言い添える。——やはり、おかしい。
「地上ではおっきなヘビが暴れてたんだよね？　だから、執事さんと一緒に地下の洞窟に逃げ込んだの」
「——そのシンはどうした？」
演技ではなく、小紫は目を丸くした。心配そうに訊き返す。
「執事さん、戻ってないの？」
「いや……それはアリスに問い合わせてみないとわからないんだが」
つくづく、状況が未整理なのを実感する。今夜の夜会が終わったら、仲間たちを集めて情報交換会を催したいところだ。

小紫はシンを探すように視線を巡らせ、つぶやいた。

「執事さんね、ずっと私を守ってくれてて……。私たち、学院長さんのお邸で、いざなぎのお婆ちゃんを警戒してたでしょ？」

そうだった。日輪を誘拐した直後、雷真はアリスの手引きで学院長公邸に身を潜めた。そのとき、綺羅の襲撃を警戒し、シンと小紫が見張りに立ったのだ。

「だけど、お婆ちゃんがきた瞬間を見てないの。私たち、どこかに引きずり込まれた……みたいな感じで。気がついたら、別の場所にいた……」

「それって、シキガミの転移じゃない？」

シャルが横から言う。雷真も真っ先にそう考えた。

だが、シンも小紫も禁忌人形で、魔術に対する耐性が強い。抵抗を無視して転移させられるのは、日輪や綺羅のような『達人級の』魔術師に限られる。

「式神！　私もそう思う！」

やけに力強く、小紫は同意した。

「飛び出した先は地下に続く入口でね、しばらく執事さんと一緒だったんだけど、途中ではぐれちゃって。やっと地上に出てきたら、もうこんな時間だったの！」

雷真は沈黙した。小紫の言葉は、はっきり言って白々しい。

ただ、問いただしたところで、正直に答えてくれるかどうか。言ってしまえることなら、こんなふうにはぐらかしはしない。

こちらも何か知っているのか、夜々がもの言いたげに小紫を見ていた。雷真と目が合い、ちょっとあわてて、足もとに視線を落とす。

(夜々まで……？　何だってんだ、一体？)

おそらく、雷真が気を失っているあいだに、何かがあったのだ。そしておそらく、小紫の怪しい言動も、夜々の沈黙も、同じものに根ざしている。

雷真に隠す理由は何だろう？　シャルやフレイの前では言えない？　それとも——

(俺に、言えない？)

たとえば、雷真が誰より憎む人物に関わりがある——とか。

いずれにせよ、強く訊いて頑なに拒絶されれば、戦いの前に余計な不和をもたらすことにもなる。かなり迷った末に、雷真は『問い詰めない』覚悟を決めた。

「小紫、ケガはしてないんだな？　ちゃんと戦えるか？」

「もちろん！　私が姉さまたちを助けるよ！」

きゅっとこぶしを握り、決意のこもった声で言う。小紫がもう夜々の状態を理解していて、健気な覚悟を決めていることに、雷真は少し胸を痛めた。

「いろりはどうだ？　もう落ち着いたな？」

「は、はい。お見苦しいところをお見せしました」

「それは気にすんな。夜々はどうだ？」

雷真は相棒の顔を見下ろした。夜々はきりっとして、うなずく。

「もちろん準備万端です。お布団での延長戦にも対応できます！」
「よし。なら行こう」
「お布団へ!?　まさか、雷真もついにその気に……!?」
「いきなり不安になったぞ！　真面目にやれ馬鹿！」
べちっとデコピンをかます。夜々は痛そうに額をさすり、そして笑った。
いろりも、小紫も、引き締まったいい顔をしている。
（大丈夫。これなら十分、ロキと戦える）
雪月花の三姉妹がそろった。ロキのジブリールにも対抗できるはずだ。
「シャル、フレイ、小紫を探してくれて、ありがとよ。この恩は――」
「舞台の上で返してくれるのよね？」
シャルが言葉をかぶせてくる。雷真は力強くうなずいた。
「ああ。ちゃんとロキを満足させる」
「それってどういう意味!?」
「何だその異様な食いつき！」
　フレイは心細そうにこちらを見ていたが、シャルにうながされ、犬たちとともに客席の方へと戻って行った。
　雷真は三姉妹とうなずき合い、一斉にゲートに飛び込んだ。
　通路を抜けた先、まばゆいライトの下に、一番の好敵手が待っている。

5

観衆の熱気を心地よく感じながら、ロキは舌打ちした。

（ふん、相変わらず手間のかかる奴だ。素直に『助けてくれ』と言えばいいものを）

自然と笑みがこぼれる。そんな自分に気がついて、今度こそ本当に不機嫌になった。

甘さは、いらない。

雷真を全力で叩きのめし、魔王になる。そうしなければならない。

ハーフマントをつかみ、胸に手を当てる。胸板の下で、莫大な魔力を引き出す人造心臓が脈打っている。いつ止まるかもわからない不安定な〈実験〉装置。これをどうにか生身に戻し、姉を当たり前の人間に戻す――それがロキの目的であり、存在理由だ。

臓器の製造は魔術師協会が定める倫理規定に違反する。表立って研究するには、魔王の座が必要不可欠。それでなくとも、ロキに敗北は許されない。

客席に目をやる。ちょうど、姉のフレイが元の席に納まるところだった。そのすぐ後ろに、黒フードの幼女――に見える――ドロシーが陣取っている。

ロキを見て、ドロシーは挑発的に笑った。『監視しているぞ』というアピールだ。ロキとフレイの姉弟は現在、黒薔薇の支配下にある。

『心なさい。おまえが敗れたら、姉は死の国に戻らねばなりませんのよ』

黒薔薇の声が鼓膜の奥に甦る。姉がすまなそうにロキを見つめているのに気付き、ロキはふいっとそっぽを向いた。

（そんな眼をするな。すべて、オレに任せておけ）

秘めた想いは口には出さない。決して漏らさず、己の内で加圧する。

腰に手をやり、ベルトに吊るした魔具のブレードをつかむ。〈熱風操作〉を仕込んだ鋼の刃――この武装に賭けても、負けるわけにはいかない。

「よう、硬くなってんな」

客席の最前列から間延びした声がかかった。

声の主は〈下から一番目〉ことヴェイロンだった。彼はロキをにらみ、ひと言、こう言った。

仕切りの柵に足を投げ出し、くつろぎ過ぎた姿勢でこちらを見ている。

「勝てよ」

「……オレを応援するということか？　ライシンではなく？」

「おまえが勝った方が面白えぜ。そもそも俺はあの最下位野郎が気に食わねえ」

唾棄するような口ぶり。だが、その声音には不思議と温度があった。

――素直じゃない。だが、わかる。

共犯めいた空気。それに水を差す形で、となりのオルガがしれっと言った。

「では、私は〈下から二番目〉の方を応援しようか。声援が偏ってはアンフェアだ」

「おい剣帝！　あの色魔はマジで潰せ！　殺せ！」

「くだらん！　オレたちの勝負に貴様の嫉妬をからめるな！」
「何を優等生ぶってやがる。てめえの姉貴だってライシン側だぞ？」
「わかった。色魔は殺しておこう」
ヴェイロンとオルガがそろって目を丸くした。ロキ自身、自分にこんな冗談が言えたのかと驚いている。ロキは肩の力を抜き、二人に微笑を向けた。
「負けてやるつもりはない。心配せずとも、八百長なしで叩きのめすさ」
「それを聞いて安心したよ」
という誰かの言葉が、ヴェイロンとオルガの後ろから聞こえてきた。
客席の通路に、いつしか浅黒い肌の青年が立っている。
『アスラ！』
ロキ、オルガの声が重なる。それは確かに、アスラ・オーエンだった。
銀薔薇に都合よく使われていた学生だ。一時は学生総代にもなったが、その身分は剥奪されている。武装した警備員が二人随行し、手に魔封じの手錠をかけられていた。
オルガが笑みを消し、探るような目をした。
「私はまだ連絡を受けていないが……謹慎が解けたのか？」
「おかげさまで継続中だよ。だけど学院長に無理を言って、見学の許可をもらったんだ。二人の勝負がどう決着するか、この眼で確かめたくてね」
爽やかに微笑む。真の力を発揮したときだけ金色に輝く瞳は、今日は漆黒にきらめいて

いる。その瞳の中に、かつての焦りや、惑いや、やり場のない怒りは存在しない。

オルガも警戒心を解いたようだ。膝送りで席を詰(つ)め、アスラを迎え入れる。アスラは礼を言い、オルガのとなりに腰を降ろした。

「ここからじっくり見せてもらうよ、ロキ。たった半年で、君とライシンがどこまでの力を得たのか、君たちの信念が君たちにどれほどの力を与えたのかを」

「好きにしろ。だが、それを見たら、どうだと言うんだ？」

「君と彼は己の意志で……悪い言い方をすれば、私情で戦っている」

「その通りだ。オレたちは大義のために戦ってるわけじゃない」

「それでいいんだ――と、僕もそう思えるようになった」

意外なことを言う。アスラは自然体のまま、穏やかに語った。

「僕はずっと、力ある者は高潔でなければならないと考えていた。魔王(ワイズマン)の称号は国家間の力関係すら左右し得る。ゆえに、私利私欲で夜会に臨むことなど許されないと」

「……今は、違うのか？」

「そうした大義を掲げることもまた、私情に過ぎないと思うようになった。君たちが抱く肉親への情は大義の根でもある。その行き着く先を、僕も確かめてみたい」

「あんたの言うことは、毎度ながら小難しい」

「それはすまない――」

「相変わらずで、安心した」

アスラは目を見開いた。この〈剣帝〉からそんな言葉が出るとは思わなかったのだろう。ロキ自身、やはり驚く。だが、不思議はない。アスラが変わったように、ロキも変わったのだ。ヴェイロンも、オルガも、皆変わった。

（あのバカと関わった奴は皆、バカが伝染するんだろうさ）

ロキとアスラが笑みをかわす。その様子を、近くの席からシャルが盗み見ていた。

シャルは妙に赤らんだ顔で、苦しげに胸を押さえる。

「どうしよう、シグムント……！　アスラもアリかもしれないの……！」

「君が何を言っているのかまるでわからんが、いよいよだな」

「つきゃー、興奮してきたわ！　反目したり共闘したりで紆余曲折を経た二人が、ついに今夜、衆人環視の中で確かめ合っちゃうのね！」

「そうだな。互いの力と技を」

「そっち!?　そ、そうね！　もちろんそうよね！」

「……ほかに何があるのだ？」

「ええっと、つまり、想いの強さ……的なもの！」

取り繕ったように言う。理解できず顔を見合わせる一同の周囲で、わあっと大きな歓声があがった。入場ゲートをくぐり、雷真と人形の三姉妹が入ってくる。

「まったくおまえは……蝶のようにふらふらと……うつけ者……！」

小紫の手をしっかり握って、いろりが愚痴る。

一方、小紫はうんざりした顔でため息をついた。
「あのね、姉さま……それもう何十回目かな？　この短時間でさー」
「ダメですよ、小紫。姉さまに心配かけちゃ」
「他人事のように申すな夜々！　おまえも大概、無茶がすぎるのだ！」
ぎゅっと妹たちを抱え込み、離すまいとする。そんな三姉妹のやりとりを、雷真は苦笑で見守っていた。先刻よりもリラックスして見える。
小紫がそろったことで、戦力だけでなく、精神的にも準備が整ったのだろう。
（面白い。それでこそ倒し甲斐がある）
気持ちが昂ぶるのを感じながら、ロキは舞台の中央に戻った。
雷真もまたそれにならう。一歩ごとに張り詰める緊張感が心地よい。あちらも同じ気分でいることは、なぜか直感でわかった。
雷真は気楽な調子で、こんなことを言った。
「待たせて悪かったな。佐々木小次郎になってねえか？」
「コジロー？　誰だ、それは？」
「大昔の剣豪だよ。ライバルの武蔵が決闘に大遅刻した挙げ句、剣じゃなく櫂で戦うとか言い出したんで、カリカリしすぎて負けたって伝説だ」
「ならば無用の心配だ。オレの方が貴様よりよほど落ち着いている」
ロキは声のトーンを下げ、観客に聞こえないくらいの声量で言った。

「戦えるんだな？」
「おかげさまでな」
　ロキの眼力は、雷真が深手を負っていることを見抜いている。だが、互いにこの機会を逃したくないし、逃せないということも、よくわかっていた。
　雷真はにやりとして、煽るように言った。
「他人の心配してる場合か？　おまえだって昼間の実戦でズタボロだろ。何なら棄権してもいいんだぜ？　俺は不戦勝でも構わねえぞ？」
　挑発的な言葉の裏に、雷真なりの気遣いが潜んでいる。ロキが気兼ねなく戦えるように、そんな言い方をしているのだ。だから、ロキも敢えて嘲笑を返す。
「ぬかせ半死人バカが。オレはほとんど無傷、不安があるのは貴様の方だ」
「ふざけんな元気一杯バカ。俺は怪我してるのがデフォルトなんだよ」
「つくづく腐乱死体バカだな。いい加減、怪我をしない立ち回りを覚えたらどうだ？」
「余計なお世話だ健康体バカ。人間は痛い思いして利口になってくもんだろが」
「なってないからそのざまなんだろう？」
「そりゃ、まあ……そうか」
　互いに噴き出しそうになって、どちらも悪口を引っ込める。
　ロキはそっと左手を上げ、かたわらの機械人形に魔力の連絡をつないだ。
　雷真も両手で印を結び、それから左右に開いて、三姉妹に魔力を送った。

お互いに、今は感謝を口にしない。
その代わりに、こう言うのだ。
「劣等生が。今日こそ勝負をつけてやる」
「上等。恨みっこなしだ」
「恨みはしない。勝つのはオレだ」
「言ったな？　本当かどうか――試してみようぜ！」
三姉妹と機械天使がそれぞれに身構え、観客のボルテージが上がっていく。
場内の拡声器を通して、再度、執行部のアナウンスが響き渡った。
『闘技場にお集まりの紳士淑女の皆さま、大変長らくお待たせいたしました。改めまして、第百位〈下から二番目〉対、第九九位〈自ら廻る焔の剣〉――』
歓声が沸きあがり、『開始！』の声がかき消される。舞台上では魔力の青白い焔が炸裂し、二人の魔術師とその自動人形がとっくに躍動していた。
奇しくもそれは、夜会第一夜、開幕戦と同じカード。
因縁の戦いの火蓋が、ついに切って落とされたのだ。

Chapter 2　死力を尽くして

1

先手を取ったのは、ロキだった。

「刻んでやれ、ジブリール」

『Yes, master. I'm ready』

ジブリールが浮き上がり、両手を広げてスピンする。

腰の翼がはためき、金属製の羽毛が千切れ飛んだ。その一枚一枚が、うすく鋭利な刃だ。木の葉のように軽やかに、かつ機銃のごとく激しく、三姉妹に降りそそぐ。

雷真と三姉妹は飛びのいてかわす。刃はすっとなめらかに、石造りの床に突き刺さった。恐るべき切れ味だが、本当に恐ろしいのは、その鋭利さではない。

刺さったはずの刃が、こつ然と消える。

「――転移だ！　いろり！」

「はい！」

大気が氷結。間一髪、八方からの刃を氷の防壁が受け止めた。氷壁が削り取られ、砕け

た破片がしぶきとなる。
しぶきが照明を弾き、シャンデリアのごとく輝く。きらめきで視覚が奪われたその一瞬に、ジブリール本体が動いた。
完全統制振動とは違う軽やかな挙動で、氷壁の破れ目から突っ込んでくる。
「夜々！」
どうしろと言う必要はない。相棒は雷真が意図した通り、真上に跳んでいた。
溜めていた脚力を解放し、下から相手を迎撃する、大技〈ひさぎ太刀影〉。相手の侵入ルートを限定した、雷真の作戦勝ち――
とは、いかない。ジブリールの存在が希薄になり、夜々の一撃をすり抜けた。
ジブリールが消え、空間を飛び超える。そうして、いろりの背後に再出現。同時に全身のパーツ位置を入れ替えて、長剣の姿に変形した。
裏を取った。おまけに必殺の間合い。だが、いろりはたやすい相手ではない。
ジブリールから紅蓮の炎が、いろりから純白の冷気が噴き上がり、激突する。
せめぎ合いは、あちらに分があった。火炎の刃がいろりの首を斬り飛ばした――かに見えたが、あいにく、それは八重霞の幻影だった。
空振りでジブリールの姿勢が泳ぐ。その隙を突き、小紫が虚空から斬りかかった。
空中で二度、三度と斬りつける。小紫の影がいくつも現れ、標的をしぼらせない。小紫の攻撃は軽く、決定打にはならないが、時間稼ぎには十分だ。

その間に夜々が天から戻ってきて、落下速度を生かした、稲妻のようなかかと落としを見舞った。大地も叩き割る一撃を、ジブリールは盾に変形して受け止める。
(今度は完全統制振動か!)
雷真が思った通り、盾は夜々の蹴りに耐え、金剛力と拮抗した。しかし——
「や——ああああ!」
夜々が吠え、連続攻撃に移行する。こぶし、ひじ、膝、かかと——体術を生かした乱打により、ジブリールのボディが軋みを上げ始めた。
完全統制振動は高性能だが、持続力ではこちらに分がある。ロキは正面からの我慢比べを嫌い、ジブリールを剣に変形させ、夜々を斜めにいなした。
今度は夜々の体が泳ぐ。ロキはジブリールを引き戻し、自分の腰から魔具のブレードを抜いて、剣の姿の機械天使に叩きつけた。
二本の剣が空中で交差。魔具から火焔があふれ、ジブリールを焼く。
(自分の相棒を焼いてる……?　何のために……?)
戸惑う雷真に、小紫の警告が飛んだ。
「気をつけて雷真!　たぶん、火を浴びると強くなるの!　不死鳥——!」
ゆっくり説明する暇は与えてもらえない。燃えるジブリールの羽が切っ先に集合し、花びらのように規則正しく並んで、熱を一点に収束させた。
たくわえ、そして解放。壮絶な熱量が、空中の夜々に放たれる。

周辺の氷壁が蒸発し、水蒸気が爆発的に膨張する。荒れ狂う爆風が渦を巻き、吹き返し、逃げ場を求めて天へと噴き上がった。

水蒸気は上空まで到達したらしい。高所で冷やされ、雹となって降ってくる。

ガンガンと激しい音を立て、雹がかまくらの屋根を叩いた。

——いろりが築き上げた、氷のシェルターだ。熱線が到達する寸前に、半球状の防壁を展開し、熱と衝撃をそらしている。

融け落ちる屋根をかわしつつ、雷真は冷や汗をぬぐった。

「助かったぜ、いろり。あやうく全滅するところだ」

「いえ。雷真殿の〈糸〉あればこそです」

氷壁が崩れ、瓦礫のように積み重なる。その上に、ロキがふわりと降りてきた。

「しのいだか。そうでなければ興醒めだ」

お互いに大魔力を突っ込んだ直後なので、軽く息が弾んでいる。なぜだか愉快な気分になって、二人の顔に笑みが広がった。

観客が今さらどよめく。息もつかせぬ瞬時の攻防、学生離れした技術と威力の応酬は、魔術界の名士たちであっても、衝撃的な内容だったようだ。

そのどよめきの中、ロキの静かなつぶやきが雷真の耳に届いた。

「認めてやる。貴様は強い。今の貴様に敵う者は、学院にも数えるほどしかいない」

「おまえに誉められるなんざ、雹でも降るんじゃねえかな？」

「雹なら、貴様が降らせたばかりだろう」
「おまえが滅茶苦茶やるからだ。だがまあ確かに、天下の剣帝さんとやり合える学生は、そんなにはいないだろうぜ。俺も偉くなったもんだ」
「貴様は強い。貴様は強いが――まだオレの域には届いていない」
返事に詰まる。それは雷真の実感でもあった。
技術の面で負けている。たとえば、魔軔だ。雷真が紅翼陣の出力に任せ、強引にやっているような魔力制御を、ロキは技術でやってのける。
彼我の差はわかっていたが、雷真は弱気を見せず、とぼけた調子で言い返した。
「男子三日会わざればって言うぜ？　むしろ逆転してるんじゃねえか？」
「ふん、バカは相手の力も見抜けないのか」
「ふざけんな。おまえの強さなんざ、誰よりも俺が知ってる」
「オレは無謀で傲慢だが、貴様を侮るほど愚かでもない」
それはつまり――
お互いに認め合っている、ということだ。
雷真はふっと笑って、誘うように言った。
「なら、思いっきりやれよな」
「そうしてもよさそうだ」
ロキの口元にも笑みがこぼれ、直後、ジブリールの翼が消えた。

無数の羽の刃が、きれいさっぱりなくなった。その代わり、ロキを中心として、不自然な光の円がいくつも生じている。

流星が燃え尽きる光景に似ている。見た目には美しいが、それが〈剣の結界〉であり、侵入者を消し飛ばす斬撃の嵐であることを、雷真はひと目で見抜いた。

光はゆったりとロキを取り巻く。遅く見えるのは錯覚に過ぎない。それだけ動いて少しの風も感じないのは、ロキが気流すら制御しているからだろう。

「こい」

ロキが手招く。しかし、バカ正直に突撃する必要はない。雷真はいろりに魔力を送り、結界の外から攻撃させた。

冷気を集め、巨大な氷刃を生み出す。これで間合いの外から攻撃すればいい。

巨人の大鉈のような氷刃が、〈剣の結界〉に触れた瞬間、ふわりと霧になった。

ただ、霧になった。蒸発したのか、削り取られたのかもわからなかった。

驚く間もない。流星のような光が結界の外へ飛び出してくる。何が起こったのかわからないまま、夜々が「きゃ……っ」とよろめいた。

遅れて袖がはらりと切れ、夜々の腕に血の線が走った。

「雷真殿！　あの刃、金剛力を貫きます！」

「――小紫、頼む！」

「うん！」

小紫が両手を広げ、八重霞を全開にする。羽の刃が標的を見失い、あたりを幾度か駆け巡った後、再び結界の輪に加わった。

雷真の背筋に、冷たい汗が伝い落ちた。

（こっちが侵入しなくても、あっちから攻撃できるのか……！）

雷真が知っている〈剣の結界〉は、もう少し防御的な技法だった。今のロキは、防御用の結界を維持したまま、遠距離攻撃もできるらしい。

ロキとジブリールは結界の中心にいる。攻撃するには結界を破らなければならないが、遠距離戦は不利——何せ、あちらの攻撃は有効なのに、こちらの攻撃は無効なのだ。

いろりの氷刃をかき氷にしてしまうような結界に、有効な攻撃とは何だろう？　夜々や雷真が接近戦を仕掛ければ、なますどころか、肉片とも呼べない破片にされる。

射撃は無効。侵入は無謀。停止しているのは無策に過ぎる。

（隙がねえ……これが正真正銘の〈剣の結界〉か……）

まさに『男子三日会わざれば』。ロキはさらに技を磨き、ジブリールに適した形に発展させた。これを言うのは何度目だろうと思いながら、雷真はつぶやいた。

「やっぱロキは……凄え奴だ……！」

改めて夜々の腕の傷を見る。傷痕は鋭利で、〈熱風操作〉による溶断ではなく、物理的な切断に見えた。金剛力を刃で切断することなど、通常はあり得ないが——

いろりも気付いたようだ。油断なくロキに備えながら、ささやく。

「魔靭というものでしょうか。雷真殿のお師様も金剛力を貫きました」

「……いや。一枚一枚の刃にそんな技を使ってたら、あっと言う間に魔力が切れる。ロキはそこまで力をしぼってねえ。俺は感じなかった」

「では、魔術回路の効果だと？　あの人形が切断の魔術も搭載していると？」

ジブリールは戦闘中に魔術回路を切り替えることができる。空間転移に、完全統制振動に、飛翔に、火炎に、さらには雷撃すら使うそうだ。そこに、さらに〈切断〉の魔術を加えるかと言われたら……？

「俺が思うに、夜々を切ったのと空間転移は同じ魔術だ。たぶん、飛ぶのも」

『えっ？』

三姉妹が驚きの声をあげる。だが、雷真には確信があった。

結界の中のジブリールは、〈人型〉の形態をとっている。

ここまで、ジブリールは人型で転移と飛翔を、剣の姿で火炎を、盾の姿で完全統制振動を使った。おそらく、変形に付随して魔術回路を切り替える仕組みがあるのだ。

天才イオネラ・エリアーデは、機巧技術で魔活性不協和に挑んだ……はず。

だとすれば、人型の今、ジブリールが扱える魔術は転移……のはず。

「……そんなに楽しいですか、雷真？」

不意に夜々に問われ、雷真は自分が笑っていることに気付いた。

見れば、ロキもまた同じように口角を上げている。

……不思議なものだ。お互いに譲れない目的があるというのに、相手の強さを実感するほど、嬉しくなるのはなぜだろう?

「ああ、楽しい。だから心配すんな。俺に任せろ!」

「ふふ、そんな顔を見せられたら、心配なんて吹き飛んじゃいます!」

夜々も笑ってくれる。雷真は自信を得て、呼吸を整えた。

「それで、雷真殿。どうされるのです?」

いろりが視線を寄越す。雷真は覚悟を決め、三姉妹に方針を伝えた。

「突破口がひとつある。真正面から行くぞ!」

無策とも思える発言に、三姉妹はもう一度『えっ?』と声をそろえた。

2

学生二人のハイレベルな戦いを、学院長ラザフォードは貴賓席から眺めていた。

周囲は教授たちが固めている。見物の国王を護るためにこうなっているのだが、肝心のエドマンドはまだ現れず、王の席は空いている。

舞台には八重霞が効いていて、雪月花の位置は一定しない。現れたかと思えば消え、見えたかと思えばかすむ。ロキは〈剣の結界〉を維持し、待ちの構えを見せていた。

ふと、となりのパーシヴァルがささやいた。

「気付いているか、ラザフォード？」
何に、とは言わない。こちらも言わず、「ああ」とだけ答えた。
「ならば、なぜ対応せぬ。あの数が攻勢に出れば、とても防ぎきれんぞ？」
「あちらの行軍理由はあくまでも〈災害復旧〉だ。手出しのしようがない」
二人は舞台から視線を動かさず、学院のはるか外側、市街地に意識を向けた。
数万人規模の英国正規軍が展開し、今も復旧工事を行っている。彼らが設営した宿営地には幾万という避難民が収容され、凍えることなく休息できていた。
軍の迅速な行動はエドマンド王の指示あればこそ。それを妨害するなど、とても許されない。たとえ幹線道路を占拠され、都市機能が掌握されつつあるとしてもだ。
眉間のあたりをもみほぐしながら、パーシヴァルは愚痴っぽくつぶやいた。
「うまうまと市街地に入り込んだものよ……。こうなってみれば、昼間の一件も王の策略だったのではないかと疑いたくなる」
「そうだろうとも。あれは狂王が銀薔薇をけしかけたのだ」
冗談を肯定され、パーシヴァルの白い眉がわずかに跳ねた。
「安直な陰謀論――ではないな？」
「大真面目だよ。この短期間に軍の拘禁を脱し、神話級を持ち出すなど、王の助けがなければ適うものではない。王ご自身はそらとぼけていたがね」
「……そう言えば、王の近衛が王妃を護衛していた、という報告を受けたな。ブリューの

娘が目撃したそうだ」

だとすれば、ラザフォードの推論にも一定の信憑性はある。

ラザフォードはうなずいて、

「奇しくも過去、王妃殿下が機巧師団で学院を攻めた。昼間のような大災害でもなければ、市民は三師団もの軍団を受け入れまい。王が英国軍を市街に入れるためには、それなりの理由が必要だった」

「そのために王妃を逃亡させ、リヴァイアサンを使わせたというのか」

「狂王は大した男だな……。自他ともに認める策士の銀薔薇を転がし、自らは座したまま望みの結果を得た。決断力と統率力を議会と国民に見せつけ、点数稼ぎをしつつ、だよ。そうしてこの最終局面に、三万六千の兵を間に合わせた」

「……そこまでわかっていて、好き勝手に布陣させるのかね？」

「言っただろう。こちらからは手出しのしようがない」

「やれやれ……おまえさんの胆力には驚嘆するよ。軍からの直接攻撃はないと？　おまえさんを悪者に仕立て上げるのは、王妃殿下を転がすより簡単だと思うがね？」

「王は乱暴なやり口を好むが、計算高い男だよ。小麦が実り、ようやく刈り入れのときがきたというのに、自ら穂に火を放つような真似はすまい。今ここで学院を攻め落とすより、神性機巧の誕生を待った方がはるかに利口だ。夜会が無ければ魔王は生まれず、神性機巧の生まれる場所も、持つべき者も、わからなくなるのだからな。無論、英国軍に動きあら

ば、即応するつもりでいるよ。そのための君たちだ」
「調子のいいことだ。……まあ一応、首尾は確かめておくがね」
まだ王が現れないのを確認してから、パーシヴァルは魔術で通信回線を構築した。
『今の会話が聞こえていたかね、ミズ・バレンタイン？』
念を用いて会話する。斜め後ろの席で、五十過ぎの女教授が軽くあごを引いた。
『心配なさらずとも、ご所望のものはそろいつつあるよ。解毒薬の次は猛毒をお望みとは、何とも節操がないねえ。これが医学部のやることかい、老いぼれ総代さん？』
パーシヴァルの頭をにらむ。パーシヴァルは渋い顔でラザフォードに言った。
「〈薬学部〉が幻となったこと、まだ根に持っているようだ」
「新学部創設の件か。私は賛成だったのだが」
「教授会としては反対だ。薬学と医学は決して切り離せぬ」
パーシヴァルは取り合わず、同じ回線を拡張して、遠方に呼びかけた。
『サンジェルマン。そちらはどうだね？』
『監視を続けております。軍の学院包囲は着々と進行中、と言ったところですな』
サンジェルマンは闘技場ではなく、市街地の方に出張っている。軍の陣容と動きを見定め、敵の計略を探るのが役目だ。
『おまえさんは戦史の大家だ。軍略家の意見を訊きたいが』
『あちらの警戒も厳しく、なかなか内情が探れません。ただ、どう見ても包囲戦の構えで、

主要な道路を封鎖しています。明日にも夜会が終わろうというのに、包囲とは解せませんな……。何にせよ、監視を続けさせます』
『狂王はおそらく奇策を好む。数を頼まぬ戦術も考慮に入れてくれ』
『わかりました。ひとまず、現時点での報告をまとめ、そちらに届けます――』
『おい教授総代！　こっちは全然手が足りねえぞ！　どうなってんだ！』
怒鳴り声のような、強い念が割り込んできた。パーシヴァルは顔をしかめ、
『……圧を下げてくれ、ロックスミス。傍受される』
『俺の暗号化プログラムはそんなヤワじゃねえ。いいから人を寄越せってんだよ！』
『工学部の学生は優先的に回したはずだ。君の教え子たちをね』
『どいつもこいつも夜会の経過ばかり気にしやがって、役に立ちゃしねえんだ。そっちにまだ大勢いるだろ。見学なんぞさせてねえで、〈十三人〉を回してくれ！』
『気持ちはわかるが、それでは目立ちすぎる。こちらが有事に備えていると喧伝するようなものではないかね？』
『どのみちバレてんだから見せつけようじゃねえか、なあ！』
『わかった、わかった。じきに勝敗が決まる。試合が終わり次第、派遣しよう』
ほとんど譲歩になっていないが、あちらも多少は聞き分けたようで、舌打ちしただけで引き下がった。
パーシヴァルが通信を終える。ラザフォードはその回線を譲り受け、より静粛性を高め

て、学院内の一点に念を飛ばした。

『マグナスくん、そちらはどうだね？』

パーシヴァルが驚いた顔をする。マグナスまで動員するのかと、驚いたようだ。

ややあって、マグナスから応答があった。

『こちらは万全です。エリアーデ教授も、もうここにいらっしゃいます』

「マグナスと、エリアーデ……か」

パーシヴァルがあごをさする。その組み合わせが意味するものは……。

ラザフォードの意図を悟(さと)り、パーシヴァルは目を見開いた。

「マグナスに〈絶対王権(マルチコントローラー)〉を使わせる——ギュネスを用いてか!?」

他方、ラザフォードは涼しい顔でうなずいた。

「左様。いざとなれば〈ゴグ・マゴク〉の巨人が都市全域の全魔術回路を掌握(しょうあく)する。その圧政のもとで自由に活動できる人形があるとすれば、それは唯一——」

「神性機巧(マシンドール)だけ……なるほど、おまえさんがのんきに構えている理由がわかったよ。巨人を出し惜しみせぬのなら、軍の機械人形など脅威にならぬな」

ラザフォードは首を縦に振り、最後に、別の方向に意識を向けた。

『アリス』

精神でノックする。——応答はない。パーシヴァルが不審そうに眉をひそめた。

「どうした？　応えぬのかね？」

「……そういうこともあるだろう。後でいい」
何か言いかけるパーシヴァルを制し、秘書官を呼び寄せる。男装のアヴリルが不機嫌な顔で近付いてきた。
短い言伝を与えると、アヴリルは怪訝そうにまばたきした。
「今のを、〈野鳥友の会〉宛てに、ですか?」
「頼む。それから、ついでに――いや、すまない。任せる」
「はっきりしろよクソジジイ」
「いや……本当に、よいのだ」
アヴリルは不満げにしたが、逆らわずに出発した。
パーシヴァルがため息をつき、やれやれというふうにかぶりを振る。
「アリスが気になるのなら、素直に『様子を見てきてくれ』と言えばよい」
「気にはなる。アリシアに託された子だ」
「その言いざま、親子だな。アリスも大概ひねくれて育ったが……」
ふっと眼光をやわらげ、パーシヴァルは己の杖に視線を落とした。
「奇妙なものだな。エデンのはるか東、極東に端を発する兄弟喧嘩が、世界の趨勢を左右するばかりか、巡り巡ってラザフォード父子にまで変化をもたらした」
「変化?　そうかね?」
「ああ。今朝、アリスの診察をしたのだが――おまえさんに嫌みを言ってくれと頼まれた。

あの自己主張、少し前なら考えられなかったことだ」

「しつけを間違ったかな？」

「教授はおまえさんの教育を間違ったようだ」

小さく肩を揺する。その笑いを引っ込め、パーシヴァルは声を低くして言った。

「アリスの肉体は限界だ。とても楽観はできん。もう半年はもたせるつもりだが」

「――そうか。そうだな。わかっていたことだ」

「長くもった方だぞ。当時の主治医は余命五年と言ったのだ」

「感謝する。君のおかげで、あれも不自由なく生きられた」

ラザフォードは乾ききった笑みを頬に刻み、彼方に視線を投げた。

「いくばくかの資産と、いくばくかの名誉、いくばくかのつて――それらを元手に謀略を仕掛け、ここまでくるのに十余年。その総仕上げが、いよいよ明日だ」

「さすがに感慨深いかね？　その通り、これが最後の賭けになる。娘に言っておくことがあるなら、今夜のうちに言っておくがいい。できるだけ、優しくな」

ごく短い時間、ラザフォードは胸が詰まるような違和感に襲われた。

我ながら滑稽なことだ。ラザフォードは肩をすくめ、普段通りのすまし顔で言う。

「言うべきことはすべて伝えてある。今日と、明日の、務めについてな」

「この期に及んで意地を張るな。……後悔するぞ？」

「問題ない。慣れている」

パーシヴァルは大きなため息をついた。

あるいは、歳月の重みが言わせたのか。それともこの〈協力者〉への感謝が言わせたのか。ラザフォードは正面をにらんだまま、噛み締めるようにつぶやいた。

「……私には、父たる資格はない。アリシアの夫たる資格もなかった。わかっていたのだからな、彼女が死ぬことは。わかっていながら、私は妻を見殺しにした」

「すべて、アリスを救うためではないか。そもそも、アリスはアリシアが望んだ子どもだ。死の責任を問うなら、医学部長たる私にも」

「よそう。魔術師は前にしか進めぬもの――君の教えだ」

パーシヴァルが何か言い返す前に、客席にざわめきが広がった。

客席の一角に黒衣の貴公子が現れ、観衆に手を振っている。

エドマンド王だ。王は数人の近衛を引き連れ、悠然とこちらに歩いてくる。近衛の中に一人だけ乙女が交じっていて、強烈な魔性を発散していた。

どうやら自動人形(オートマトン)――それも驚くほど精緻(せいち)な――だ。人体の再現度は花柳斎(かりゅうさい)人形に匹敵している。露骨ではないものの、周囲の教授陣が警戒を強めた。

表面上はにこやかに、ラザフォードは王を迎えた。

「ようこそのお運び、恐悦至極に存じます。お席はこちらに」

「ありがとう。戦いは膠着(こうちゃく)状態のようだね。決着に間に合ってよかったよ」

エドマンドも爽やかな笑みを見せる。一瞬、ラザフォードの胸が騒いだ。

何やら、勝ち誇っているように見えた。魔術師の直感――いや、ただの怯みか？
王が着席し、舞台を見下ろす。そちらでは、ついに雷真が動いたところだった。
三姉妹を巧みに操り、冷気と物理で波状攻撃を仕掛ける。いずれも眩惑を駆使し、高度なフェイントを入れている。それでも〈剣の結界〉を破ることはできない。夜々は光の輪に侵入できず、いろりの氷刃は端から霧へと変えられている。
エドマンドが「ほう」と感嘆の声をあげた。
「〈剣帝〉は空間転移と切断、飛翔を一度にやっているな。我が国が誇る英雄グレンダン将軍を思い出す。私は将軍が好きだった」
意味ありげな視線をラザフォードに寄越す。ラザフォードは感情を殺し、
「英雄？　彼は叛逆者と呼ばれていますが？」
「それは不幸な行き違い、事故のようなものさ。いずれ誤解も解ける」
何と白々しい言い草だろう。ラザフォードは意識して気を鎮めなければならなかった。
エドマンドは面白がるような目をして、さらにラザフォードの神経を逆撫でした。
「将軍と貴方は好敵手だったと聞いているが、実際のところはどうだったんだね？」
「……よき競争相手でした。意見がぶつかることも多くありましたが」
「つまり、よき友だったわけだ」
エドマンドはますます調子づいて、楽しげに続けた。
「将軍は〈棘と密〉という高度な魔術理論の提唱者であり、体現者だった。剣帝が用いて

いるあの魔術回路は、将軍のシルフィード・ディアファネイティ――『風精を触媒とする透明度制御』だろう？」

「いえ、理学部のキンバリー教授が考案したものです」

今度はラザフォードが白々しい台詞を吐く。エドマンドは声をあげて笑った。

「回路の出所をとやかく言うつもりはないよ。優れた技術を公にすれば、それは必ず模倣される。魔術師は貪欲で、浅ましいものさ」

知ったふうなことを言う。が、ラザフォードも同じ見解だ。王は続けて、

「〈焼却の魔王〉でさえ〈疎と密〉の習得には歳月を要したと聞く。あの若さで使いこなすとは信じがたい。よい教育を施しているね、学院長」

「もったいなきお言葉です。……ときに、陛下」

一方的にやられているのは面白くない。ラザフォードは反撃を試みることにした。

「かねて、疑問に思っていたことがございます」

「質問を許そう。言ってみたまえ」

「貴方は何をお考えなのです？」

直裁に訊く。となりのパーシヴァルが身を強張らせるのがわかった。

さしものエドマンドも驚いたらしい。取り澄ましていた顔に、野性味がにじむ。

「俺が何を考えているか――って？」

ギラつく野心を黒い瞳にのぞかせ、エドマンドは言った。

「俺の興味はたった二つのものに向いている。第一は、この世を面白くすること」
理解できない解答だった。それでも問い直さず、ラザフォードは次をうながす。
「第二は？」
「この世を救済することだよ。俺が帝王になってな」
「……第一も、第二も、同じことに思えますな」
皮肉が口をつく。王は怒らず、むしろ喜悦の笑みを見せた。
「そうとも。俺が、俺のために、楽しい世界を創るのさ。救世主のようにね」
上機嫌で笑う。その様子を見て、ラザフォードは確信した。
この男は明日、確実に仕掛けてくる。夜会が終わると同時に、必ず。
兵力を結集し、市街を抑えているのは、間違いなくそのためだ。
その予測はかなりの部分で真実だったが、ある部分で決定的に間違っていた。
狂王と呼ばれる男はやはり、常人とは異なる感覚を持っており――
ラザフォードの想定を、少しばかり上回っていたのだ。

3

真正面から行く、と雷真が言ったとき、三姉妹の顔は不安げだった。
考えなしに突っ込む、という意味にとらえたのだろう。それでいい。雷真は敢えて訂正

せず、むしろ煽り立てるように叫んだ。
「上げて行くぞ！　光焔四八環！」
『はい！』
三姉妹の声がそろい、三方に散った。
いろりが散弾のように氷柱を撃ち出す。当然、〈剣の結界〉に阻まれる。だが、雷真はおかまいなしに魔力を送った。
いろりはますます弾速を上げ、氷槍の数を増やしていく。
この押し合いは、雷真に分があった。羽の刃はせいぜい数十枚だが、氷槍はいろりが生み出すものなので、いくらでも数を増やせる。
視界が埋まるほどの氷槍連打。ほどなく刃が前方に集中し、結界全域をカバーできなくなる。背面側のほころびに、夜々が素早く回り込んだ。
猛突進から蹴りで強襲、そのまま格闘戦にもつれ込む。機械天使は手持ちのブレードで応戦し、あくまで結界を破らせない。夜々は再び輪の外へと押し出されたが、ジブリールも前がかりになり、わずかに敵陣が乱れた。
瞬発力では夜々が勝り、大ぶりの斬撃は当たらない。おまけにこのフォーメーション、まだ小紫が機能していない。
氷が削れる轟音の中、ロキの舌打ちが聞こえた気がした。
ロキの眼が小紫を探して動く。八重霞のタイミング如何では勝負が決まってしまう。力

を温存するべきと考えたのか、ロキはジブリールを結界の中心へ引き戻した。

「今だ！　いろり！」

「心得てございます！」

ここぞとばかりに、こちらはさらに猛攻を加える。結界の隙間を縫って、氷柱の一部がジブリールを狙い始めた。

なみの人形使いなら、このまま力で圧し潰せたはずだ。が、ロキは超人的な感覚でジブリールを操り、踊る羽毛のように、紙一重でかわし続ける。

雷真は舌を巻いた。予知能力でもあるのではと疑いたくなる。

「吹鳴四八連！」

『はい！』

紅翼陣を三姉妹につなぎ、陣形を変更。今度は夜々が突出し、音速を超えて結界に飛び込んだ――と、観客には見えただろう。実際には、夜々は音速を超えてはいない。八重霞が知覚を惑わし、速度を数倍に感じさせている。

ロキの認識にも狂いが生じたはず。この状態でいろりの掃射を受けるのは危険だ。

思った通り、ロキはジブリールを変形させようとした。

おそらくは盾に変形し、完全統制振動を使おうとした――はずだ。

その瞬間を、待っていた。

雷真は片手を伸ばし、五本の糸を伸ばす――ジブリールに向けて。

ボディ中枢、リボルバーの弾倉のような部位を狙う。内部でスライドする金属塊を糸でとらえ、念動で引き止めた瞬間、凄まじい魔術抵抗を感じた。

（ぐっ……理不尽に重ぇ！　思った通りだ！）

ここまでの戦いで、二つ、雷真は仮説を立てていた。

一つは既に示した通り、ジブリールが『変形で魔術回路を切り替えている』こと。

そして二つ目は、ジブリールの背中の突起が、魔術回路の容器ではないかということ。

魔術回路を複数搭載し、戦闘中に切り替えて使う――当然ながら、魔活性不協和の原理に抵触する。実現するには『強固な絶縁』を施すしかないが、それではイブの心臓（魔力式動力）で扱いにくくなる。内燃機関を別に搭載し、切り替えのみ機械式動力で行うのは可能かもしれないが、ジブリールが内燃機関を搭載している様子はない。

その代わり、ボディの外にはみ出す形で、謎の突起が存在していた。

（これが魔術回路の〈容器〉だとすりゃ、絶縁箇所は最小限で済む！）

絶縁の問題はこれでクリア。残るは動力の問題だが――

（手品のタネは、ロキの念動だ！）

以前、イオネラが口を滑らせていた。この機構はロキの才能に依存すると。

ジブリール自身に再接続ができないなら、できる者がしてやればいい。つまり、ロキが手動で――その類稀な念動で――魔術回路の絶縁を外し、容器を引き出し、別のものを押し込み、再接続していたのなら？

雷真が紅翼陣でつかんでも、この重さだ。常人の念動ではびくともしないだろう。それをあの変形の一瞬に、涼しい顔でやっていたとは……。
たとえるなら、数百キロの鉄塊でお手玉するようなもの。
（本当にバケモノだな……ロキは！）
もともとの魔術抵抗に、さらにロキの念動が加わり、殺人的な負荷がかかった。
だが、離さない。互いにカートリッジを念動でつかみ、精神力で引っ張り合う。苦しい力比べだが——ロキを上回る必要はない。
このまま妨害できれば、ジブリールの変形シークェンスは終了しない！
「夜々！　いろり！　小紫！」
攻撃を命じる。変形途中で止まったジブリールは、完全に無防備だ。
これが雷真の言う『真正面から』。相手の特長を打ち砕き、活路を見出す。
雷真は渾身の魔力を込める。ロキもさせじと出力を上げ、両者が吠えた。
『うおおおお！』
お互いに血管が切れそうなくらい踏ん張って——
ぶしゅっ、と雷真の胸から鮮血が飛んだ。
「…………!?」

愕然とする。ロキもまた、同じように驚愕していた。
本当に、雷真の血管が切れた。精瑠で塞がれていた傷が開いてしまったらしい。
肺が無事か、とっさにわからない。とにかく念動を解除し、剛体のスキルを応用して傷を塞ぐ。攻撃態勢だった三姉妹があわてて反転し、戻ってきた。
完全な隙をさらした格好だが、ロキは動かなかった。ジブリールも機械天使の姿に戻っただけで、かかしのように棒立ちになっている。
滴る血液をてのひらで押さえ、雷真は不敵に笑った。
「どうした？　ここでやめるとか、言うなよ？」
「……死ぬぞ、黄泉還り馬鹿が」
「死なねえさ。それに、黄泉から戻ったのはおまえの姉ちゃんだ」
観客には聞こえないよう、雷真は声を殺してささやいた。
「フレイを生かし続けるのに、冥府の〈神酒〉が必要なんだろ？」
「――そこまで知っているのか」
「だから、手加減すんな。最後まで本気でこい！」
ロキもまた、勝利をあきらめられないはずだ。たとえ黒薔薇の手駒でなかったとしても、彼は姉のため魔王の座を欲している。
その願いを踏み越えなければならないのなら、せめて相手の本気を受け止める。こちらもそれだけのリスクを背負い、危険に身をさらす。最初にシャルに挑んだときから変わら

ない、それが雷真の信念だった。

（……とは言ったものの、だいぶやべえな）

ぐにゃぐにゃと視界が歪んでいる。明らかに血が足りていない。

持久戦はもう無理だ。後はせいぜい一手か、二手が限界に思える。

なら、どうする？　さっきの念動相撲をもう一度やる気力はあるか？

いや、ロキに同じ手は通じない。次は別の手段で防がれる。

どうする？　どうすれば、この体で勝てる？

知恵をしぼる。そのうちに、思考は全然別のところへと飛び、なぜだかロキと出会ってからの日々が甦ってきた。

今思い返しても、最悪の出会いだった。互いに事情も知らないまま、形としては雷真がケンカを売った。フレイが乱暴されていると勘違いしたのだ。

そして夜会の第一夜、二人は対戦相手として対峙した。

ロキは〈十三人〉の一人で、参加はまだまだ先だった。だが、彼は雷真を排除するため、姉を護るために、自ら順位を落として舞台に上がってきた。

不器用なやつだと思う。口が悪くて、無愛想で、全然自分のことを語らないから、姉にも理解されなかった。だが、あるいはそれゆえに、雷真は彼を疑わない。

こいつは腹の底から信じられると、決して当人には言わないが、思っている。

それは多分あちらも同じ――と考えるのは、少しばかり傲慢だろうか。

雷真が動かないのを見て、ロキがたずねた。
「啖呵を切ったわりに、手が止まったな。手詰まりか？」
「……いや。これまでの、おまえとやり合ったことを思い出してた」
「奇遇だな。オレもだ」
張り詰めていた空気が、ほんの一瞬、弛緩した。
「おまえとは何度もやり合ったよな？」
「味方だったことも、同じくらいある」
「夜会が始まった頃、おまえ、すげえ上から目線でよ」
「貴様がヘタレの劣等生だっただけだ」
「……そうだな。おまえは元から強かったし、頭もよかった」
「貴様は底抜けの阿呆だったが、あれから多少は腕を上げた」
「ああ。そしてそれは、おまえも一緒だ」
果たして、二人の差は縮まったのか。それとも――？
動かない両者を見て、観客がざわめく。ロキがそちらを一瞥し、肩をすくめた。
「客が焦れているな」
「焦らしとけばいいさ……と言いたいところだが」
雷真は傷口から手を離し、血を払って、三姉妹に指先を向けた。
「体の方が限界なんでね。ぼちぼち幕引きと行こう」

「貴様と意見がかぶるのは不愉快だが――同感だ」

一瞬後、両者が魔力を全開にした。

考えることは同じか。ここからの一連の攻防で、勝負を決めるつもりだ。

再び〈剣の結界〉が出現し、流星の輝きを同心円状に刻む。雷真は三姉妹を三方に走らせつつ、八重霞でロキの五感を奪った。

ほんの一瞬、ロキの視線が泳ぐ。本当に一瞬だけだ。ロキは素早く幻覚を見破り、羽の刃でいろりを狙った。いろりは雪崩でそれを受ける。凄まじい水蒸気の嵐が生じ、その嵐にまぎれて、夜々が砲弾のように飛び出した。

剣の結界が反応し、刃の迎撃で肌が裂ける。だが、夜々は止まらない。金剛力と殴り合うのは不利と判断したか、ロキはジブリールを後方へ下げようとした。

その機械天使の背中が、がんっと視えない氷壁に当たった。

「――――!?」

八重霞に隠された氷壁が、ジブリールの進路を妨げている。

ロキが目をむく。殺意を帯びた氷槍ならば、事前に察知できただろう。が、敵意のない氷壁を、この激しい攻防の中では、さすがのロキも感知できなかった。

刹那の空隙に、夜々がもうジブリールの懐に飛び込んでいる。

転移する手もあったはずだが、ロキはジブリールを盾に変形させた。〈疎と密〉の転移は範囲攻撃に対して脆弱であり、読まれているこのタイミングでは、いろりの吹雪で凍結

させられるおそれがある。それゆえの変形だったが、それが雷真の狙い通りだ。

雷真は持てる力のすべてを出して、紅翼陣の糸をジブリールに伸ばした。

先ほどと同じく、魔術回路のカートリッジを抑えにかかる。ロキに同じ手は通じない。

それはよくわかっている。だからこそ、ここに突破口があると踏んだ。

コンマ数秒のあいだに、魔力がせめぎ合う。心臓をねじり上げられるような苦痛を覚え、雷真の口から血の泡が飛んだ。気がつけば、ロキは剣の結界を解除し、全力で抵抗していた。どうやら、この真っ向勝負を望んでいたのは、あちらも同じだったようだ。

雷真に負荷をかけ、気絶させるつもり……らしい。

（か、賢え……！　おまけに重え！）

紅翼陣をもってしても、押し切れない。むしろ押される！

だが、それでいいのだ。

（こうやって、ジブリールの魔術回路を固定しておけば……！）

夜々がジブリールに蹴りを見舞う。ジブリールはさすがの反応でそれを防ぐが、金剛力でフレームがひしゃげ、空中で体勢を崩した。

そこへ、こちらの本命が襲い掛かった。

小紫が虚空から飛び出し、魔剣を帯びた銀剣でジブリールの頸椎を狙う。

紅翼陣が銀剣にまとわりつき、擬似的な魔剣となっている。完全統制振動に回路を切り替えられない今、この一撃は致命傷になり得る。

雷真が同じ手を使ってこないという思い込み、非力な小紫にジブリールは破壊できないという思い込みが、ロキの予測の死角だ。

――という雷真の考えこそが、誤算だった。

空中のジブリールが足先を小紫に向け、別の形態に変形した。

長砲身の銃のように見える。砲口からは既に雷電のスパークが散っていて、雷真が回路交換を妨害しているにもかかわらず、魔術が起動しているのがわかった。

なぜだ、と考えて、雷真は直感的に理解した。

（そうか……そういう……ことか！）

逆だ。読まれていたのは雷真の方――この瞬間を待っていたのはロキの方！

『ジブリールは各形態ごとに、それぞれ一種の魔術しか使えない』

雷真はそう考えた。それは事実かも知れない。だが、魔術回路の交換が、必ずしも変形と同時である必要はなかった……のなら？

この展開を予測して、変形前にカートリッジ交換を済ませた……のなら？

理解した瞬間、雷真が感じたのは、爽快感にも似た感情だった。

（こっちが死力を尽くしてなお、おまえは俺の上を行くのか……！）

砲口の輝きが強まる。どこから供給したのか、既に莫大な力が蓄えられている。戦闘中にこれだけの力を蓄えていながら、悟らせもしなかった。

雷真は運命に身を委ねるように、ほんの半歩も下がらず、ありったけの力を三姉妹に与

え、あふれる雷電の海へ飛び込ませた。

4

『いつかの約束を果たすときがきた。おまえたちにすべてを語るときが』
半ば崩れ落ちた〈愚者の聖堂〉で、赤羽天全は語り始めた。
戦隊がなぜ『有る』のか。いかにして『在る』のか。
存在理由と存在意義。その重大な秘密を、ついに主は打ち明けてくれたのだ——
数時間に及ぶ長い語りが終わるまで、戦隊は誰一人として言葉を発しなかった。終わってからも、誰も何も言えなかった。表面上は落ち着いて見えても、姉妹のそれぞれが激しく狼狽していることを、火垂は把握していた。
戦隊の沈黙を『不満がない』と受け取ったのか、天全は再び銀の仮面を装着し、いつもの冷徹な調子に戻って言った。
『今はただ、各自の胸にとどめおけ。そのときまで、まだ少しの猶予がある』
姉妹たちが一糸乱れぬ動きでうなずく。天全は戦隊の後ろに視線を投げ、
『おまえもだ。わかったな？』
と念を押した。紅い瞳に見つめられた乙女は、小さな体をびくっと震わせ、うなずいた。
気の毒だが、彼女にはうなずく以外の選択肢はない。

『……わか……りました』

『それでいい。秘密は漏らすな。おまえの主のためを思うなら』

乙女が泣きそうな顔をする。その表情は捨て犬を思わせ、火垂は少し同情した。

(あの娘は、何かと貧乏くじを引かされるな……)

誰からも愛される代わりに、損な役回りを託されることが多い。末っ子はそういうものだ——と思ってしまって、火垂は自分の思考に戸惑った。そのようなことが、人形の自分になぜわかる? あるいは、素材の持つ記憶とやらか?

「火垂。そろそろいいんじゃない?」

背後から呼びかけられ、火垂は我に返った。

声の主は同じ戦隊の姫蜘蛛だ。長い髪を頭の左右で結っていて、先の乙女と少し似ている。活動的な雰囲気も近い。そのとなりには蜜蜂がいて、窓から闘技場を監視していた。

こちらはそれこそ人形のように大人しい印象だ。

そろいの黒ドレスを身につけていても、やはり個性がある。今さらそのことに思い至り、火垂は狂おしいような気分になった。

(この姿ももう見納めという、今になって……)

「火垂、しっかりして。マスターの大願が成就されるかどうかの瀬戸際よ」

姫蜘蛛がきつい口調で言う。火垂は言い返せなかった。普段とは逆の構図だ。

感情はぐるぐると渦巻くばかりで、思考は正解を導き出してはくれない。早く気持ちの

整理をつけて、決戦に備えなければならないというのに。

「すまない……私はどうやら、まだ動揺しているようだ」

「らしくないんじゃない？　火垂は任務に忠実な子だと思ってた」

「……私もそう思っていた。おまえたちはもう落ち着いたのか。ほんの半刻で？」

姫蜘蛛は当然というふうに胸をそらす。蜜蜂の沈黙には迷いがあったが、口に出すほどでもないと思ったようで、何も言わなかった。

「……すまなかった。任務に戻ろう」

蜜蜂のとなりに立ち、壁の窓から闘技場を見下ろす。

姉妹は屋根のあるボックス席にいた。もとは貴賓席だが、エドマンド王も学院長も中央の席で観戦しているため、今はその役を果たしていない。

「そろそろ勝負がつきそうね。ライシンには余力がないみたい」

姫蜘蛛の言葉通り、舞台上の勝負は佳境に入ったと思われた。熱や冷気が相互に膨らみ、魔術防御の施された客席にまで衝撃が伝わってくる。時折り客席防御の結界が発動し、金色の壁が大気中に明滅している。

のびのびと躍動する雪月花を見て、火垂の胸にさざ波が立った。

雷真とロキは明らかに進歩していて、単純な戦闘能力だけなら、既に一流の域に達している。ひょっとしたら、その域を逸脱しかかっているかも知れない。

（結果論だが、あの者たちは過去、薔薇の魔女をも退けている）

どちらが勝つにせよ、主(あるじ)の脅威となる。展開次第では、戦隊(スコードロン)が敗北する可能性も——

かぶりを振る。そんなことはあり得ない。実力では決して負けない。

「姫蜘蛛(ひめぐも)、外の様子はどうだ？　闘技場の外に不審者はいない？　奇襲(きしゅう)の気配は？」

「ないわね。市街地の英国軍も学院には近付いてこないみたい。だけど、敵意は感じるわ。私の〈巣〉にひっかかってる」

「どこ？」

「そこよ」

入口の扉を示す。火垂(ほたる)は躊躇(ちゅうちょ)なくノブをひねった。

逆光気味に少女のシルエットが浮かび上がる。少女は腕組みをして、挑戦的に訊(き)いた。

「どこに行くつもり？　まさか、舞台に向かうわけじゃないわよね？」

「——仮にそうなら、どうだと言うのです。シャルロット・ブリュー」

精霊感応力(エコーズ・センス)を持つ者は厄介だ。こちらの存在を感じ取り、探りにきたか。

シャルはきらびやかな金髪を肩で払い、堂々と火垂に向き合った。

「決まってるでしょう。貴女(あなた)たちがもし、あの二人の邪魔をするって言うなら」

胸の高さに腕を持ち上げる。シグムントが帽子から飛び立ち、籠手(こて)にとまった。

仔竜(こりゅう)の牙のあいだから光が漏(も)れ、舌のように踊る。返答次第では滅元素(バニストン)で攻撃するぞ、と言っている。

(——いや、これは虚勢だ。この少女にはもう、戦うだけの魔力は残っていない)

それでも、騒ぎを起こしたくない。火垂(ほたる)は冷静にあしらうことにした。
「そのような小細工、マスターは弄(ろう)しません」
「どうだか。あんな仮面つけて、ずっと顔を隠してるくせに」
「それとこれと、何の関係があるのです？」
「胡散臭(うさんくさ)いって言ってるの。それとも、火傷(やけど)の痕でも隠してるわけ？」
「胡散臭いとは心外です。あの仮面は――」
蜜蜂(みつばち)が無言で火垂のドレスを引っ張る。火垂は我に返り、別のことを言った。
「あのような低次元の勝負に、我らが手出しをする理由がありません」
「そう願うわ。ここは紳士の国なんだから、紳士的にいきましょう」
フェアにね、正々堂々とね、としつこいくらいに強調する。
「男同士の真剣勝負にチャチャ入れしようなんて、最低の野暮(やぼ)よ。決して許されざる行為よ。そんなやつ、馬に蹴(け)られて死ぬのよ。ジャパンの言い回しでしょ？」
「……聞いたこともありませんが」
というつぶやきは無視して、シャルは切なげに雷真(らいしん)を見下ろした。
「私の守護精霊(ガーディアン)が教えてくれたの。さっきのライシンの出血、見た目以上に深い傷だって。あの傷、貴女(あなた)たちがつけたんじゃないでしょうね？」
殺気をにじませる。反射的に身構える姫蜘蛛(ひめぐも)を制し、火垂は淡々と答えた。
「我らではありません。無論、マスターでもない」

「じゃあ何があったって言うの？　貴女たち、知ってるんでしょうっ？」

シャルは部屋の入口に陣取り、こちらを逃がすまいとした。

蜜蜂と姫蜘蛛が火垂の方をうかがう。どうやら、判断を預けるつもりらしい。

経緯を説明する義理はないし、たとえ説明したところで、この直情径行娘が信じるとは思えない。いっそ鎌切を呼んで、転移で逃げてしまおうか――いや、ここで転移のような大魔術を使うのはまずい。夜会の勝負に介入したのではないかと、執行部に疑われる危険がある。半日前のリヴァイアサン騒動で、誰もが神経質になっているのだ。

仕方なく、火垂は事実を告げた。

「あの傷は土門家の姫がつけたのです。背後から短刀でひと突きにしました」

シャルはぽかんとした。そして案の定、激情をむき出しにした。

「――嘘！　そんなはずないわ！」

「事実です」

「どうしてヒノワがあいつを刺すのよ！　そんなのあり得ない！」

「我らの知るところではありません。わかったのなら、そこをどきなさい」

「……そうね。疑ってごめんなさい」

小さく頭を下げて、道を開ける。火垂の背後で戦隊の姉妹がぎょっとなった。

シャルの素直さに火垂も驚く。だが、顔には出さず、その前をすり抜けた。

「でも貴女たち、これだけは覚えておいて」

三姉妹の後ろから、シャルは捨て台詞のように言った。

「貴女たちがあいつに何かする気なら、私はこの身に代えてもあいつを護る。ブリューの誇りと一角獣の紋章に誓って宣言するわ」

火垂は足を止め、肩越しに振り返った。

「我らも、おまえがマスターの大願を阻もうとすれば、殺します」

本気の殺気を叩きつける。シャルは怯まず、正面から受け止めた。

もう振り向かず、火垂は貴賓席を離れる。蜜蜂が身を寄せてきて、ぽつりと言った。

「今の子……」

「ああ。いい勘をしている」

「恋する乙女。近視眼的」

予想外の単語が飛んできて、火垂は足を引っかけそうになった。

「おまえ、『恋』なんて単語を知っていたのか。無駄口をきいていないで――」

ばむっ、と大量の水蒸気が発生し、火垂の小言をかき消した。

舞台の上でいろりの冷気とジブリールの火炎が激突し、爆発が生じた。凄まじい風圧の中、小紫がジブリールに仕掛けるのが見えた。

雷真が勝負に出たのだろう。だが、ロキは読んでいたらしい。ジブリールが砲に変形し、小紫に狙いをつけた瞬間は、どう見ても……。

（やられる！　花の乙女が死ぬ！）

砲口から雷電がほとばしり、小紫をのみ込んだ。

――かろうじて、かわしている。あるいは発射のタイミングが遅れたか。小紫は雷電の下を際どくすり抜け、ジブリールの懐に潜り込んだ。

逆手に持った銀剣を、全身のばねで斬り上げる。魔靭が青白く閃き、ジブリールの胸に当たった。装甲板が裂け、ジブリールが宙へ打ち上げられる。

そこに、上から夜々が落ちてきた。

あり得ないほどの速さ。見れば、夜々の頭上に氷の足場ができている。夜々は氷の天井を蹴り、断熱圧縮が生じるような蹴りを見舞った。

ジブリールが盾に変形し、蹴りの衝撃に耐える。

ぴしり、という異音を火垂の聴覚センサーがとらえた。

(完全統制振動を……貫いた……!?)

学生の中には、金剛力は単純すぎると笑う者もいた。

確かに、完全統制振動に比べれば、できることは少ない。だが、単純なものには、単純であるがゆえの強みもある。制御が容易だとか、魔力変換効率がいいとか。

そして何よりも、花柳斎の回路は、魔力に比例してどこまでも力を高めていく。

花柳斎人形最大の強みは、その〈可能性〉――使い手の成長に合わせ、どこまでも強くなっていく、その潜在能力にこそあったのだ。

魔力と魔力の競り合いの中、「っ……ロキ！」と雷真の叫びが聞こえた。

雷真は十本の糸すべてを相棒に注ぎながら、

「後のことは、俺に任せろ！」

「――――」

「夜々！　行け！」

「はい！」

主の思いに応え、夜々は最後の一押し、力をかけた。

せめぎ合っていた力が、ロキの側に決壊し――

Chapter 3 友に託して

1

瓦礫が転がる医学部の廊下を、アンリは黒コートの魔術師とともに歩く。

魔術師たちは無言だ。犯罪者の護送のように感じてしまう。実際、アンリにはそうされるだけの理由があった。この廊下の荒れようも、アンリが原因と言えなくもない。

廊下の突き当たりで、魔術師の一人が言った。

「山鳩の同胞、そこが目的の病室です」

アンリは目をつむる。ついに、到着してしまった。とても会いたいのに、会うのが怖い
——大好きな人の部屋に。

魔術師がノックする。すぐに返事があって、中からクルーエルがドアを開けた。

室内は暖かい。中央に大きなベッドがあり、キンバリーが横たわっていた。

酸素マスクをつけ、脂汗をにじませている。死に瀕しているように見えたが、アンリを認めると、クルーエルの手を借り、身を起こした。

「きてくれたな、アンリエット……一家団欒を邪魔してすまない」

「そんなことは……っ」
駆け寄ろうとして、途中で勇気がくじけてしまう。
立ち止まったアンリを見て、キンバリーは怪訝そうに訊いた。
「どうしたんだね？」
「私……先生に抱きつきたいと思ったんです。だけど、私はあんな事態を引き起こすような最悪の犯罪者で……人類にとっての脅威で……」
床に視線を落とし、途切れ途切れにつぶやく。
「私、本当はまだ自分が信じられないんです。リヴァイアサンで街を壊そうとしたことも、みんなを殺そうとしたことも、全部……私の意志だったのかもしれないって――」
「それは違う。君は銀薔薇に利用されていただけだ」
「でも！　王妃さまはときどき、とてもお優しくて……私、グローリアさまを憎むことができないんです！　グローリアさまが亡くなったって聞いて、私……」
胸のどこかに、穴があいたような気がしている。
グローリアがアンリを見つめる眼差しには、〈便利な道具〉として以上の情――慈愛のようなものがあった。確かに、あった。
表面上は自信と気品に満ちたあの女性の心に、誰にも見せない深い孤独があったことを、アンリはおぼろげに感じていた。精霊感応力――いや、あるいは、似た者同士の共感かもしれない。グローリアがアンリに過ぎた力を与えてくれたのも、あるいは利用するためで

はなくて……？

「私は馬鹿が嫌いだ」

ぴしゃりと言われ、アンリは畏縮した。

「す……すみませ……っ」

「だが、君は馬鹿ではない。ならば、何をためらうことがある？」

顔を上げる。キンバリーは動かせない方の腕まで広げ、アンリを待っていた。

「君のその迷いこそ、正気の証だ」

「――――」

「おいで。抱きしめさせてくれ」

まぶたが燃えるように熱くなり、アンリの視界がぼやけた。

キンバリーの胸に飛び込む。相手の体温を感じた途端、我慢していたものがあふれ出た。嗚咽を漏らし、泣きじゃくる。その頭を、キンバリーは優しく撫でてくれた。

「先生がきてくださったから……！　私、先生の声が聞こえたから、自分を取り戻すことができたんです……！　先生がきてくださらなかったら、あのまま消えちゃったかも……それどころか、機巧都市の人たちを全滅させて……！」

「君はそんな愚かなことはしなかったよ。きっとね」

キンバリーの声は信頼と優しさに満ちていた。嬉しくて力が入ってしまい、キンバリーが軽くうめく。アンリは我に返り、あわてて身を離した。

manga-zone.org

「ごめんなさい！　痛みますか？」
「なに……痛みも悪くない。生きていると実感できる」
強がりを言う余裕はあるようだ。アンリはほっとして、涙を拭いた。
「……ここに呼ばれた理由はわかっています。私、協会に処刑されるんですよね？」
協会が最後の別れを言わせてくれたのだ、とアンリは解釈していた。
キンバリーは『もっともだ』というふうにうなずき、皮肉げに山鳩(やまばと)を見た。
「――と、いたいけな娘は考えているようですよ。実際問題、灰十字(クルサーダ)は血も涙もない連中ですからね」
魔術師たちが苦笑する。意味がわからず、アンリは戸惑った。
キンバリーはアンリに向き直り、諭すように言った。
「確かに協会は頭が固い。だが、我々にその気があったなら、ブリュー伯爵は君をここに寄越(よこ)さなかっただろう。あるいは、ご本人もここにいらしたはずだ。違うかね？」
「それは――でも――それじゃ、私はどうなるんでしょう？」
「無罪放免というわけにはいかない。君は灰十字の管理下に置かれる」
「……はい。それはもちろん、覚悟しています」
「しかし、協会は慢性的な人手不足でね」
意味がわからず、アンリはきょとんとした。話が飛んだように感じた。
キンバリーは構わず、しかつめらしい顔をして続ける。

「君の監督は引き続き私が担当しなければならない。が、私は見ての通り半死人で、満足に動くこともできないわけだ。そこでもし、監視対象者が私の看護に従事してくれれば、一石二鳥なんだがね？」
言外に含めた意図が、少しずつ腑に落ちていく。アンリが完全に理解するのを待って、キンバリーはまだ濡れているアンリの頬に触れた。
「私はズボラな人間でね。君がいないと、部屋が片付かないんだ」
「――――」
「だから君が、あの研究室で、また私の世話を焼いてくれないかね？」
一度は引いた涙の粒が、またアンリの眼に盛り上がった。
アンリはキンバリーの手に自分の手を重ね、頬ずりした。
「はい……っ、喜んで……！」
それ以上は互いに言葉もなく、二人は再会の喜びをわかち合った。
どのくらいそうしていたのか、アンリを抱いたまま、キンバリーが上司に訊いた。
「山鳩の同胞。ゼルダ――〈迷宮の魔王〉はどこです？」
「護衛が我らだけでは不足かね？」
「そういうわけでは……。ただ、胸が騒ぐのです」
「支部の方で会えるだろう。我らもこれよりブリュー伯爵と合流、ミス・カリューサイをピックアップして、速やかに帰投する手はずだ」

「……了解しました。ファザーはもう予見の儀式に入られたのですか？」
「これからだ。現在、同胞たちが〈最終予見〉の準備を進めて――」
途中でやめる。タイミングをはかったように、ノックの音が響いた。
魔術師たちに緊張が走る。誰も気配を感じていなかったらしい。
「失礼します……っと、おやおや、皆さんおそろいで！」
返事も待たずに入ってきたのは、とぼけた態度の日本人だった。
細められた眼は優しげだが、どこか剣呑にも思える。悪目立ちする和装姿で、サーベルふうの剣を左手にぶら下げていた。
この人は誰だっただろう、とアンリは考える。雷真と一緒にいるところを見たような気もするが――既に守護精霊を手放したアンリには、男の危険度がわからない。
男は室内を一瞥し、困ったような顔をした。
「花柳斎さんがこちらにいらっしゃるのではと思ったのですが、いませんね」
へら、と笑う。一同を代表して、キンバリーが訊いた。
「彼女をどうするつもりだね？」
「いやあ、大した用件じゃないんです。ちょいと野暮用と言いますか」
不穏な気配が漂う。即座に魔術師たちが反応し、男を囲むように動いた。
男はぽりぽりと頬をかき、
「ありゃ……ひょっとして、私を捕まえる……的な雰囲気になってます？」

アンリをしっかり胸に抱き、キンバリーが鋭く言った。
「花柳斎殿が紅薔薇(べにばら)だったとき、貴殿は彼女の側にいた。つまりは貴殿も『結社の一味』。協会がいつ捕縛に動いてもおかしくはないだろう？」
「それはごもっともですが……ここは見逃(みのが)してもらえませんかね？　私、無用の殺生(せっしょう)は好まないもので」
　言いながら、剣の鍔(つば)に親指をかける。その胆力と自信から、アンリは男の技量を察した。灰十字(クルサーダ)の戦士たちを前に、数的不利を問題にせず、切り抜ける手段があると思っている。並大抵の腕前では、こんな自信は生じない。
　一触即発の空気を破り、部屋の外から声が飛んだ。
「待たんか、馬鹿者！」
民族衣装ふうのドレスに身を包む、魔王(ワイズマン)グリゼルダ・ウェストン。
二体の機械天使が飛んできて、グリゼルダの左右に立つ。
既に顔見知りらしく、男は逃げたそうな顔をした。
「うわぁ……また一段と怖い顔をなさいますね～」
「ふざけるな。そして正直に言え。何をしにきた？」
「……ちょいと嫌な命令を受けてしまいましてね。花柳斎さんを協会から連れ戻せというものなんですが。邪魔立てする者がいた場合は、できるだけ多く」
「殺せ、と？」

男は否定しなかった。絶句する一同の前で、グリゼルダの肩がわななく。
「貴様という奴は……！」
怒気の高まりに呼応して、魔力の炎が噴き上がる。グリゼルダは憤怒の形相で、しかしどこか哀しげに男をにらんだ。
「結局……敵なのだな？」
「……そう思われても、仕方がないですね」
「ならば、死ね！」
機械天使を剣に変え、叩きつける。男はいつの間にか抜刀していて、魔王の一撃を横にいなした。衝撃の余波がキンバリーとアンリ、クルーエルをなぎ倒し、薬品棚のガラスをすべて砕く。吹雪のようにガラス片が飛び散り、きらきらと舞った。
あるいは精霊感応力の名残か、アンリは直観的に悟る。
何かがまた、始まったのだ。いや、『今度こそ』と言うべきかもしれない。
すべての終焉に向け、事態はここから、一気に流れ出そうとしている。
速まる鼓動を耳元に聞きながら、姉と雷真は無事だろうかと思った。

2

自分は気を失ったのだと、ロキは頭のどこかで理解していた。

何かやわらかいものを枕にして、仰向けに横たわっている。頭をもたげようとすると、上からもっとやわらかいものに押さえ込まれた。

「う！　急に頭を動かしちゃだめ！　もう少し寝てて」

姉の声だ。言われるまでもなく、脚と胸に挟まれ、身動きを封じられている。

「……重いぞ、バカ姉貴」

「うっ？」

姉がのけぞる。それで視界が開け、明るくなった。

鳴り止まない拍手と歓声が聞こえてくる。勝者を讃える大歓声――それが自分に向けられたものではないと、ロキにはもうわかっていた。

「あのね、ロキ……試合は……」

「わかっている」

敗北したのだ。おぼろげに、決着の瞬間の記憶がある。

雷撃をかわさず、前に出た小紫に、至近距離から八重霞を浴びせられた。そして知覚が混乱した隙に、夜々の蹴りがジブリールに炸裂し――

記憶はそこで途切れる。蹴飛ばされたジブリールに巻き込まれ、頭を打ったのだろう。車に轢かれた程度の衝撃はあったはずだが、軽い脳震盪で済んだようだ。

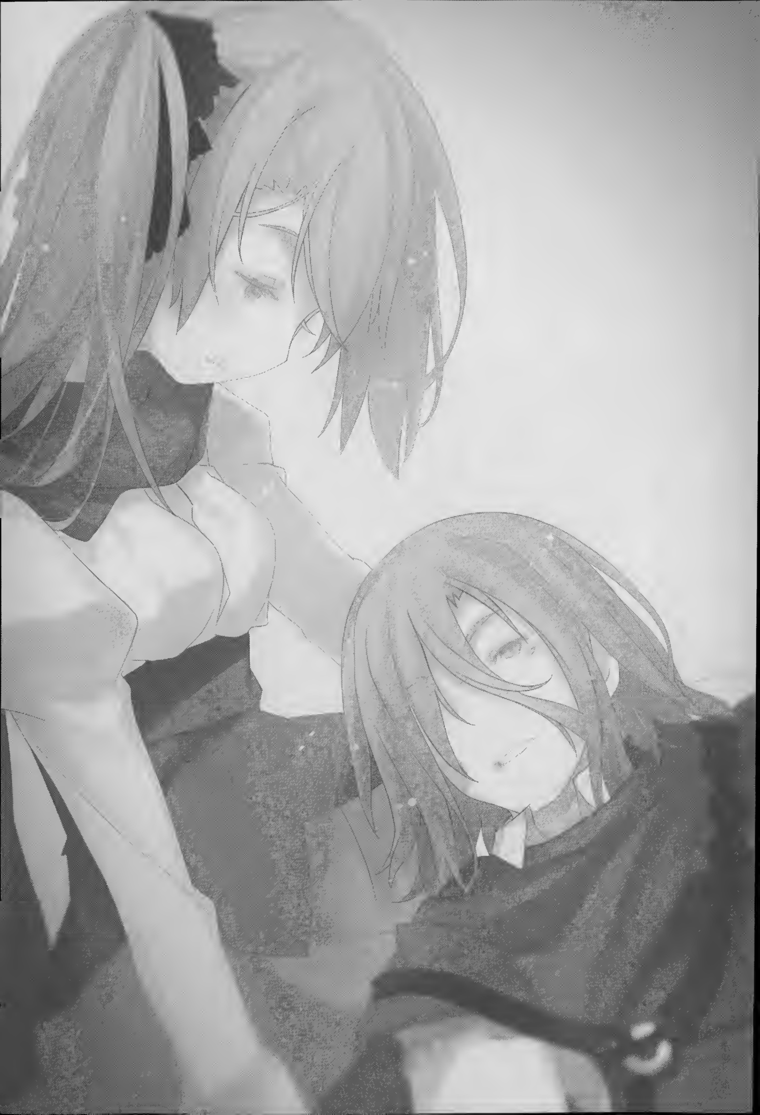
まだ頭が痛む。ロキは無理に起きようとせず、しばらく姉の膝で休むことにした。

「悪かったな、姉貴」

フレイはふるふるとかぶりを振った。真珠色の髪が揺れ、ロキの鼻先をくすぐる。
「ロキはほんとに凄かったよ。お姉ちゃん、嬉しかった……誇らしかった」
「いや、勝敗の話じゃない。オレにはずっと、余裕がなかった」
「う、余裕？」
「あんたの気持ちをおもんばかる余裕だ。弱い姉を持てば、誰しもそうな——いや違う、そんなことが言いたいんじゃない」
ロキは舌打ちしたくなった。姉の弱気な表情を見ていると、ついつい意地悪を言いたくなる。今だけは、そんな悪癖は捨て去りたい。
だから目を閉じ、自分の言葉に集中する。
「オレのこういう態度が、あんたを不愉快にさせてきた、ということだ」
「う！　そんなこと！」
「いいんだ。そんなことさえ、オレは思い至らなかった。オレはただ力をつけることばかり考えていた。オレたちの未来を切り拓く力を、欲していた」
養父ブロンソンは幼い子どもたちを実験動物にした。彼の意に染まぬ者、力なき者は、容赦なく切り捨てられた。あの環境で姉を護るためには、まずロキ自身が被験体としての価値を示さなければならなかった。
だが、それは言い訳に思える。もっと力があれば——知恵があれば——余裕があれば、姉をちゃんと気遣えたはずなのだ。

「オレはいつも言葉が足りなかった。言うべきことの半分も言わなかった気がする」
「……それは半分、私のせいだよ。私が頼りなくて、弱虫だったから」
ロキの頬にフレイの手が触れる。指先は熱を帯び、思っていたより力強かった。
「それに、ロキの気持ちはもう、わかってるから」
「……言った覚えはないぞ？」
「だけど、伝わってるの。ライシンが教えてくれたから」
――今こそ、認めよう。
（ライシン。オレはおまえに感謝している）
彼と背中合わせに戦ったときから。ともに未来を切り拓いた、あのときから。
彼の好敵手として、仲間として、今日までやってきたことを誇りに思う。
「姉貴。オレはこういうのは好きじゃない。だから、一度しか言わない」
まぶたを上げる。逆さまの姉の顔が、びくっと見開かれた。
「は――はい……なに？」
「オレはあんたを大事に想っている。想ってきた。いつでも。ずっと」
フレイの紅い瞳が潤み、やがてぽとりとしずくが落ちた。
涙の玉がロキの頬ではねる。照明を弾く輝きは、星のまたたきに似て美しかった。
次々とあふれる涙を両手で払いながら、フレイは微笑んだ。
「ありがとう。ロキが言ってくれたこと、私、一生忘れない」

「……ああ、せいぜい覚えていろ。オレはもう二度と言わん」
「うん。ロキの顔を見るたび思い出して、勝手に幸せな気分になるね」
「何だと……!?　それはやめろ！　忘れろ！」
「やだもん！」
子どもっぽく笑う。奪われた少女時代を取り戻したかのように。
姉がこんなふうに笑顔を見せるようになったのも、思えば彼らのおかげだ。
「おーい、生きてるかー？」
雷真が夜々をともなって近付いてくる。口調こそふざけているが、雷真の顔は土気色で、夜々に支えられてようやく立っているような按配だった。
「貴様の方が死人に近いだろう。そんなに血を失くして、ご苦労なことだ」
ロキは強がって立ち上がり、強張った首をほぐして見せる。雷真はほっとした様子で、
「夜々の蹴りに巻き込まれてその程度とか、どんだけ化け物だよ？」
「ほう。殺すつもりで巻き込んだのか？」
「まさか。死ぬわけねえと思っていたさ」
にこりともせずに言う。その言葉尻に、ロキへの信頼がにじんでいた。
くすぐったくなる。それを悟られまいと、ロキは仏頂面でジブリールを見た。
脊柱がゆがみ、砲口を形成する脚部がゆがんでいる。盾となる装甲部も割れ、血管のようなコード類がはみ出していた。ただし、骨格は致命傷を避け、一応は人型のシルエット



を維持している。
　そのジブリールを再起動させながら、ロキは意地悪く言った。
「派手にやってくれたな。この修理費は高くつくぞ?」
「金を取る気か!?　おまえだって雪月花に怪我させただろ!」
「ジブリールに自己修復機能はない。手作業で修復するんだ」
「治るからいいってもんじゃねえぞ!　俺の大事な相棒たちを!」
「大事なら戦場に引っ張り出すな」
　ロキが含めた意味を、雷真は理解したようだ。そっと夜々を盗み見て、何かを噛みしめるような顔をする。それから、少し言いにくそうに、こんなことを言った。
「……最後、何で手を抜いた?」
「手抜きだと?　そんなものはなかったさ」
「だが、躊躇しただろ。最後の雷電、殺す気でぶっ放してりゃ——たぶん、小紫がやられてた。こっちはそれで総崩れ……試合もおまえが勝ってたはずだ」
　完全に読み切っていたのに、雷霆神器の発射が遅れた。
　あれが小紫を消し飛ばしていれば、夜々といろりは動揺したはずなのだ。
「それに、おまえにはまだ奥の手があっただろ。人造心臓を使うっていう」
「〈魔炉心解放〉か……確かにな」
「こっちは魔力切れ寸前だった。実戦なら……おまえが勝ってた」

「当然だ――と言いたいところだが。これが実戦でも、オレは負けていただろう。オレが自動人形（オートマトン）の破壊をためらうなど、かつてなかった」
「……どういう意味だ？」
「つくづく思考停止バカだな。要するに」
いろりと並んで立つ小紫を見やり、ふっと笑う。
「どうやらオレは、貴様たちを殺したくないらしい」
「――――！」
「撃てば花の乙女が消えるとわかった瞬間、そいつと組んでローゼンベルクをつぶした、あの戦いを思い出した」
「……学院の地下でフェニックスってやつを倒したときのことか？　そういや、その魔術回路がジブリールにも積まれてるんだってな？」
「あの戦闘で得られたデータで再現された――のだそうだ。ならば、この機体自体、花の乙女がいなければ手に入らなかった戦利品と言える」
何の因果か、ジブリールに搭載（とうさい）されているのは、ロキにゆかりのある魔術回路ばかりとなった。グレンダン中将の〈風の剣舞（シルエイティ）〉、ソフィアの〈完全統制振動（フラガラッハ）〉、ローゼンベルクが持ち込んだ〈永劫の火（フェニックス）〉、そしてアスラの〈雷霆神器（アンダルギア）〉。
ロキの脳裏に、はかなく、美しい、ドイツ娘の微笑（ほほえ）みが浮かぶ。
ソフィアの力を持つ自動人形（ジブリール）で、小紫を破壊するのだと思った瞬間、かつて感じたこと

のない迷いを抱いた。
　いや、『迷い』ではない。もっと明確に、『したくない』と思ったのだ。
　この感情を甘さと呼ぶのなら――
「この甘さが、オレの限界だ。今の、な」
　言外に含めたニュアンスを、雷真は理解したようだ。やっと普段の彼らしい――ロキは馬鹿面と罵りたくなる――笑みを見せる。
「上等。リターンマッチはいつでも大歓迎だ」
「ほう。今からやるか?」
「それは勘弁してくれ!」
　情けない顔で手を振る。男子二人は同時に噴き出し、大笑いになった。フレイと夜々、近くのガルム犬まで、目をまん丸にする。
　こんなふうに笑い合う日がくるとは、あちらも思っていなかっただろう。雷真はまぶしそうに目を細め、それから急に真顔になって、耳打ちした。
「詳しいことは後で話すが、フレイに必要な〈神酒〉の調達は、俺に任せてくれ」
　やはりか、と思う。ロキは平然と応えた。
「わかっている。黒薔薇と話がついているんだな?」
「――ついさっきの話だぜ? 黒薔薇さんが言ったのか?」
「いや。貴様が躊躇なくオレを攻撃してきた時点で、考えがあるに決まっている。たとえ

オレが敗れても、貴様がフレイを救ってくれる。そんな気がしていた」

それゆえに技が鈍った面もある——というのは、少々負け惜しみが過ぎるか。

信頼を寄せてやったというのに、雷真は痛みをこらえるような顔をした。

「俺は、そんな立派な人間じゃ……」

「三段跳びバカが。誰も立派とは言ってない」

「んだと垂直飛びバカ！　じゃあどう解釈すりゃいいんだよ⁉」

「姉貴を助けたとしても、オレのプライドをへし折った罪は重い。オレは謙虚で寛大だが、雑魚に負けた自分を認めてやれるほど、お人好しでもない」

「へえ。なら、どうすりゃ気が済むんだ？」

「全世界の前で証明しろ。オレを負かした男が、学院最強の男だと」

こぶしで彼の肩を突く。胸の傷に響いたのか、雷真はぐっとうめいた。だが、文句は言わない。ロキの肩を殴り返し、やはり笑顔を見せる。

ロキは力強く、背中を押すように言った。

「頂点に、行ってこい」

「ああ！」

ロキは雷真の手をつかみ、客席に見せつけるように掲げさせた。

客席から大きな拍手がわき上がり、三姉妹とフレイにも笑顔が弾けた。

そうして闘技場に盛り上がった熱狂を——ぱんっ、と鋭い発砲音が引き裂いた。

場内が静まり返る。響き渡ったその音は、まぎれもなく、銃声だった。
観客の視線が客席の一点に向かう。貴賓席の数列後ろ、学院長を狙える場所で、東洋人の紳士が銃を天に向けていた。銃口からは白い煙が上がり、風にたなびいている。
ロキは愕然とした。まずもって、撃たせたことが意外だった。銃器の持ち込みを事前に察知していなかったのか？　学院の警備が、教授たちが、王の近衛が、見逃した？
だが、思えばロキ自身、発砲の直前まで脅威を察知していなかった。何か特別な魔術を用いたのかもしれない。
「ご来場の皆さま方には、このような騒ぎを起こし、大変申し訳ない」
発砲した紳士が立ち上がり、平然とした顔で告げた。
場違いなほど落ち着いた声。服装は一般的なスーツにコート。背は高くもなく、低くもなく、顔の造作はあっさりしていて、表情が読めない。没個性が個性であるかのような、まるで印象に残らないタイプの東洋人だった。
あまりに自然な態度だったせいか、それとも敵意が感じられなかったためか、問答無用で取り押さえようとする者がいない。呪縛、あるいは眩惑されたような沈黙の中、紳士は舞台を見下ろして言った。
「攻撃の意志はありません。早急にお伝えしたいことがあり、発砲したのです」
それから、正面の学院長へ呼びかける。
「学院長、赤羽雷真は重篤な状態にあります。学外に連れ出す許可をいただきたい」

「――失礼だが、貴方は？」
「申し遅れました。我らは」
すっと手を上げる。まばらな客席のあちこちで、彼と同じ東洋人の紳士が次々に立ち上がった。どこから引っ張り出したものか、担架を携え、小銃で武装している。
紳士はあくまで冷静な声で、淡々と身分を明かした。
「赤羽雷真の後援者、すなわち日本軍です」

3

かこーんっ、と鹿脅しのような音を響かせて、六連の頬に鉄拳が決まった。
軽々と飛ばされ、ドアを破って廊下に転がる。六連は鼻血をこぼしつつ、
「いっだだだ！　ひっどいわオトン！　何すんの!?」
「黙りや！　弓削の面汚しが！」
眼光鋭い陰陽師が一喝する。迫力は〈お不動さん〉のようで、六連は反射的に正座し、畏まってしまった。
周囲から失笑が漏れる。廊下から玄関まで、びっしり陰陽師が詰めていた。
皆、伝統的な戦闘装束、白の狩衣〈浄衣〉姿。着こなしはバラバラで、烏帽子をかぶっている者もいれば、鉢巻を締めただけの者もいる。大半が袖をたすきでくくっており、二

の腕まで露出させていた。血筋のせいか、色白の者が多いせいか、勇ましさの中にも典雅(てんが)さが漂う。平家の若武者を思わせる集団だ。

　ここは機巧都市(リヴァプール)の一角、外からはごく普通の屋敷に見える建物の中だ。実際には日本軍の拠点であり、普段は情報部の軍人たちが詰めている。

　半日前、機巧都市はリヴァイアサンの脅威にさらされていた。六連(むつら)はタイミング悪く、単独で偵察中に毒にまかれ、身動きが取れなくなった。

　そんな彼を救ってくれたのが、幸か不幸か、身内のいざなぎ一門である。陰陽師(おんみょうじ)が洋館にたむろっているのは、ちょっと異様な光景だが、当人たちにそんな意識はないらしく、くつろいだ表情で六連を茶化した。

「おまえが悪いでー、六坊(ろくぼう)」

「弓削(ゆげ)さんがあんなキレてはるの、めっちゃ久しぶりや」

「六坊がおらんと誰(だれ)も叱られんからなぁ」

　どっと笑う。六連はぽかんとしてそちらを見た。

「え……何で六波羅(ろくはら)の兄さんたちまでおるん？　子組(ね)の若頭まで……」

　綺羅(きら)が単身渡英したとは思っていなかったが、ここまでの数をそろえているとも思っていなかった。今見えているだけで三十人はいる。

　呆(ほう)ける六連に、細面の陰陽師があきれ顔で応えた。

「子組は当然やろ、お館さまの直衛や。六波羅は局長じきじきのお出ましやで」

「なら、丑と合わせて子、丑、寅の御三家そろい踏みやん……」
「そうなるな。ほかに午組、卯組、酉組もいてる」
「ちょ……主力が半分も英国きてもーて、日本はどうなっとんの！」
「心配いらん。留守居は賀茂のおやっさんと御家老衆や」
「ああ、昴のオトンは日本なんや……ええなあ――っでで!?」
耳を引っ張られる。見上げると、相変わらず恐ろしげな父の顔があった。
「おまえも昴くんを見習え！　腑抜けの与太郎の親不孝もん！」
「言い過ぎや！　僕が何したて――思いっきりしましたね……スンマセン……！」
再び正座で畏まる。自分の罪状はよくわかっている。雷真に助勢し、綺羅に歯向かった。
雷真は『日輪の誘拐を企てた悪党』なので、もちろん六連も同罪だった。
いざなぎ流において、お館への叛逆は一門への叛逆と同義だ。六連は極刑も覚悟していたが、弓削はげんこつを落としただけで、六連の横をすり抜けた。
「おまえの折檻は後や。今はお国の一大事やさかいな」
ずかずかと階段を降り、エントランスホールの中央へ向かう。六連は式符で鼻血をぬぐい、近くの顔なじみに声をかけた。
「葦屋の兄さん、ちょっとええ？　何でこんなぎょーさん、こっちきとんの？」
「相変わらずアホやなおまえは。おつとめのために決まっとるやろ」
「そっちもアホや！　何のおつとめやって訊いとんねん！」

「ドアホ。それを今から弓削さんが説明しはるのや」
がくっとつんのめる。だが、文句を言う暇はなかった。
「傾注！」
階下で若い陰陽師が声を張り上げる。くつろいでいた空気が一気に引き締まった。
屋外や別室にいた者も集まってくる。そうして、百人近い陰陽師が集結した。
その中には昴の姿もあった。
〈昴もここにおったんや！　あの裏切りもん……！〉
「おう、賀茂の若大将や！」「ようお嬢を護ったな！」「大した男っぷりやで！」
喝采が飛ぶ。昴は険しい顔のまま、曖昧に応じた。六連はぶっ飛ばしたい衝動に駆られたが、空気を読んで、ひとまず舌打ちだけで我慢した。
「皆、静まりぃ！　弓削さんのお言葉や！」
一同の視線が弓削に向けられる。一対一では恐ろしいだけの父だが、皆の前に立っているときは凛々しく、知性的で、戦闘隊長に相応しい威厳があった。
弓削はピンと背筋を伸ばし、品よく腰を折った。
「わてが本日の〈代柱〉を務めさしてもらいます。あんじょうよろしゅうに」
よろしゅう！　と周囲で声が上がる。一糸乱れぬ返礼に練度の高さがにじむ。子どもの頃は何とも思わなかったが、今の六連にはこれが異質な集団だとわかっている。
〈親族ゆうより軍隊やわ。それも宗教戦士ゆうやつ……〉

あるいは、かつての武家に近いのかもしれない。ひとつの家がひとつの小隊となり、親族が集まって中隊から大隊をなす。全体が価値観と戦闘技法を共有し、冠婚葬祭から毎年の祭事まで密に連携する。そうして強固なつながりを維持し続けている。

自然、分家より本家、宗家を重んじる気風が生まれ、家格による上下関係ができる。土門、賀茂、弓削、葦屋といった名門は、軍隊における将軍と同じだ。

弓削は各家の年長者と順に視線を合わせつつ、説明を始めた。

「全体を甲、丙ふたつにわけます。甲の指揮を執るのはわてや。つとめは大結界の構築。加持祈祷に長じたもんを選んでや。丙の指揮は」

すっと頭上を見上げる。二階の踊り場に、袴姿の乙女が立った。

ぱっと一輪、花が咲いたようにも感じる。いくぶんやつれてはいたが、姫君の美しさは健在で、周囲から感嘆のため息が漏れた。

日輪は凛とした声で、

「丙の指揮は、うちが執ります。つとめは大逆人の討滅です」

周囲がどよめく。日輪の実力を疑う者はいないが、彼女に何かあっては一大事だ。弓削は念を押すように、陰陽師たちに言った。

「丙の方がむつかしぃつとめや。腕っ節の強ぉもんを頼むで」

そうして人選が行われ、弓削の甲隊参加者は一階へ、日輪の丙隊参加者は二階へとわかれた。丙には一門の中でも武闘派とされる者が集まっていて、昴もこちらだ。

一体、何が始まると言うのだろう？
大逆人の誅滅と日輪は言ったが、それが何を意味するのか、六連にはぴんとこない。
日輪はどんなつもりであそこにいるのか。父や一門の者たちは何のために英国を訪れたのか。できれば日輪に問いただしたいところだが、昴の顔を見たくなかったので、六連は一階に降り、これまた近付きたくない父親に近付いた。
弓削は参加者に和綴じの冊子を配っているところだった。
「結界術の目論見書や、移動中に目ェ通しといてな。術の発動と同時に、凡人は即死してもおかしない量の瘴気があふれる。祓えの準備を怠らんよう――」
「ちょお！　オトン待って！　即死て!?　即死て何!?」
飛び上がるほどに驚き、六連は弓削の腰にしがみついた。弓削はうるさそうに、
「代柱言え。心配せんでも近くの市民さんは避難済みや。港らへんは風上になるしな」
「港て……どんだけでかい結界やの……アンタら、何をしでかす気ィや！」
六連の声が大きく響き、廊下に静寂が満ちた。
弓削はため息をつき、仕方がないという顔で答えた。
「この街を瘴気に沈めて、穢土にするのや」
「えど――って〈穢土〉か！」
穢れの土地、すなわち『穢土』だ。
死体の転がる戦場跡などに出現するもので、魑魅魍魎が跋扈し、立ち入った人間は精神

に支障をきたす――と一般には伝わっている。実際は瘴気の潤沢な領域を指し、当然ながら、陰陽師有利のフィールドと言えた。

「……穢土がでけるんは人がぎょーさん亡ぉなった場所だけや。いくら腕利きが集まっても、古戦場でもない、こんな街中にできるわけない」

まして都市を包むほどの規模なら、万単位の戦死者が必要――のはずだ。

不吉な予感が六連を包む。六連は父と、日輪と、一門の者たちをにらんだ。

「あんたら、まさか……市民を……贄にする気ィか……!?」

今はっきり、綺羅の考えをつかんだ――気がした。

綺羅が日輪に語って聞かせた〈いざなぎの陰〉。その本当の意味を、理解したような。

「穢土をこさえて機巧都市を侵略する気ィやな！　お館さまはそのために、あんたら精鋭を英吉利に呼び寄せたんや！　違うか！」

にらまれた一門の者たちは――

どっと、笑った。

予想外の反応に、六連はむきになる。

「なあああ何笑っとん！　それこそお国の一大事やろが！」

「阿呆、六坊！　おまえの頭が一大事や！」

葦屋が六連を抱え込み、ぐりぐりと頭にこぶしをねじ込んでくる。

「そら、お館さまはおっそろしい御方やけどな、妖怪と違うぞ。そんな途方もないこと、

しはるわけないやろ。俺らは軍の要請できとるんや。赤羽天全の逮捕、神性機巧の確保を手伝ぉてくれゆわれてな。日本男子の誉れやろ？」

「誉れで無辜の市民を何万人も殺す気ィか！　妖怪より性質悪いわ！」

なおも口答えする六連に、ごちん、と弓削のゲンコツが落ちた。

「勝手にわてらを悪党にすな。人殺しなんぞせんでも、穢土はできる。昼間、ぎょうさん命が失われたさかいな。まあ、命と呼べるかわからんもんやけど」

六連の脳裏に、天を埋め尽くす羽虫のイメージが浮かんだ。

「あれ、か……！」

確かに、命と呼べるものかはわからない。だが、あれだけ大量の〈擬似生命〉が死んだ今、魔術の理屈を満たせる……のかもしれない。

六連の勢いが落ちたのを見て、弓削が冷ややかに言った。

「納得したか。ほな、ひっこんどけ」

「まだや！　アンタ半分しか応えてへんぞ。穢土を作って、何をどうする。大逆人てのは誰のことや？」

「わてらは学院を抑える。お嬢は赤羽一門を根絶やしにする」

「根絶やして……雷真はんも？　雷真はんもかっ？」

「赤羽一門は日の本の癌や」

ばっさり斬り捨てるようなものいいに、六連は鼻白んだ。

自分のひたいをぺしりと叩き、笑い出す。
「はは……何の冗談やろ……さすがにきっついで……それは、さすがに――」
ぷつん、と頭の奥で何かが切れる音がした。
「ふ、ざ、け、ん、な！」
怒りに任せて扉を蹴る。軟弱者の意外な剣幕に、親しい陰陽師たちも目をむいた。
「雷真はんはお嬢の恩人やぞ!? 僕が一度、間違おたの知っとるやろ!?」
少し前――夜会参加者がまだ何十人といて、オルガとアスラがそれぞれの軍団を組織し、覇を競っていたときのことだ。六連は『日輪を安全に敗退』させるため、密かにオルガと通じ、六角法陣結界を構築して、日輪の足を引っ張った。
だが、オルガの背後には金薔薇がいて、金薔薇は土門綺羅と敵対関係にあった。
金薔薇は試合に乗じて日輪を殺し、いざなぎ一門を動揺させる計画だったという。六連はまんまと利用されたわけだが、雷真とその仲間たちが日輪の命を守ってくれた。
「僕の間抜けでお嬢は一度死にかけた！　助けてくれたんは雷真はんや！」
「ありがたいことや。けど、彼はなんも知らへんねやろ」
冷ややかな返答。切って捨てるような声音に、六連は怯んだ。
「なんもって……なんよ！」
「いざなぎと赤羽の因縁や。知っとったら、日輪さまを見殺しに――いや、自分で殺したかもわからん」

「み……見損なわんとけえっ！　雷真はんは男の中の男や！　間違ぉてもそんな――」

「喝ッ！」

念動が大砲のように放たれ、比喩ではなく六連をぶっ飛ばした。六連はホールを横切って、対面の壁に叩きつけられる。

綿のような式神が壁からわき出し、さり気なく衝撃を殺してくれる。弓削の手前、皆が知らぬ顔をしていたが、兄貴分の誰かが助けてくれたに違いなかった。

「……六連。おまえ、すこぅし変わったんとちゃうか」

弓削は厳しい顔を崩さぬまま、どこかしんみりとした口調で言った。

「いっつもふらふら、へらへらしよって、始終おなごに鼻の下のばしとったやろ」

「な、なんの話や！　そんなん今ゆうなや！」

「そんなふうに、血ィ熱くするようなタマやったか？」

「――――」

「いらん口答えしてわざわざ叱られるネタ増やすような、そんな子ォやなかったな」

背を向ける。気のせいか、ちらりと見えた横顔は、綻んでいるようにも見えた。

「……雷真くんがあくまで従わんなら、討たねばならんようになる。けど、わてらにも仏心ゆうもんがある」

……それは、見逃してくれる、という意味だろうか？

「わてらの狙いはあくまで天全――あれは真実、大逆の謀叛人やさかいな。それに、市民

さんのことも心配いらん。わてら一門がこの国に仇なすことは絶対にない」
「……そんなん、何で言い切れるの」
息子の強情に折れたのか、弓削は嘆息し、決定的なことを口にした。
「日輪さまが、えげれすの女将さんにならはるからや」
「――今、なんて？」
「日輪さまは、英国王エドマンド三世陛下の奥方にならはる」
「狂王の……奥方やて……!?」
瞠目する。六連は弾かれたように階上を振り仰ぎ、怒鳴った。
「ほんまかお嬢!? 昴！」
「まことです」
日輪本人が、きっぱりと、一門の者たちの前で肯定した。
「わたくしはエドマンドさまの妻となり、ともにこの国を治めます」
涼しげにすら思える瞳で、まっすぐ六連を見下ろして言う。一切の迷いがないその言葉を聞き、六連は裏切られたように感じた。
「……はは、それはあれや……お館さまに言わされてんのや。そうやろ？　なあ！」
階段を駆け上がろうとする。その六連の歩みを、丸太のような腕が邪魔をした。
「六連。もうええやろ」
昴だった。腕を広げて、六連を阻んでいる。

「邪魔すな。みんなこれから、大事なつとめがあるのや」
かっと頭に血が上った——が、灼熱した頭は一瞬で冷えた。『萎えた』と言うべきかもしれない。呆けて立ち尽くす六連に、弓削のとがった声が届く。
「山さん、神さん、そのドアホを地下牢につないでや。水も飯もやらんでええ」
命令を受け、若い陰陽師が二人、両脇から六連の腕をつかんだ。
「しゃーない、六坊、父上の仰せや」
「辛抱せえ。明日には出したるさかいな」
魔封じの鎖で六連の手足をぐるぐる巻きにする。だが、そんな拘束をされずとも、六連はもう抵抗せず、騒ぐこともしなかった。
日輪も、昴も、もう六連とは目を合わせようとしなかった。
六連もまた、二人と目を合わせたいとは思わなかった。
引っ張られるまま、地下へと降りる。地上部分は一般的な民家と同じつくりだが、地下には鉄格子つきの鉄扉が並び、いかにもな牢獄となっていた。
一番奥の房に放り込まれ、鍵をかけられる。
独りきりになると、床から底冷えのする寒さが襲ってきた。
六連は粗末なベッドに腰を下ろし、考え込む。雷真はどうなったのだろう？
（お館さま、何しはる気ィや？　お嬢、本気で狂王に嫁ぐ気ィやろか？　それにつけても昴の阿呆、あっさりあっちつきよって——そらまあ、昴は賀茂家の嫡男やし、立場もある

言う通りや、僕そういう性分ちゃうやん！）
　本来なら、綺羅にも、父にも、反抗するような性格ではない。
（僕、基本、楽したいタイプやねんな。お嬢の留学についてくるんかて、正直ちぃーっと面倒や思ぉとったわ。……まあ、外国のお嬢さんとお近づきになりたいとか、卒業したらモッテモテやろなとか、そぉゆう楽しみはあったけども）
　逆に言えば、その程度の軽い気持ちだった。旅先で日輪の命が危うくなるなどとは考えなかったし、自分が死ぬような目に遭うとも思っていなかった。なのにこの半年で、一体何度、死ぬような目を見たのだろう？
　そして――いつの間にか、そんな日々に心地よさも感じていた。
　これまでの人生で感じたことがないような充足感を覚えていた。だからこそ、日輪と昴の心変わりが許せない。
　……このまま放っておいて、いいのだろうか？
　一門の者たちが言っていたことは、どこまで事実なのだろう？
　彼らに邪心はない――ように思えた。彼らは心底から、『お国のため』『一門の誉れ』と信じて、この英国にやってきている。
　だから、全力で務めに臨む。綺羅の命令通りに。
　綺羅の腹にある邪念を、彼らは知らない。いや、六連自身、綺羅が腹の底で何を考えて

いるのかなど、わかってはいない。
果たして何が起こるのだろう？　何かが起こったとき、自分には何ができるの——
「って、また考えとるやん！　もーやめ！」
六連はベッドに横たわり、毛布を頭からかぶった。
「脱出手段もあらへんし、僕なんて役立たずやし、頭痛いし、眠いし、もう寝ますよ！」
だが、皮肉にもそう宣言した途端、眠れない状況になったのだ。
「……その声」
蚊の鳴くような細い声が、鉄の扉の向こうから聞こえる。
先客がいたらしい。少女のようだと理解して、六連は耳を澄ます。
相手の声は、こう続いた。
「そのうるさい感じ……聞き覚えがあるね……君は確か……ムツ……ムッツリ」
「ムッツリしてへんよ!?　僕ネアカやしね!?」
思わず突っ込んでしまう。そして、六連は急に可笑しくなった。
運が向いてきたのではないか、と感じる。まさか、こんなところに彼女がいるとは。
六連は階段の上、監視の気配に注意しながら、声を潜めてつぶやいた。
「妙なところでお会いしますね、アリスはん？」

4

連行されていく六連を、日輪は直視できなかった。

『ほんまかお嬢！』

叩きつけるような眼差し、裏切られたような表情が、まぶたの裏に焼きついている。

あのエドマンドと結婚するのかと、責められているようだった。

雷真ではなく。昴でもなく。よりにもよって、悪の権化のような狂王と――

「お嬢、平気どすか？　何やお顔の色が優れませんけど」

女の陰陽師が気遣わしげに訊いてくる。日輪は微笑み、平静を装って応えた。

「平気です。さあ、つとめの段取りを」

年かさの陰陽師が中心となり、作戦の詳細が語られる。学院への侵入ルート、確保すべき拠点、使うべき術が説明され、意志の統一が図られる。

それをどこか上の空で聞きながら、日輪は己の中の葛藤と戦っていた。

六連の激しい憤りはもちろんだが、一門の者たちの優しさ、純粋さもまた、今の日輪には『重たく』感じられる。

年季を経た重職たちは、綺羅がやろうとしていることを理解している。

エドマンドが英国を掌握したのと同じように、綺羅も日本を掌握しようとする。

おそらくは軍部と結び、政府転覆を謀る。ひょっとしたら、軍の統帥権――畏れ多くも皇室の権威すら否定するつもりかもしれない。

そうした恐るべき計画を、若手の陰陽師たちは知らない。彼らは純粋に、国家のために、一門のために働こうとしている。
それが、重い。背負いきれないほどに。
「揺れるな、お嬢」
となりの昴が、前を向いたまままささやいた。
「おまえが大将やぞ。大将の揺れは下のもんまで伝わる。皆が浮き足立つ」
「……そう……そやね」
「心配せんと、前だけ向いとけ。おまえの背中は俺が護る。おまえの望みが断たれんように、おまえの足場は俺がちゃーんと固めたる」
それこそ『揺れ』のない、確信に満ちた言葉だった。
日輪はおそるおそる、たずねた。
「うちが……英王室に嫁いでも?」
「阿呆、どこでも同じや」
笑う。腹の据わった態度に、日輪は己を恥じた。
そうだ。揺れてはいけない。もう覚悟を決めろ。己のなすべきことをなせ。
「いざなぎ流は力こそすべて……勝者の言い分こそがまかり通る……」
己に言い聞かせるように、一門の金言をつぶやく。
「お祖母さまに抗うためには、まず働きを示さなくては」

「そや。おまえは示さなあかん。いざなぎ一門を背負って立つ女は、おのれやとな」
綺羅の道が間違っていると思うなら。それを正したいと思うなら。
日輪はまず、次期〈お館〉に相応しい力を示さなければならない。
そうして信頼を得てからでなければ、誰もついてはきてくれない。雷真とアリスが謀ったような、綺羅を倒すだけのやり方では到底、駄目だ。
ただ——その猶予があるのかどうかが不安だった。世界大戦が勃発する前に、綺羅を超える信任を得られるかどうか。
(ここまできたらもう、信じるしか……)
自分は最善を尽くしているのだと、信じて進むしかない。
(こたびのつとめを果たし、神性機巧を手にさえすれば……!)
綺羅を止め、エドマンドの覇道を阻み、日英両国を護る機会は、きっと訪れる。
人事を尽くして天命を待つ、という言葉の意味を日輪は噛みしめた。
「——さあ、日輪さま。まいりましょう」
作戦の説明を終え、年長の陰陽師がうながす。日輪はうなずき、手勢を見回した。
「赤羽天全を討ち、素体を回収します。そして神性機巧を手にするのです!」
応、と小気味のよい返事が聞こえる。日輪はうなずき、階段の降り口へと向かった。隊の者たちが整然と続く——が、昴だけは、建物の奥へ戻ろうとした。
「えっ、昴? どこへ?」

「すまんな、お館さまに頼まれ事してて、出遅れるけど、必ず駆けつける。いっちゃんおまえのためになる、とっときのもんを持って行く」
「とっときの……なに？」
「もう行け。心配いらん」
昴の表情は穏やかだ。その微笑みが、なぜだか不安を誘った。彼が遠くへ行ってしまうのではないかと、妄想じみた恐れを感じる。
だが、日輪には果たすべき大役がある。日輪はもう振り向かず、
「出陣します！」
「日輪さま、出陣や！」「どうぞ、ご無事で！」「お気張りやす！」
皆が口々に叫ぶ。別働隊の見送りを受け、日輪は軍の拠点を進発した。

5

ただでさえ朦朧としている雷真に、この状況はあまりに突飛すぎた。
いきなり発砲した無頼漢が、日本軍を自称し、ほかならぬ雷真の身柄を要求している。
彼らが本当に日本軍なのか、わからない。英国詰めの上官を見たことがないからだ。
「愚かなふるまいです……このような場所で発砲するなど……！」
いろりがつぶやく。雷真も同意見だったが、一方で安堵もしていた。先の『ぱんっ』と

いう発砲音、自分の胸で精瑠が弾け飛んだ音ではないかと思ったのだ。
（やべえ……今にもはがれそうだ……！）
体内でめりめりという嫌な感触がある。溺れた人間が酸素を求めるように、精瑠が魔力を求めて喘いでいる。
「雷真……ひどい顔色ですよ……」
夜々が見上げてくる。雷真は背筋を伸ばし、何でもないふうを装った。
「大丈夫だ。いろり、連中は本当に日本軍なのか？」
「そう……ですね。見た顔が多いように思います。指揮官は初めて見ますが」
一定の信憑性はあるということか。ただし、たとえ顔が一致していても、魔術師が変装している可能性は消えない。
「ニホン軍だと……？」「〈下から二番目〉の母国か？」「なぜ、今……？」
客席にざわめきが広がる。が、指揮官らしき紳士は平然として、学院長の返答を待っていた。よほど腕が立つのか。頭が切れるのか。あるいはその両方だろうか。
雷真は胸を押さえながら、回らない頭で考えた。
（今まで地下に潜ってたのに、土壇場で出てきたのは婆さまの差し金……か？）
雷真がお館に働いた狼藉を知って、処分のために現れた？
……いや、人前で発砲する理由がない。雷真が闘技場を後にしてから、密かに接触すればいい。わざと耳目を集めるような真似をしたのは、なぜだ？

もし軍が綺羅の要請で動いたのなら、逃げなければならない。だが、その場合は綺羅も近くに潜伏しているだろう。綺羅を蹴散らして離脱する余力は……ない。

酸欠で脳細胞が働かない。精瑠の結合がゆるみ、じんわり胸から血がにじんだ。

「くっ……」

「雷真！　やっぱり具合が悪いんじゃ――」

「大丈夫だ！」

強く言う。夜々がまた生命をわけてくれたらと思うと、気が気ではない。

雷真が苦悩するあいだにも、客席では学院長と紳士のやり取りが続いていた。

「彼は日本人なのですから、我らには引き取る資格があるはずです。立て続けのトラブルで学院の医療設備も被害を受けているでしょう？」

「治療に差し支えるほどではありません。むしろ搬送のリスクを考えるべきでは？」

「学院には任せておけぬと申しているのです。彼はその魔術名の通り〈最後から二人目〉となりました。我が国にとって、彼はもはや『金の卵』。万が一があっては困る」

「学院が治療にかこつけて彼に危害を加えると？　私も教育者の端くれ、そのような下劣な考えは起こしません――などと申したところで、説得力は皆無でしょうな？」

ラザフォードの彫りの深い顔に、苦い笑いが広がった。

「では、本人に決めさせてはいかがです？」

急に矛先が向く。ラザフォードの鋭い一瞥がこちらを射抜いた。

「聞こえていただろう、ライシンくん。君はどうしたいと思うね？」
しめた、と思った。雷真が『学院にとどまる』と答えれば……！
（学院長が味方してくれる！　そうなりゃ、軍は退散するはず――）
いや、違う。
そう簡単に引き下がるつもりなら、発砲なんて真似はしない。軍は武力行使も辞さない構えで行動を起こしたはずだ。
ではもし、ここで雷真が抵抗すると？
（戦闘になる？　そんな馬鹿なことが、本当にあるか……!?）
英国に詰めているのは、せいぜい一個中隊程度の人数だそうだ。学院を攻略できる人数ではない。だが、彼らの背後に綺羅がいるなら……？
雷真は客席を見回し、綺羅を探した。魔女の姿は見つからなかったが、代わりに、面白がるような目つきのエドマンドと目が合った。
薄笑い。雷真が馬鹿なことを仕出かすのを、心待ちにしているように見える。
――どうすればいいか、わからない。
煩悶する雷真の後ろで、ロキが不機嫌な声を出した。
「優柔不断馬鹿が。何を悩んでいる」
「……うるせー、ほっとけ。今ちょっと取り込み中なんだよ」
「ロキの言う通りよ。悩むことなんてないじゃない」

憎まれ口を叩きながら、シャルが舞台に降りてくる。唖然とする雷真をよそに、シャルはすたすたと雷真の前まできて、かばうように背を向けた。

「貴方が学院に残るって言うなら、私たちが護ってあげるわよ」

当然という調子で言い切る。かっと雷真の胸が燃えた。雷真自身にも事情がわかっていないのに、この二人は理由も聞かず、そう言ってくれるのだ。

(おまえらだって、立ってるのがやっとのくせに……!)

彼らの気持ちがありがたい。ありがたいからこそ——雷真は決断した。

客席を見上げ、学院長と指揮官に言う。

「行かせてくれ、学院長。俺は軍の治療を受ける」

「駄目です、雷真!」

夜々が雷真の腰にしがみついた。

「行っちゃ駄目です!　軍が言葉通りに治療してくれるとは限りません!」

「夜々の申す通りです!　昼の一件を思い出してください!」

いろりが雷真の胸、血で湿った制服に触れ、訴えかけるように言った。

「この傷がいかにして生じたか、もうお忘れなのですか……!?」

濡れた瞳が光る。姉妹にどれだけ心配をかけたか、改めて思い知らされた。

「姉さま、小紫、ここは逃げましょう!」

「うむ!　雷真殿、今はお姿を隠すべきです!」

「雷真、魔力のことなら心配しないで！　私、まだ元気残ってるよ！」
小紫も主張する。三姉妹の気持ちは素直に嬉しかったが、彼女たちに余力があっても、雷真にはない。綺羅を振り切ることは不可能だ。
雷真は三姉妹を引き寄せ、説き伏せるつもりでささやいた。
「聞け。どのみち、一度は行かなきゃならねえと思ってたんだ。先送りにしていたことに全部ケリをつけてくる。うやむやになったままの、硝子さんのこともだ」
「それなら——それなら、夜々も一緒に行きます！」
「駄目だ」
雷真はロキとシャルに目配せしつつ、己の考えを述べた。
「軍が雪月花をどうするか読めない。最悪、没収ってこともある」
「ですけど！　雷真ひとりじゃ、もしものときに困ります！」
「婆さまがどう出るかは賭けだが、軍は俺を殺さない……と思う。あの軍人さんが言った通り、俺はもう軍の〈金の卵〉だからな。魔王の座が目前なんだ」
もっとも——、と雷真は苦笑する。雪月花を置いて行く一番の理由は、いざ戦闘になったとき、夜々を戦わせたくないからだ。
夜々はしばし無言で、己の感情に抗っていた。
ややあって、こくり、とうなずく。雷真は安堵し、もつれて転びそうになる膝を励ましながら、客席の方へ歩き出した。

水を打ったような静寂の中、初めて見る上官と向き合う。
既に魔力は枯渇し、精瑠がはがれ落ちる寸前だ。今なら、魔術師ではない者にも殺されかねない。雷真は緊張の極みにあったが、指揮官は意外にも優しい声で、
「心配無用、この先は軍が貴様を護る。――では学院長、赤羽雷真を引き受けます」
後半はラザフォードに告げる。ラザフォードは渋い顔で首肯した。
「結構。ですが明日の夜会までには戻していただく。間に合わぬ場合、彼は夜会参加資格を失います。どうぞ、お心にお留め置きください」
「言うに及ばず。では、失礼」
手で合図を送る。軍の者が担架を運んできて、その上に雷真を横たえた。
かくして、雷真は軍の手で闘技場から運び出されることとなった。
担架に揺られるたび、傷が開く気がする。強烈な眠気に包まれながら、雷真はぼんやり思考を巡らせた。最善の選択肢を選んだつもりだが、本当にそうだろうか？
軍はなぜ、こんなタイミングで、こんな行動に出たのだろう？
考えているうちに思考が麻痺し、意識が遠くなっていく。
（くそったれ……せめて、体調が万全なら……！）
この胸の傷さえなければ、もっと上手く立ち回れたはずだ。そう考えると、またしても心が濁り、呪わしい気分が込み上げてきた。
（恨むぜ、日輪……！）

それを最後に、何も考えられなくなった。

6

雷真が担架で運び出されるのを、夜々(やや)は震えながら見送った。
雷真は『軍は俺(おれ)を殺さない』と言った。魔王(ワイズマン)になり得る身だからと。
だが、夜々にはこう思える。軍はもっと、ずっと恐ろしいことを考えているのではないか。魔王の座をあきらめてもいいような、とても恐ろしいことを……。
「さて、彼は確かに預かりました」
雷真が闘技場から消えるのを待って、指揮官らしき紳士が言った。
再びラザフォードに向き直る。ラザフォードは皮肉たっぷりに返した。
「お望み通りの結果でしょうに、まだ何か御用がおありですかな?」
「むしろここからが本題です。雪月花(せつげっか)を引き渡してもらいたい」
三姉妹が『あっ』とつぶやく。まんまと雷真と分断され、丸裸の状態だ!
だが、決して無防備ではない。三姉妹の回りにロキ、シャル、フレイが立つ。のそのそと集まってきたガルム犬が、敵意をむき出しにして軍人たちを威嚇した。
「心配しないで。貴女(あなた)たちを渡すわけないでしょう?」
シャルがささやく。当然という顔で。

そうか、と思う。雷真はきちんと、友に託して行ったのだ。

そして、味方してくれたのは仲間たちだけではなかった。

どんっ、と地に杖をつき、パーシヴァルが立ち上がった。

「やるか、ラザフォード?」

並み居る教授たちが次々に席を立ち、臨戦態勢になる。オルガを筆頭とする執行部役員、腕に覚えのある学生たち、場内を警備していた警備の者たち、理不尽に威圧された一般客まで、皆が日本軍をにらみつけている。

気がつけば、闘技場の大半が、雪月花を護る〈盾〉になっていた。

小紫が頬を上気させ、興奮気味にいろりを振り向く。

「姉さま、これって……!?」

「ああ。異国でこのような、人の慈悲に触れようとは……!」

「慈悲じゃありません。雷真の人徳です!」

夜々の胸いっぱいに、熱い感情が広がる。今日まで自分たちがしてきたことは、決して無駄ではなかったのだ。

会場中の敵意が指揮官に向く。だが、指揮官は表情ひとつ変えなかった。

夜々の中で、嫌な予感が大きくなる。

(どうしてあんなに落ち着いて……まさか、この展開はあちらも想定済み……?)

ラザフォードも同じ懸念を抱いたようで、ひとまずは周囲を制した。

「寡言は往々にして不幸な行き違いを生む。まずは話し合おう」

穏やかな声とは裏腹に、強烈な魔性をたぎらせ、恫喝するように告げる。

「日本軍の方、ここは貴国の領土ではありません。取るべき段取りも踏まず、火器を持ち込んで威圧する――左様な横暴がまかり通るはずもありますまい？　極東で私が同じことをすれば、貴方がたもお怒りになるはずです」

「段取り？　踏みましたとも。そして、許可をいただいております」

ラザフォードは苦笑を漏らし、あきれ顔をとなりに向けた。

「――ということのようですな、陛下？」

この騒ぎの中、エドマンドは泰然として座していた。

賊の襲来にも等しいこの事態に、身を護ろうとする様子もない。彼の近衛も成り行きを傍観しているだけだ。その事実が、何より雄弁に物語っている。

「ああ、すまない、学院長。私が許した」

そう――つまり、そういうこと。

エドマンドは貴公子然とした笑みを浮かべ、人を食ったような調子で言った。

「学院への連絡が遅れたことは詫びよう。同盟国たっての願いとあらば、無視もできないのでね。どうだろう、ここはひとつ、彼らに協力してやっては？」

「協力ですと？　どのような？」

「雪月花を差し出したまえ。これは日本の国内事情というものだ」

「ほう、国内事情。他国で狼藉を働くほどの。それはいかなる事情でしょうな？」

指揮官を横目で見やる。無言を通すかと思ったが、指揮官はさらりと応えた。

「雪月花は我が国の機密に相当します。花柳斎が協会に身柄を拘束されている今、我らが管理しなければ技術流出のおそれがあります」

夜々はあやうく声をあげてしまうところだった。何て言い草だろう。硝子が創意工夫で造り上げたものを、己のものであるかのように！

だが、硝子を育て、生かしていたのは、確かに日本という国だ。そして、花柳斎人形の製造法が国外に漏れれば、脅威となるだろうことも理解できる。

エドマンドは満足げにうなずき、駄目押しのように言った。

「言うまでもないことだが、我が国と日本は内政不干渉で一致している」

「……雪月花は学生の財産です。いかなる事情があるにせよ、真偽を確かめる手間を惜しみ、私の独断でこれを差し出すことは、学院自治の死を意味します」

「では？」

「一切の協力を拒否させていただく」

断固として告げる。エドマンドはむしろ痛快そうに笑ったが、指揮官は冷徹な光を瞳に宿し、最後通牒のように訊いた。

「我々を信用してはいただけませんか？」

「ご冗談を。信ずるに足る要素がどこにあったのです？」

ラザフォードもまた、冷笑でそれに応える。

「ライシンくんを遠ざけての後出し交渉、控えめに申しても卑劣な騙し討ちです。雪月花が欲しいなら、持ち主に言えばよろしい」

まさしく正論。指揮官は渋面になり、ゆっくりと首を左右に振った。

「失礼ながら学院長、貴方は当方を侮っておいでだ。どうせ何もできぬと、たかをくくっておられる。事実、ここには魔術師の先生がたが大勢いらっしゃる。学生たちも俊英ぞろい――ですが、日の本には日の本の秘術があるのですよ」

空気が一変する。異変を察し、ラザフォードの魔力が高まった。その膨れ上がる緊張感のただ中に、気がつけば夜々は飛び込んでいた。

「夜々っ!? 待たぬか！ これ！」

いろりの叱責はもうはるか彼方だ。夜々は空中でくるりと身をひねり、客席のど真ん中、学院長と指揮官のあいだに降り立った。

「ま、待ってください！」

上ずった声で叫ぶ。ただし、そこからどうしていいかわからなかった。

言葉が出てこない。だが、自分が何とかしなければいけないという気持ちがある。人形の自分にも霊感というものがあるのなら、これがそう。軍の行動を許してはいけないし、学院と対立させてもいけない。このまま軍と学院が抗争状態に突入すれば、雷真の夜会は本当にダメになってしまう。

自分は雷真の相棒なのだ。だから、彼の役に立ちたい。そのためには……。
「し、指揮官さん、どうか落ち着いてください」
自分でもズレていると思いながら、夜々は説得にかかった。
「どうか、騒ぎを起こさないでください。せめて夜会が終わるまで……」
「自ら身を委ねる気になったのか？　それとも、主の顔を潰すつもりか？」
指揮官の厳しい台詞に、夜々の血が凍りついた。
彼は今、暗に警告したのだ。『おまえの主人がどうなるかわからないぞ？』と。
雷真を人質に取られているも同然だが、夜々は引き退がらなかった。
「雷真は仇討ちのために英国にきたんです！　軍だってそのことはわかっていたはず……いま雪月花を取られたら、雷真は戦いようがありません！」
「私闘を許可した覚えはない。彼も、おまえたちも、軍令に従ってもらう」
「め、命令には従ってきました！　ですから今は、穏便に――」
瞬間、指揮官の銃が火を吹いた。夜々の眉間めがけ、至近距離から弾丸が飛ぶ。
金剛力を使う間もなく、銃弾は氷壁にそらされ、天へと消えた。
いろりがふわりと跳んできて、夜々の肩を支え、指揮官にこうべを垂れた。
「妹の無礼な言動、どうかお許しを。傀儡とは言え、姉として責任を感じております」
「……殊勝だな。では、どうする？」
「雷真殿がここにいらしたなら、きっとこうされたと思いますゆえ――」

いろりの肌から猛烈な冷気が立ちのぼり、客席の床に霜が下りた。
「力尽くで、お引き取り願おうと思います」
これ以上ないほど明瞭な、敵対表明。
なるほど、この発想、確かに雷真のそれに近い。ここで日本軍が実力行使に訴えても、周囲が味方してくれる。夜会と学院さえ護れれば、ひとまず希望はつながる。ただすべてが終わった後で、日本に帰れなくなるだけだ。
氷面鏡が闘技場全体を包む。自動小銃が瞬時に氷結し、軍人たちの靴が冷気で床に張りついた。さすがはいろり、十数人を一度に無力化した──かと思われたが、その氷のすべてが、ふわっと溶けて消えてしまった。
見れば、黒い霧状の魔力──瘴気とやらが、いろりの冷気を散らしている。
それが誰の仕業かを直感し、今度はこちらの精神が凍りついた。
「やぁれやれ……しつけのなっとらん傀儡やねえ？」
聞き覚えのある声とともに、思った通りの人物が、〈黒い水たまり〉から現れる。
指揮官のかたわらに、しゃなりと土門綺羅が立った。
彼女の魔性をひと目で見抜き、教授陣に緊張が走る。緊張──いや、これはもう戦慄と言っていい。夜々はあわてて視線を走らせ、あの鬼神の姿を探した。
（いない……!?　ですけど……！）
昼に感じた以上の脅威を感じる。何か恐ろしい力、圧倒的な暴力が、すぐ側に迫ってい

る――そんな恐怖がまとわりついている。
綺羅は柔和な愛想笑いを浮かべ、指揮官に進言した。
「皆さん気ィ立ったはる。こらもう、談判の場からして、こしらえなあきまへんな?」
「……土門さまのおっしゃる通りかと」
「ほな、後はわてが引き受けます。〈黄泉比良坂〉、出でま征」
両手を合わせ、拝むように指を組む。直後、突き上げるような揺れがきて、出し抜けに地殻変動が起こった。
教授たちの中には、抵抗を試みた者もいたのだろうか……。だが、綺羅の術は問題なく発動し、大地がぐんとせり上がった。真上から押しつけられるような圧力がかかり、学生たちはつぶれたカエルのように、床に這いつくばった。
やがて揺れが収まったとき、あたりの光景は一変していた。
視界が黒く濁って見える。一方、吐く息は白く、気温が下がったとわかる。
「な……によ、これ……! どうなってるの……!?」
舞台の上でシャルが狼狽した声を出す。彼女が何に驚いているのか、ほとんどの学生にはわからなかっただろう。揺れのわりに足場は崩れず、健在に思えたからだ。
だが、わかる者にはわかっている。足に伝わる、この頼りない感覚は……!
「姉さま! 私たち今、お空の上にいるよ!」
感覚の鋭い小紫が叫ぶ。夜々も遅れて実感した。実に馬鹿げた話だが、瘴気の雲に乗る

ような格好で、この闘技場全体が、天高く浮き上がっていたのだ。

仮に念動でやるとすれば、何万人ぶんの力がいるのだろう？　だが、綺羅は疲れた様子もなく、むしろ生き生きとした顔で、教授たちの狼狽ぶりを眺めていた。

「……軍人たちの姿が消えたな」

シグムントが硬い声でつぶやく。言葉通り、日本軍は影もない。どうやら綺羅が転移させたらしい、と思い至った途端、夜々の背中に震えがきた。

そうか。つまり――

綺羅がそうしようと思えば、観客を虚空に放り出すこともできる。

教授陣は抵抗できるとしても、一般人は無防備だし、学生では綺羅に力負けする。この天空から転移で放り出されたら、とても助かる見込みはない。

雷真だけではない。ここにいる全員が、綺羅の人質のようなもの。

「さて、これで学院のセンセ方も、ものわかりがようなったんちゃいます？」

綺羅は目を細め、狐を思わせる笑みを浮かべた。

本当に悪魔のような魔女だと、夜々は思った。

Chapter 4 悲劇が起きて

1

ここで少々時間は戻り、今朝方のこと――

灰薔薇の襲撃から一夜明けて、リヴァプール市街は一応の平穏を取り戻していた。これから神話級リヴァイアサンが大惨事をもたらすなど、市民は知らない。

グリゼルダもまた、そこまでの危険は予期しなかった。灰薔薇から奪還した協会支部で、キンバリーの手術が終わるのを待ちながら、チェスを楽しむ程度の余裕がある。

対戦相手は硝子の護衛――とかいう触れ込みのサムライだ。

窓から差し込む朝陽がまぶしい。生あくびを噛み殺し、チェス盤の向こうを盗み見ると、雲雀は疲労の色も見せず、涼しい顔で長考していた。

(化け物……疲れた顔のひとつも見せれば、少しは可愛げがあるものを)

憎たらしいことこの上ない。ただし、盤上の勝負はグリゼルダが優勢で、泣きを入れさせる楽しみが残っている。内心にやにやしていると、雲雀がふっと顔を上げた。

ドアの方を振り返り、細い目をさらに細める。
「またあんな泡を食って……今度は何をやらかす気でしょうね？」
「ふん、何を迷惑そうな顔をしている。貴様の教育の賜物だろうが」
「うわぁ、こんなときだけ私に師の責任を押しつけます？」
やがて荒々しい足音が近付いてきて、蹴破るような勢いでドアが開いた。
「お師匠さま！　頼みがあるんだ！」
前置きなしに言う。学院から走ってきたらしく、雷真は軽く汗ばんでいた。
師二人がチェス盤を挟んでいるのを見て、目を丸くする。
「――って、何やってんだよ、二人で？」
「見ての通り、徹夜でチェスだが？」
「タフだな……。ここで灰薔薇の手下と戦ったんだろ？　疲れてねえのか？」
「その突入作戦が発端だ。こやつの単細胞を詰ったら、私の方がよほど単細胞だとぬかしたのでな。魔王の戦術眼を見せつけてやろうと」
「……俺には、あんたが見せつけられてるように見えるんだが」
「ふふん、貴様の目は節穴だな。どう見ても私が優勢――」
いや待て。以前にもこんなことがあったような気がする。
あわてて駒の利きを確認してみると、グリゼルダのキングはとっくに詰んでいた。優勢だという思い込みで、遠見のビショップを見逃していたらしい。

「既にチェックメイト……だと!?　ならばなぜキングを取らん！」
「いやぁ、いつ気付くかなーと思いまして」
「く、くぅ……こんな単細胞の蛮族にコケにされるとは……っ」
　これ以上ない屈辱だ。打ちひしがれるグリゼルダに、雷真が慰めを言う。
「俺に将棋を仕込んだの、この人だよ。俺は二枚落ちでも勝ったことがねえぞ」
「おのれ日本人ども！　そろってたばかりおって！　斬り捨ててやる！」
「やめろ単細胞！　大人になれ！」
「それが師にものを頼む態度か！　頼み事が何であれ、手伝ってやらん！」
「全力で子どもだな！　でも悪かった！　すねないで聞いてくれ！」
　そうして、雷真は己の計画を語り出した。本日中に魔女二人を倒し、夜会への影響を断ち、日輪とシャル両方の問題を解決するという大胆な方針を。
「要するに、『強敵と戦うので力を貸してください』ということか」
　グリゼルダはいくぶん機嫌を直し、もったいつけるように言った。
「まったく仕様のない、手のかかる弟子だ♡　貴様も少しは学習したようだな。真っ先に私を頼ったのは利口だぞ」
「あ、いや……真っ先っつーか……アリス……」
「どうした？　はっきりしない奴は戦場で死ぬぞ？」
「何でもねえ！　そうデス！　真っ先にお師匠さまにすがりにきました！」

「うむ？　まあよかろう。私はオヤカタとやらを殺せばいいのか？」
「それは日輪の婆ちゃんだ！　その人じゃなくて、薔薇の魔女――」
「待ちなさい。戦う戦わない以前に、日輪さまに関わること自体、認められません」
黙って聞いていた雲雀が、とがめるように口を挟んだ。
「日輪さまのことは、土門さまがよくよくお考えになって決められたことです」
「――師範、事情を知ってるのか？　日輪のことって何だよ？」
「ありゃ、これは口がすべりましたね……。まあ、何も教えられないのですが」
「では口を出すなサムライ！　これは私とバカ弟子、つまりは師弟の話だ！」
「さっき私に師の責任を押し付けたじゃ――まあ何でもいいですけど。雷真、君はここでじっとしていなさい。今日一日。いいですね？」
たおやかな笑みを向ける。男勝りのグリゼルダよりもむしろ女性的な笑みだが、雷真のこめかみを汗が伝った。読み違った、と後悔している顔だ。
雷真は「後でまたくる！」と言い残し、素早く逃げて行った。
「ありゃりゃ……あのぶんでは、聞き分けそうもありませんね～」
雲雀が軍刀をつかんで立ち上がる。グリゼルダはそれに先んじて動き、部屋の出入口に立ちふさがった。
「貴様……今の話を日本軍に密告するつもりか？」
「密告とは穏やかじゃないですが、まあ一応、報告するのが筋かと」

ぴん、と空気が張り詰める。休眠中だった剣のディガンマ、盾のスティグマに魔力の火が入り、雲雀の背後で空中に浮き上がった。

魔王と機械天使に挟まれ、雲雀は『降参』というふうに両手をあげた。

「わかりました、わかりましたよ」

「本当だろうな？　そもそも貴様、私の弟子をどうするつもりで動いている？」

「私の弟子のことでしたら、まあ、悪いようにはしないつもりです」

こちらの殺気を受け流し、雲雀はからかうように言った。

「そんなに雷真が大事ですか？」

「……なに？」

「彼に想いを寄せるお嬢さんは大勢いるわけなんですが、それでも？」

「……ああ、まったくあいつは度し難い奴だ。数多の少女を引っかけては捨て、引っかけては捨て——いずれこの手で去勢してやらねばなるまい。だが、あいつは私と私の故郷のために命を懸けてくれた男だ。私はそれに報いる」

雲雀は細いあごに手を添え、ほう、と感心したように息をついた。

「なるほど、そこが急所でしたか……。それじゃ訊きますがね、魔王さん。もし私が貴女のために命を懸けたら、私のお嫁さんになってくれます？」

「嫁——って、はあ⁉」

集中が乱れ、高めた魔力が霧散した。距離を取り、あわてて集中し直す。

「きき貴様一体何を――いや、それはひょっとしてアレか？　遠回しの求婚？」
「いえ、直接的な求婚です」
「そ、そうだな、そんなわけがなかっ――え？」
真顔で訊き直す。雲雀はやはりたおやかに微笑み、さらりと言った。
「夫婦になりませんか、私と」
二の句を継ぐのに、数秒かかる。ややあって、グリゼルダは大声で叫んだ。
「何だとーっ⁉」

2

という今朝の光景を思い出し、グリゼルダは舌打ちした。
（痴れ者め！　やはり敵に回るか……！）
殺気込みで雲雀をにらむ。半日前にも綺羅に味方して、雷真を窮地に陥れた。日本軍の食客という立場もあるだろうが、だとしても許せない。
グリゼルダの神経を逆撫でしたいのか、雲雀はとぼけた調子で口を開いた。
「あのー、退いていただくわけにはいきませんか？　貴女と花柳斎さんの安全は保障――はいたしかねるわけなんですが、手は尽くしますので」
「……そんないい加減な言葉を他人が信じると、本気で思っているのか？」

言いながら周囲を確かめる。薬棚が破壊され、薬品の臭いが充満している。ガラス片が散乱しているが、アンリとキンバリーは魔術師たちの魔防に護られ、無傷だ。灰十字の戦士は四人なので、数の上では圧倒的にこちらが有利——なのだが。

（こいつが相手では、どう転ぶかわからんな……！）

互いに隙をうかがっているうちに、遠くから爆発音が聞こえてきた。

雲雀がそちらに目をやり、独り言のように言った。

「……夜会も佳境のようですね。戦っているのは雷真のようですが」

ディガンマを構えたまま、グリゼルダは背後の機械天使に訊いた。

「スティグマ。夕刻の時点で、馬鹿弟子は確かに生きていたんだな？」

『それをおたずねになるのは三度目ですわ、マスター』

盾の人形が笑う。しかし、質問にはきちんと答えた。

『恥ずかしながらこのスティグマ、最後まで見ていたわけではありません。途中で魔力の供給が断たれてしまいましたので』

「そうだったな……だからこそ、私自らおまえを回収しにきたのだ……」

アリスと引き離されたことで、スティグマも休眠状態になった。スティグマが見ていたのは、地下空洞にリヴァイアサンの毒素が流入したところまでだ。

「〈下から二番目〉は、無事のはずだ……」

山鵺の後ろで、キンバリーがつぶやいた。

「先刻、協会の拠点に〈戦隊〉が現れ、花柳斎を連れ去ったそうだ……」
「戦隊が？　拠点に侵入を許したのか⁉」
　いや、だが、あり得る。灰薔薇から奪還したばかりで、協会支部の防御はザルだった。マグナスほどの力量があれば、やすやすと侵入できる。
「〈下から二番目〉を生かしたくば、同行せよ……とのことだった。彼女なら、あの問題児を生かしたはずだ。私のこの腕をつないでくれたようにね……」
「……では、バカ弟子を案じる必要はないな。行ってくれ。ここは私が引き受ける」
「それは得策ではない。これは全員で対処すべき相手だ……」
「行くんだ、女史。今の貴女は足手まといだ」
　一番こたえるだろう言葉で突き放す。アンリとキンバリーを護ろうとすれば、どうしても隙が生じてしまう。雲雀が相手では命取りとなるような隙が。
「だが……せめて二人、ここに残す選択肢もあるぞ」
「貴女を運ぶには人手がいるだろう。それに」
　一行はこれからその花柳斎と合流し、協会支部に送り届けなければならないはず。足手まといは三人になるわけで、護衛の人数を減らすのは危険だった。
（敵がこいつだけとは限らんからな……！）
　雲雀の後ろにいる誰かが、動いているに決まっている。
　山鳩がドアの方へ一歩踏み出し、念を押すように訊いた。

「熟慮の末の結論だな、迷宮の魔王？」

「ああ。こいつの剣術は西洋のそれとは違う。イザナギのような古い魔術と同じ――いや、白兵戦に特化しているぶんだけ、普通の魔術師には対処しにくい」

文字通り『太刀打ち』できない。刀剣の扱いに長じた者でなければ。

「こいつとは何度もやっている。私も一対一の方がやりやすい」

「――わかった。武運を祈る」

「ふ、魔術師が祈るようになってはおしまいだな」

「では、信じるとしよう」

「感謝する――行ってくれ！」

山鳩がドアへ走る。させじと雲雀が振り返る――が、山鳩は囮で、残りの魔術師たちは壁際に走った。一人が魔術で壁を破り、二人がキンバリーとアンリを抱え、あいた穴から外へ出る。クルーエルも出遅れず、山鳩と並んで部屋を飛び出した。

雲雀が振り向きざま斬撃を飛ばし、申し訳程度にキンバリーを狙う。魔刃で延長された刃はしかし、すべり込んだスティグマが受け止めた。

離脱は成功。だが、油断はできない。外から吹き込む寒風が、脚を伝う冷や汗をさらに冷却する。その汗を、ふと、雲雀の眼光がとらえた。

視線に気付き、グリゼルダは余裕ぶって茶化した。

「……ふん。いやらしい目で、何を見ている？」

「そのヒラヒラの服、いい眺めだなあと思いまして」
「本当にいやらしいのか！　だが、まあそうだろう。その眼福を冥土の土産にしろ」
「今朝は男装してらしたのに、どういう心境の変化です？」
「貴様の知ったことか。いつもの服が汚れただけだ」
嘘ではない。嘘ではないが、自分でも言い訳がましいと思ったのはなぜだろう？　わずかな狼狽を見抜いたか、雲雀が意味深に笑う。グリゼルダはむっとして、
「何が可笑しい！」
「いやね、私の申し出を意識してくださったのなら、嬉しいなと」
「……腐れ外道め。私はそのことにも怒っているのだ。貴様の裏切りに」
『マスター』
握った剣から声がする。刀身の根元がくるりと回転し、ディガンマの顔がのぞいた。
『どうか心を許されませぬよう。この男は信用なりません。要はマスターの劣等感につけ込んでいるのです。婚期の遅れがどうのと』
「ばば馬鹿者！　戦闘中に何の話をしている！」
『私はその男に真っ二つにされました。思い出すだに腹立たしい』
吐き捨てるように言う。どうやらディガンマも、過去の勝負を根に持っている。
「……そうだな。負けたままでは気分が悪い。こいつはここで斬り捨てる！」
完全統制振動で間合いを詰め、そのまま攻撃につなげる。通常の手段では受け止められ

ない絶対の攻撃を、雲雀は半歩も退かず、逆に踏み込みながらかわした。

生じた真空で目元の皮膚が裂ける。しかしまばたきもせず、首を払いにくる。

何という思い切り。グリゼルダは冷や汗をかいて剣を引き、相手の武器を叩き折ろうとした。今度は雲雀がきわどく受けに回り、斜めに力を逃がし、刀身の破壊を免れる。

雲雀の刃が後方へ流れ、体勢が崩れる。相手は距離をあけにいく――とグリゼルダは読んだ。案の定、雲雀の重心が下がる。グリゼルダは即座に追った……が、それが雲雀の罠であり、燕のような鋭い切り返しがきた。

痛烈なカウンター。完全統制振動の発動が遅れ、受け止める手が痺れる。

敵は畳み掛けてくる。やむを得ずグリゼルダの方が間合いをリセット。完全統制振動で後方へ逃れ、密かに呼吸を整えながら、雲雀をにらみつけた。

(何て奴だ……！　この私が、剣の勝負で……！)

歯噛みする。剣で思い通りにできない相手など、過去には師しかいなかった。

雲雀は「やりますね」と笑った。余裕ぶった態度は勘に障ったが、向こうも楽はしていない。こめかみに光っているのは、まぎれもなく冷や汗だ。

あちらもグリゼルダを脅威に思っている。そのくせ、少しも怯まない。

以前にも感じたことだが、雲雀には怯みというものがない。ひとつ間違えば死ぬようなことを平気でやる。その思い切りが、実戦では強力な武器となる。

実戦では大胆に動ける者が生き、畏縮した者は殺される。技術も経験もその『大胆さ』

を引き出すためのものではないか、とさえグリゼルダは思う。
そして今、より大胆に動けているのはあちらだった。
精神的優位が欲しい。グリゼルダも笑みを浮かべ、見下ろすように言った。
「誉めてやるぞ、サムライ。魔王を相手に、きわどい勝負に持ち込むとは」
「ええ……確かにきわどくなってきましたね」
そう言った雲雀の視線は、グリゼルダの脚に向いていた。激しい攻防でスカートのすそが裂けている。グリゼルダは激昂し、破れた布を下に引っ張った。
「下衆め！　貴様は首より先に股間のものを切り落としてやる！」
「確かにきわどい勝負ですが、私の一手勝ちかと思いますよ」
「――ふん、実戦はチェスのようにはいかんぞ？」
「本当に……残念です。こうきわどいと、こちらも手加減ができませんので……」
くるりと手のひらで刀を回し、鞘に納める。
「もう、殺し合うしかなくなりました」
柄に右手をかけ、左半身を引く。
グリゼルダは虚を突かれた。武器を納めるなど、実戦的な行動には思えない。だが今、魔王の第六感が、かつてない危険を告げていた。
あるいはその戦慄が、グリゼルダを衝き動かした。
「愚か者め！　その体勢で、どうやって攻撃を受ける！」

スティグマに魔力を送る。スカート状の装甲が外れ、慣性を無視したジグザグの動きで雲雀を狙った。雲雀は一瞥もしない。手、足、顔面の肉が次々に裂ける。直撃したのかと思うほど、雲雀の回避は小さかった。攻撃に必要な腱だけつながっていればいい、という狂気じみた割り切りがなせる業だ。

雲雀の眼は牽制の短剣ではなく、本命の長剣に当てられている。

グリゼルダがディガンマを振りかぶり、もう雲雀に肉迫している。ただし、振り下ろすことはできない。相手の間合いに入った瞬間、何やら光が閃いた。

刀身が転移してきた――ように見えた。実際は引き手で鞘を払いつつ、利き手で抜き打ちに斬ったわけだが、それはグリゼルダが知る、いかなる斬法よりも速かった。

斬撃は視えなかった。しかし、紙一重でかわせている。

完全統制振動で己の構成原子を制御し、斜め上方にベクトルを変えている。繰り出される前に相手の技の性質を読み、知覚する前に回避したのだ。

雲雀の視線はグリゼルダに追従する。その超人的な動体視力が仇となる。グリゼルダは空中で魔力を放ち、雲雀の足もと、床すれすれのディガンマを制御した。

回避と同時にディガンマを手放している。雲雀の視線は上に誘導され、下は完全に死角。ディガンマは音速を超えて回転し、雲雀の足首を切り飛ばした。切断された雲雀の体が宙を舞い――いや、これは違う！

足を切り飛ばされたのではなく、雲雀が自ら跳躍したのだ。体を巻き込むように回り、

見事にディガンマをやり過ごしつつ、己の剣に遠心力を加え、振り下ろす。

見開かれた雲雀の双眸から、壮絶な剣気がほとばしる。この瞬間、死の予感は飽和した。

グリゼルダほどの剣達者が金縛りに遭ったように感じ、時間の流れが遅くなる。

刀身は殺傷圏内にグリゼルダの胴をとらえている。既に逃れる手段がないことを、剣に長じたグリゼルダは直感した。

「…………っ！」

空間が圧縮され、建材がひしゃげる。巨人が引き裂いたように天井が崩落し、壁という壁に竜の爪あとのような裂け目が走り、衝撃波が暴れ回った。

破壊力の乱気流。その壮絶な嵐の中、グリゼルダは己の下半身の断面が、眼前を横切っていくのを見た。

3

（さあて、いよいよ最終幕――いや、それとも新時代の序幕かな？）

いずれにせよ、胸が躍る。

眼下で繰り広げられる大騒ぎを、エドマンドは愉快な気分で眺めた。

闘技場には瘴気が充満し、雲が降りた高山のように見通しが悪い。瘴気にまかれた者は戸惑い、あるいは恐怖し、そして腹を立てているように見えた。

足もとから伝わる揺れは、洋上で感じるそれに似ている。この闘技場は今、瘴気の雲海にたゆたう方舟。大量の瘴気に支えられ、機巧都市の上空に浮いている。

（高度はざっと一キロか。つくづく恐ろしい婆さんだ）

客席でラザフォードと向き合う、小柄な老女を見る。綺羅の力は、素直に賞賛に値する。金薔薇が彼女を脅威に思い、消そうとしたのもわかる気がした。

エドマンドは己のペンダントに手を添える。オブシダンの冷たさに安堵を覚え、高揚はおさまり、底冷えのする冷徹さが思考の根を支配した。

満を持して、といった気分で立ち上がる。

「さて、お集まりの紳士淑女、学生諸君、そして魔術師たち。我、エドマンド三世が語る言葉に、しばしお付き合い願いたい」

「それはできぬ相談ですな」

畏れ多くも王の言葉を遮って、ラザフォードが虚空に魔法円を描いた。

「結社に与する王の言葉など、傾聴に値せぬ！」

黄金の光芒が散り、魔書レメゲトンがせり出してくる。ひとりでにページが開き、神々しいほどの輝きとともに、書から天へと長い階段が生じた。

階段の頂上には金銀財宝で飾られた玉座があり、きらびやかな自動人形が座していた。薄絹の衣装はなまめかしく、黄金色の髪と瞳が美しい。

濃密な瘴気の中でも、その輝きは隠せない。人形の美貌を見て、エドマンドも、綺羅も、

シャル、ロキ、オルガさえもが唖然（あぜん）となった。
（あの顔は――いや、だが、年齢（とし）が違って見えるな……？）
人形は愉快そうに闘技場を見下ろし、威厳（いげん）たっぷりに言った。
『人前でわらわを呼び出すか。よほどのことじゃぞ、エド？』
「よほどのことでございます、女王イシュタル」
神話になぞらえたその呼び名――噂（うわさ）の名器、伝説級（レジェンズ）アスタロトか。
アスタロトはエドマンドを、次いで綺羅を見て、すうっと目を細めた。
『ほう、その方ら……』
互いに既知の者と対峙（たいじ）したような空気が流れる。人形はにやりとして、
『下がりおれ、下郎ども。エド、第一の軍勢をここに』
「御意」
ラザフォードが魔力を渡す。直後、女王の手のひらから黒い塊（かたまり）が撃ち出された。
無数の人面が葡萄（ぶどう）のように連なり、苦悶（くもん）のうめきをあげている。腐毒の砲弾がこちらに向かって殺到し、客席の床をチョコレートのように融解させた。
パーシヴァルが大量のフラスコを召喚し、杖（つえ）で叩（たた）き割る。内部の霊薬（エリクサー）が雨のように降りそそぎ、大量の蒸気とともに、溶けた床を凝固させた。
「やりすぎだ、ラザフォード！　皆、舞台まで下がれ！」
ほどなく、ラザフォードの攻撃は止まった。――パーシヴァルの叱責に応えたのではな

く、ただの一発もこちらを傷つけていないと気付いたのだろう。エドマンドの前では金髪の乙女型自動人形が両手を広げ、大量の腐毒を空中にとどめている。

朧富士〈七號〉。戦闘中に特有の、冷酷な表情でエドマンドを振り向く。

「連中に浴びせますか?」

「いや、闘技場の外に捨てろ。汚いからな」

「仰せのままに!」

命令されて嬉しかったのか、朧富士はぱあっと顔を輝かせ、王の言葉に従った。

腐毒は闘技場の外にぶちまけられ、おそらくは一キロ下で大地を溶かす。残念ながら、周辺の瘴気が濃すぎるため、その状況は確認できない。

落ちて行く腐毒を見送って、エドマンドはラザフォードに笑いかけた。

「あの量は大空洞に達するかもな。下に不幸な犠牲者がいないことを祈るばかりだ」

「……本心とは思えませんな」

「私は慈悲深い王だよ。さて学院長、その自動人形、余興としては面白かった」

かのレメゲトン、かのアスタロト、かのラザフォードを余興呼ばわりする。学生たちや観客に動揺が広がるのを心地よく思いながら、エドマンドは続けた。

「まず断っておくが、今の無礼はとがめない。私は対話のためにここにきた」

「……雪月花を差し出せというのは、陛下のご意向でしたか」

「然り。私と日本軍は同じものだ」

聴衆がざわめく。ラザフォードでさえ、呆気に取られているように見えた。
エドマンドは大胆にもラザフォードに背を向け、溶けてゆがんだ階段を上がった。
そうして焦らすような間を取りながら、よく通る声で言う。
「学院長、先ほど貴方は『私が何を考えているのか』をおたずねになった。今また、その問いにお応えしよう。私が望むもの、それは――」
最上段で振り返る。瘴気越しの朧な月光が、王の影をラザフォードに落とした。

「帝、王、だ」

赤子に聞かせるように、音節を区切って言う。
案の定、聴衆には伝わらない。だが、ラザフォードにだけは意図が伝わった。
「そう、か……日英の同盟は、そのための……！」
絶句する。この男にこんな阿呆面をさせるのは、自分が最初で最後だろう――そう思うと再び愉悦がこみ上げてくる。エドマンドは興が乗り、両手を広げて叫んだ。
「諸君、いよいよ時は満ちんとしている！」
情熱的に、激しく、聴衆を煽り立てるように言う。
「時代は二〇世紀――この百年で機巧文明はその極みに達し、強者と弱者の格差は絶対的となるだろう。列強はこぞって植民地を求め、搾取にて富を蓄え続ける。その行き着く先

は何だ？　そう、世界大戦だ！　この欧州が戦火に包まれる日も遠くはない」

学生たちが顔を見合わせる。さんざん実戦を経験してなお、西欧が戦火に巻き込まれるとは思っていない。東欧か植民地での小競り合い程度だろうと思っている。

「信じようが信じまいが、すぐにも列強同士の争いが始まる。そして否応なく勝者と敗者にわかたれる。この戦争の世紀を、私は大英帝国の勝利で終わらせたい」

それから綺羅を示し、讃えるように言った。

「こちらの貴婦人を見るがいい。彼女こそ我が盟友、日本王家の血を引くミセス・ドモン。この方が近く、私のグランドマザーとなる」

ざわめきが広がる。エドマンドは声を高くして宣言した。

「我がディランド朝とドモン家は縁戚となる。日英は名実ともにひとつとなる。諸君、この意味がわかるだろうね？」

聴衆をうかがう。まだ反応は鈍い。エドマンドは苦笑しつつ、答えを言った。

「言い方を変えようか。日英二つの帝国がユーラシア大陸の両端から進撃を始め、その真ん中で落ち合えたなら、実にロマンチックだと思わないか？」

ようやく学生たちにも意味がわかってきたらしい。ぱかぱかと口が開いていく。

「そうとも！　我が築くは世界帝国！　俺が獲るのは、この星の玉座だ！」

天をつかむように、こぶしを握る。聴衆はもう完全に言葉を失っていた。

ただひとり、その沈黙に抗ったのは、やはりラザフォードだった。

「馬鹿げている」

「そうかな？　貴方は〈碁〉というボードゲームを知らないのかい？」

「……詳しくはありませんな」

「要は〈陣取りゲーム〉なんだが、せせこましくやっているだけでは勝てない。どれだけ馬鹿げた構想を盤上に描けるか、それを実現する知恵を持つかが問われる」

「ご自身の考えが『馬鹿げた構想』だという自覚はおありなのですな」

「言うほど荒唐無稽でもないさ。おあつらえ向きの布石を盤の中央に置いてある」

「インド――」

聴衆があっとなる。日、英、印の三帝国すべてをエドマンドが掌握する……！

聴衆を牽制するように、ラザフォードは挑発的に言った。

「陛下が〈碁〉の名手気取りでいらっしゃるのはわかりました。それで、かくも偉大なご計画を我らに打ち明け、どうされるおつもりなのです？　誇大妄想を語って聞かせただけ、というわけでもありますまい？」

「我が望みはひとつ。老いも若きも、魔術師もそうでない者も、人間も人形も――」

エドマンドは息を吸い、溜め、気力を叩きつけるように言った。

「ここにいる者すべて、俺のものになれ！」

その言葉はいんいんと、機巧都市の天に響き渡った。

「学院の魔術師は実力を、学生は才気を持つ。どいつもこいつも殺すには惜しい逸材ばか

りだ。記者や軍人、あるいはただの観覧客もいるな？　昼間の大惨事を忘れたその無謀、職務のためであれ、個人の意志であれ、どのみち常軌を逸している。俺はそういう馬鹿が大好きなんだ。おまえたちとなら新たな世界を創れる。だから連れて行きたい。俺が築く新世界に、おまえたちを！」

「ほう……面白い奴じゃの」

　ラザフォードのかたわらに降り立ち、自動人形アスタロトが言った。

「エドよ。あの小僧のものとなるのも、妾は楽しげと思うが」

「……貴女は享楽的すぎます。性向は理解しておりますが」

「おや、学院長。貴方は賛同してくれないのかい？」

　問いかける。ラザフォードは皮肉っぽく口ひげの端を上げた。

「おっしゃる意味がわかりかねますな」

「言うまでもないが、市街には三個師団三万六千の兵が展開し、復旧作業に当たっている。継母上がやらかしたような愚行を俺にもさせるつもりか？」

「愚行とお考えなら、なさらなければよい。学府を攻め落とすなど滑稽です。まして、返り討ちに遭われるなど」

　エドマンドは苦笑した。

「強気だな。ま、やり合ってそちらが勝つ可能性はある。このキラ殿をも、あるいは退けるかもしれない。だが、それは決定的に、絶対的に、愚かな選択なんだ」

「なぜです？」
「俺が正しいからさ」
ラザフォードはあきれ顔になったが、アスタロトはますます興味深そうにした。
朧富士が感極まったようにわめき、聴衆にも狂王の言葉が届き始める。
一見は愚者そのもののこの王が、ひょっとしたらこの国に利をもたらすのではないかと、そんなふうに考え始めている。
「さあ、諸君らの返事を聞こう。忠誠の証を俺に示せ！」
聴衆の不穏な視線が雪月花に集まり、三姉妹が背中合わせに身を寄せ合った。いろりの眼が鋭くなり、足もとに冷気の霧が立つ。
（さあ、どう出る？）
エドマンドは手近な座席に腰を下ろし、ラザフォードを観察した。
ラザフォードは瞑目している。おそらく、数多の可能性を吟味しているのだろう。
この闘技場は天に浮いている。つまり、綺羅には落とすことができる。
教授は平気でも、学生と市民は別だ。学生と市民約千人を落下の衝撃から守る、もしくは安全圏に逃がす手段がない限り、雪月花を差し出すしかない。
果たして、人質を逃がす術はあるのか。軍の攻撃を防ぐ手立てはあるのか。夜会はどう決着するべきか——させるべきか。この局面は投了図なのか、そうでないのか。
エドマンドの勝勢に見えるが、敵もまだ〈切り札〉を隠しているだろう。

ラザフォードがエドマンドを読みきれないのと同じように、こちらも彼を読み切ることができない。そのことを、エドマンドは面白いと感じた。
やがて、気の遠くなるような長考ののち、ラザフォードの双眸が開かれた。
「いつの世も、未来は若人が切り拓くもの」
魔力の炎が青く燃え、瘴気の闇をなぎ払う。
「陛下がその器かどうか――実技試験とまいりましょう」

4

リヴァプール旧礼拝堂――灰薔薇シスマが占拠した、魔術師協会の支部にて。
昨夜の突入作戦で前庭には大穴があき、外壁は一部が崩れている。その破れた壁から、内部にひしめく無数の人影が見えた。
リヴァイアサンの被害に遭った避難民……ではない。市民は軍のキャンプに移っていて、現在ここにいるのは黒コートの魔術師のみだ。香を焚き、蝋燭を灯し、床に魔法円を描いている。いずれも細心の注意を払い、肌が切れそうな緊張感を漂わせていた。
その中心に、場違いなほど穏やかに微笑む少年がいる。白地に金糸をあしらった最上級の法衣をまとい、手には身の丈を超える十字架形の宝杖を持ち、頭には大きな法冠をのせている。見たところはいとけない、この少年こそ、

「教父、物見の鳥より報告です。学院で戦端が開かれました」
　魔術師の一人が恭しく言う。少年は微笑んだまま、厳かに応えた。
「ご苦労さまです、鴉の。紫薔薇が動いたのですね？」
「はい。狂王エドマンドとともに行動しています」
「やはり、手を結んでいましたか……」
「そのようです。また、日本の魔術師たちが不審な動きを見せています。物見の見立てでは、大規模結界の構築であろうと。魔術式は現在、解析中です」
　鴉が畏まる。教父のあどけない顔に、ふっと凄絶な笑みが浮かんだ。
「なるほど……さすが、〈狂犬〉と言われた王です」
「は？　と、おっしゃいますと？」
「私もラザフォードも『夜会を制さずに神性機巧は得られない』と考えていました。ですが、エドマンド王はそうではなかったということです。若者の発想は自由ですね」
　鴉はわからないという顔をした。教父は説明せず、自嘲を浮かべる。
「指されて見れば、実に見事な一手です。薔薇たちの〈賭け〉を提唱した者が夜会の決着を待たぬとは。今さらの応手では既に出遅れ……これは困りましたね」
　無邪気に笑い出す。そのとき、屋外の歩哨から報告が入った。
「ファザー！　ミス・カリューサイが戻られました！」
　言葉通り、数人の魔術師たちに護られ、硝子が礼拝堂に姿を見せる。続いてキンバリー

が担ぎ込まれ、アンリが護送されてきた。

硝子は警護を振り切り、こちらに近付いてくる。切れ長の目が怒っていて、かなりの迫力だ。警戒する魔術師たちを手で制し、教父はにこやかに迎えた。

「ご無事で何よりでした。こちらへどうぞ。火桶(ひおけ)があります」

「結構よ。自分だけあたたまる気にはなれないわ」

痛烈な皮肉。いきなり喧嘩腰(けんかごし)だ。教父はそれでも笑みを崩さず、

「では、こちらでうかがいましょう。お話がおありなのでしょう?」

「——ここにくる途中、街の様子を見たわ。あれだけの怪物が暴れたっていうのに、よくもこの程度の被害で済んだもの。避難民は一〇万人にのぼると聞いたけれど」

「私もそのように報告を受けています。それが何か?」

「それだけの人間がいきなり動いて、どうして死人が出ていないの?」

確かに、パニックが起きてもおかしくはない。いや、むしろ起きるべきだった。しかし、魔術師協会(ネクタル)の誘導で、そうした事態は起こらなかった。

「そう、貴方(あなた)がたの迅速かつ周到(しゅうとう)な手際のおかげ。そこはお礼を言うべきなのでしょう。だけど、私はこうも思ったの——貴方がたが初めから本気を出していれば、危機そのものを回避できたんじゃないかしら、って!」

とがった声が礼拝堂に響く。硝子は声を低くして、つぶやいた。

「協会が予見の力を駆使すれば、死なずに済む者は大勢いるわ。なのに、貴方がたはいつ

も――わざと手遅れにしてきた。そんな気がしてならない」

「買いかぶりです。予見の力は決して万能ではありません」

「嘘よ！　本当は何だってお見通しなんでしょう！」

叩きつけるように言う。こちらが反応しないのを見て、硝子は肩をすくめた。

「……徹底してだんまりなのね。でもこれだけは答えて頂戴。なぜ協会はいつも手をこまねいているのか。そして、世界はこれからどうなってしまうのか」

気がつくと、魔術師たちが作業の手を止め、二人のやり取りに注目していた。

硝子がぶつけているのは、同胞たちの胸にわだかまっている疑問でもある。硝子の疑問に応えなければ、同胞たちの信頼も得られそうにない。

教父は小さく嘆息し、質問を返した。

「花柳斎さん。貴女は〈正義〉というものを、その目で見たことがありますか？」

いきなりの問いかけに、硝子は戸惑ったようだ。教父は勝手に続ける。

「私はありません。歴史上もっとも高潔な決断すら、逆の見方があるはずです。一方で、バチカンは幾度も過ちを犯しています。異教徒、新教徒、魔女とされた者――皆、正義の名のもとに殺されました。そもそも、この世に完全な悪人がいたとして、それを誅するのは正義でしょうか？　我らの父なる主は、悪人もまた救われるべきと仰せです。贖いは為しうると。そして我らは皆、等しく原罪の咎を負う身――」

「お説教は別の機会にお願いするわ！　それが何だとおっしゃるの!?」

「もし私に完全な予見の力があったとして」
教父はあくまで穏やかに、しかし冷厳な眼差しを向け、硝子に問うた。
「その力で誰かを利することは、正義ですか？」
「――そんなの程度問題でしょう。災害から人々を救うことの何がいけないの？」
「知恵の実を食べた人類は、万物から学ぶ存在となりました。未曾有の大災害ともなれば、人類が学ぶことは膨大です。学びの機会を子から奪うことが、親の正義ですか？」
「……今世紀最大にあきれたわ。まるっきり神さまの言い草じゃない！」
硝子ははっきり苛立ち、荒々しく髪をかき上げた。
「人が死ぬのよ!? 子どもが、親が、愛する人が、自分自身が死ぬのよ!? 死にゆく人を見殺しにして、そこから学べだなんて……人間の言うことじゃないわ！」
「見殺しにはしません。我らは苦しむ人々に援助の手を差し伸べます」
「さけることができた苦しみよ！ 世界大戦が起これば、何百万人が犠牲になる！」
「その何百万の尊い犠牲が」
教父はやはり優しく、かつ厳しく、深淵に突き落とすように言った。
「後世、何百億という人々に、永き平和の時代をもたらすかも知れぬのです」
硝子はもう反論しなかった。議論が噛み合っていないと気付いたらしい。
硝子が非難した通り、教父の視座は神のそれだ。人類を千年、二千年の長さで俯瞰する。
一方、硝子の視座はあくまで現代を生きる個人のもの。

露骨な失望を見せる硝子に、しかし教父は微笑みかける。

「どうやら私は、貴女という人を誤解していたようです。貴女はとてもお優しい方だったのですね。まるで、かの少年の言葉を聞いているようでした」

さっと硝子の頬に赤みが差した。

「……ごめんなさい。私にこんなことを言う資格はなかったわね」

「恥じることはありません。貴女が守り立てた少年も、貴女が造った乙女たちも、とてもまっすぐで――むしろ私が羞恥の念を抱きました」

硝子がはっとする。教父の口ぶりに変化のニュアンスを感じ取ったようだ。

「介入するとおっしゃるの？　学院で起きていることに？」

「はい。今から予見の儀式を行います。それが神性機巧誕生前の、最終予見ということになるでしょう。おそらくは夜明けを待たず、神性機巧が誕生しますから」

一瞬、礼拝堂から音が消えた。

「……何ですって？　明日の夜ではなかったの？」

「零時を過ぎれば、この夜はやはり明日の夜です。あまり考えたくはないのですが、天の玉座に相応しい者が神性機巧を得るとすれば、やはり今宵のようでして」

「……それは誰？　ラザフォード氏？　それとも、黒薔薇さまかしら？」

「エドマンド王です」

礼拝堂の空気が凍る。硝子の瞳にもはっきり動揺が走った。

「それは……予見……なの？」

「まだ推測です。が、予見の儀式で肯定される可能性が高いと考えます。ご存知かと思いますが、私が予見してしまったことは決して覆りません。私が儀式を行うことは、リスクのある行動だと、どうかご理解ください」

「……王さまの好きにはさせないわ。神性機巧を手に入れるのは私たちよ」

「そうなることを願っています」

そっけなく聞こえただろうか。硝子の顔色が目に見えて悪くなった。

「……嫌な言い方をされるのね。預言者にはそんな嫌みの言い方もあるのね」

「悪く受け取らないでください。その真偽を確かめるため、儀式が必要なのです」

「予見の子は坊やよ。私は信じる！」

「信じるというのは、この世でもっとも尊い感情だと思います」

これも嫌みに聞こえたかもしれない。教父は硝子から視線を外し、同胞たちを見た。

「いかなる予見を得ようとも、我らは人類の未来を信じ、歩き続けるといたしましょう」

魔術師たちがうなずく。かくして、最終予見の儀が始まった――

5

ロキは努めて冷静に、置かれた状況を見極めようとした。

（最後は日本軍か……つくづく、あのバカは呪われている）
苦笑が漏れる。次から次へとトラブルを呼び込み、最後の最後で身内に狙われるとは。
だが、『利用される者』の末路はこんなものだと、ロキは体感として知っていた。
「ジブリール。動けるか？」
『Yes, master. I'm ready』
肯定はしたものの、うなずくだけでフレームが軋む。形態変化はできそうもない。
ロキは姉の手を引き寄せ、釘を刺すように言った。
「姉貴、犬どもを近くに寄せろ。あんたもオレから離れるな」
「う……何が起こってるの？」
「オレが知るか。大方――」
「要するに、何もかも黒衣帝の差し金だったってことでしょ？」
シャルが軽口のように言った。美しい顔が怒気で紅潮している。
「ニホンの軍はライシンを捕まえた。ここで王さまが雪月花を手にすれば、あいつはもう何もできない。いくらライシンが欲しいからって、王さまったら強引すぎるわ。そういうの嫌いじゃないけど！」
「……微妙に引っかかる言い方だが、とにかくどうする？　妨害するか？」
「いい考えね。そもそもあっちが私たちを逃がしたくないみたいだし」
「逸るな、シャル」

帽子の上のシグムントが慎重な声で言った。
「あの老女はおそらく薔薇だ。疲労困憊の君たちに対処できる相手ではない」
鼻先で綺羅を示す。この闘技場を天空に引き上げた張本人だ。
瘴気で魔力の伝導率が下がり、知覚力は落ちている。それでも、綺羅の魔性は理解できる。感じる脅威はラザフォードに匹敵している。
シャルにもわかっているはずだが、あくまで強がり、不敵に言った。
「薔薇の魔女が何よ。私とロキで金薔薇を撃退したこともあったわよ」
「状況が違う。今は時を稼ぎ、エドガーが駆けつけるのを待つべきだ」
至極もっともなことを言う。だが、ロキの思考は——おそらくシャルも——別の考えに支配されつつあった。金薔薇のときとは『状況が違』い、大勢の味方がいる。対するあちらはエドマンドと綺羅、数人の近衛のみ。見えている自動人形も一体だけ。
(その上、こっちにはあいつらもいる)
身を寄せ合うようにして立つ、雪月花の三姉妹を見る。彼女たちを武器として使えば、敵を返り討ちにできるのでは？
そんな計算を働かせているとき、ラザフォードが言った。
「陛下がその器かどうか——実技試験とまいりましょう」
魔力の炎が間欠泉のように噴き上がる。ラザフォードはアスタロトに再攻撃を命じつつ、魔書の頁をめくり、新たな機械人形を召喚した。

「サブナック侯。下僕のために高い塔を築いていただきたい」

『易きこと』

むきだしの歯車が一斉に回転を始め、蒸気を噴く。魔術回路が起動し、闘技場の底面が鍾乳石のように発達していくのがわかった。

(物質を生成している……四大元素系〈土〉属性の魔術か!)

なるほど、ここから地表までを石の足場で支え、落下を食い止めるつもりらしい。

「オレたちも行くぞ! 学院長を援護する!」

「待て!」

前のめりになる学生たちを、パーシヴァルの鋭い声が制止した。

一拍遅れて、理解する。ラザフォードの魔術は、早くも効力を失っていた。人形が異音を立て、苦しげに震えている。

どうやら妨害を受けているらしい。ラザフォードは憮然として綺羅を見やった。

「……貴女の仕業ですかな?」

瘴気の渦の中心で、綺羅がにやにや笑っていた。ラザフォードから放たれた魔力が吸い寄せられ、瘴気に変換されている。魔力奪取の一種と思われた。

「お会いするのは初めてですな、ミセス・ドモン」

ラザフォードが綺羅をにらむ。対する綺羅は、一転して愛想を振りまいた。

「嫌やわぁ、ご挨拶が遅れてしもて。お初にお目にかかります、日輪の祖母、綺羅でござ

います。まあまあ、不出来な孫がご迷惑ばかりおかけしてなぁ」

「お孫さんは才女でいらっしゃいますよ。今日はお姿が見えませんが」

「へえ、あれはつとめがありますよって」

「……では我らも地上に降り、三者面談といきましょう」

「お断りや」

綺羅はケタケタと笑いながら、侮蔑的に言い捨てた。

「せいぜい吠え面おかきやす――急々如律令、黄泉風、きたりま征」

印を結ぶ。綺羅を取り巻く瘴気がラザフォードに殺到した。

まともに食らうラザフォードではない。魔防の壁を展開し、瘴気を阻む。

（――いや！　抜かれる！）

ロキは瞠目した。大魔術師の魔術防御が、砂糖のように溶かされる！

史学部教授サンジェルマンが前に出て、念動で十数本のチョークを飛ばす。チョークは整然と床を走り、一瞬で魔法円を描いた。式を読み取り、シャルが歓声をあげる。

「聖域のルーンだわ！　さすが、サンジェルマン先生――」

「離脱しろ、サンジェルマン！」

警告は遅い。ルーンは端から崩され、瘴気がサンジェルマンを包み込んだ。火だるまになった人間のように、サンジェルマンが激しくもがく。

サンジェルマンに瘴気がまとわりつき、分厚い筋肉となる。既に教授の体躯は倍ほどに

も膨れ、怪物へと変貌していた。牙が発達し、雄牛のような角がある。
　その姿は、まさしく伝説の〈食人鬼〉。
「惜しぃ、惜しぃ！　さすがは学院長さん、ええ勘してはりますなぁ。ま、この先生かて十分強ぉ鬼になるやろ。童子、遊んでやり」
　サンジェルマンだった者が、獣のような咆哮をあげた。大気がびりびりと震え、殺気とも魔力ともつかないものが押し寄せる。
「皆さま、お下がりください！　この鬼、尋常ではございませぬ！」
　いろりが氷の防壁を築く。だが、そんなものは気休めにもならない。分厚い氷壁は怪物の体当たりで崩れ、太い腕がいろりの首筋に伸びてきた。
　間一髪、夜々の蹴りが怪物の腕を弾く。大して軌道を変えられず、いろりの肩口がざっくり裂けた。たまらず膝をつくいろりに、背後から鬼の巨体が迫る。
「シグムント！　ラスターカノン！」
　滅元素の奔流が怪物を焼いた。が、あくまでも表面だけだ。一瞬見えたサンジェルマンの体を、再び瘴気が覆い隠してしまう。
「ちょっとー！　少しは堪えなさいよ！」
　シャルが八つ当たりのように叫ぶ。力を使い切ったらしく、へたり込む。教授が二人、シャルを救出しようとして――
「いかん！　ケインズ！　ジョンソン！」

ラザフォードの警告はやはり、わずかに遅かった。サンジェルマンを怪物に変えた瘴気の霧が、二人の教授を一度にのみ込む。

悪い予感は外れない。怪物が三体（！）に増え、ジブリールに向かってきた。

さしものロキも戦慄した。これは、やられる……！

そのとき、真横から閃光が走り、二体の怪物をなぎ倒した。

閃光に見えたのは鉄拳だ。甲冑をまとったヴェイロンが、ロキを護ってくれた。

ヴェイロンの手甲が砕け、素肌が露出する。たった一撃で、自動人形（オートマトン）スレイプニルも、ヴェイロン自身も、限界を迎えてしまった。連日の酷使の影響だろう。

よろめくヴェイロンを、オルガが滑り込んできて支える。同時に不自然な気流が生じ、瘴気の霧を吹き散らした。

「剣帝、瘴気は風の影響を強く受ける。それは大きな利点だが、欠点でもあるぞ」

「――了解した。ジブリール、〈風の剣舞（シルエイティ）〉だ！」

魔術回路を切り替え、オルガの精霊術（ジン・マスタリー）と協力し、瘴気を押し返す。

「雪月花！　今のうちに舞台まで下がれ！」

「ありがとうございます！」

夜々がいろりを担ぎ上げ、小紫と並んで跳ぶ。ロキとシャルもそれに続き、転がるように舞台まで退く。迫りくる怪物三体は、舞台と客席の境界で、風と結界に阻まれた。

普段は攻撃魔術から観客を護る仕組みが、今は舞台側を護る防壁となっている。

シャルが大きな息をつく。ロキもあごをしたたる冷や汗を拭った。
(何なんだ、あの怪物は……! あの魔術、どうやっている……!?)
解せない。あまりに強すぎる。怪物の性能は銀薔薇の〈タンク〉を上回っている。
犠牲となった教授は超一流、その精神を支配するのは至難の業だ。なのに、綺羅は三人も支配している。それも、闘技場を天空に浮かし、他人の魔力を奪いながら。
無限連鎖反応の霊薬を用いたとしても、人体には魔力許容量の限界がある。こんな力を一度に行使できる人間はいない——はずだ。これは理屈に合っていない。
(何かトリックがある……どこだ? どこにタネがある……?)
わからない。教授たちにもわからないようだ。二百年の伝統を誇る王立機巧学院の教授と学生が総力を結集してなお、たった一人の魔女が倒せない。
「……笑える状況だな。魔王の手前まできたオレが、手も足も出ないとは」
ロキは自嘲した。オルガもまた、麗しい顔に苦い笑みを浮かべた。
「それを言うなら、私は〈十三人〉の第三位だよ」
「僕は第二位だ。だけど、君たちよりほど役に立たない」
アスラが手錠を示して愚痴る。彼は魔力を封じられているので、本当に無力だ。
ガンガンと硬質の音が響く。いつしか怪物は八体に増え、結界を激しく殴っていた。
「……突破は時間の問題だな。あちらには闘技場を落とす手も残っている」
「雪月花を地上に逃がしましょう!」

シャルが叫んだ。ふらつく足で立ち上がり、気丈に主張する。
「ラスターカノンで瘴気を払うわ。夜々の脚なら、ぴょんと跳んで降りられる！」
「だが、あの黒い霧に触れれば、今度はあいつらが怪物にされるかもしれない」
「だから護るのよ！　私たちで！」
「無謀な行為だ。許可はできぬよ」
重々しい声が制止する。声の主は、ほかでもない、ラザフォードだった。
「護ると言っても手段がない。雪月花を結界の外に出すには、この魔防のシェルターを開かねばならぬ。開いた途端、ほかの者が瘴気にまかれ、怪物に変えられる」
「妾も同じ意見じゃがのう、エドよ」
アスタロトは妖艶な笑みを浮かべ、試すようにラザフォードを見た。
「では、いかにする？　若者の策をつぶした手前、指導する責任があろう？」
「――この問いの答えは、簡単です」
ぱたむ、と魔書レメゲトンをたたむ。「あっ」と非難がましい声をあげ、きらびやかな自動人形が消え失せた。
教授陣も、学生たちも、綺羅も、エドマンドも、唖然としてラザフォードを見た。
不意に生じた静寂の中、ラザフォードはエドマンドを見上げ、こう言った。
「こちらの敗けです。このエドワード・ラザフォード、陛下の御許に降りましょう」
教授陣が絶句する。ラザフォードは真顔のまま、「その代わり」と続けた。

「学生を解放していただきたい。学生の安全を保障してくださるならば、引き換えにこの魔書〈レメゲトン〉を献上いたします」

分厚い魔書を示す。なるほど、油断を誘う腹か――と思ったが。

パーシヴァル以下、教授陣の硬すぎる表情が、芝居ではないと告げていた。

ラザフォード自身、煮え湯を飲まされたような表情だ。

(本気……だと……!?)

ロキは即座に頭を切り替える。だとすればこの状況、既に〈詰んで〉いる?

確かに、教授の自我を奪い、ラザフォードの魔性を抑え込むような敵に、千人もの人質を取られた状況では厳しい。しかもその人質は、敵の手駒ともなり得るのだ。

事実上の降伏宣言を、エドマンドは一笑に付した。

「駄目だな。俺はここにいる全員が欲しいんだ。手放す気はない」

「……伏してお頼み申し上げます。どうか、学生だけは」

膝をつき、こうべを垂れる。王に対する儀礼ではあるが、誉れ高き大魔術師が、狂犬と蔑まれる戯けの王に行うのは、ひどく現実離れした光景に思えた。

エドマンド自身もそう感じたらしく、漆黒の眼を丸くした。

「おいおい……俺はあんたを買っていたんだぜ? 目的のためなら手段を選ばない、その実行力をな。なのに、この状況はどうだ? あんたは大事な魔書を手放してまで、学生を逃がしてくれと言う。俺を惑わす策かな、これは?」

「策……ですか。なるほどのご明察です。しかし」
ラザフォードは口ひげをゆがめ、苦渋混じりの笑みを見せた。
「今の私に、ここにいる者を無傷で逃がす手段は、ありますまい？」
「だろうな」
「ならば、これが私に取りうる、最善の策でありましょう。この私も、神性機巧(マシンドール)も、好きにされるがよい。ですが、学生は、彼らの故郷にお返しください」
「あくまで学生にこだわるか。そんなに学生が大事かい？」
「陛下がおっしゃったことではありませんか。ここにいる者たちは、誰(だれ)も彼も、殺すには惜しい逸材ばかりです」
目を細め、瘴気(しょうき)の濃霧の向こう、遠く天空に視線を投げる。
「何の因果か、彼らはこの激動の世紀に生を受けました。才ある者の常として、銃後(じゅうご)にはいられません。おそらくは世界大戦にて、多くが命を落とす――なればこそ」
いかつい顔に好々爺(こうこうや)然とした笑みを刻み、ラザフォードは言った。
「一人たりとも、犬死にはさせぬ」
大きく目を見開き、気迫をみなぎらせる。
「貴方(あなた)の道具に、させはせぬ！」
熱気に圧(お)され、ロキはよろめいた。意外な発言に動揺している自覚がある。
ひょっとしてオレは――いや、オレたちは。

エドワード・ラザフォードという男を、見誤っていたのではないか？

非情で、非道な、はずだった。彼の野心の犠牲となり、消された学生もいる――と聞いた。その謀略にアリスが関わったとも聞いた。

だが、実際にこの眼で見たか？　ラザフォードが子供を殺す場面を？

アリスが本当はどんな少女か、仲間たちはもう知っている。冷酷な悪党ぶっても、もう誰も彼女をそうとは思わない。

エドワード・ラザフォードという男は、本当は野心だけではなく――

決して空言ではない、教育者の矜持を、持つ者なのではないか？

時が止まったような静寂の中、エドマンドの声が響いた。

「答えは〈否〉だ」

ふっ、と亀裂のような笑みを刻む。

「俺は強欲な王でね。そちらから脱出手段がないと教えてくれた今、獲物を見逃す理由がない。すべて俺のものにする。俺と、キラ殿のものにな」

無慈悲に告げる。ラザフォードが歯噛みするのがわかった。ところが――

「ラザフォードよ。離脱の術なら、あるだろう」

知性的な声が朗々と響く。声を発したのは、パーシヴァルだった。

「瘴気の魔術抵抗を打ち破り、奪取が追いつかぬほどの魔力があればよい」

「――現実的ではない。この大所帯で、瘴気の大海を突っ切る魔力など」

「現実的だとも。敵と同じ手を使えばよい」

「待て……」

「待たぬよ。マグナスは呼びかけに応じぬのだろう？」

ラザフォードは沈黙した。パーシヴァルはかすかに笑い、同僚たち、教え子たち、そしてラザフォードの顔を順に眺め、満足げにうなずいた。

「皆、中央に寄りなさい。教授陣は私の合図で魔防を解除してくれ」

杖を投げ捨て、右手で左手の指を握る。そしてそのまま、むしり取った。

ちぎった指が消滅し、閃光とともに魔力が膨れ上がる。

初めて見る現象だったが、ロキはその仕組みを知っていた。

禁書『臓器について』に書かれていた原理だ。ロキの心臓にも応用されていて、生き血や人肉を魔力に変換する。古くはこれを〈生贄〉と言った。

激しい魔力の奔流の中、パーシヴァルの声が聞こえた。

「気に病むな、ラザフォード。今夜のことは——まあ、少しばかり想定外が過ぎた。魔術師はそういうときに死ぬ。私にとって、それは今夜だったというだけだ」

開いた手をまぶたに当てる。眼球がつぶれ、また一段、魔力が高まった。

魔力が重すぎて呼吸ができない。ロキでさえそう感じるのだから、一般人の観客は相当な苦痛に襲われているだろう。意識を失い、倒れ伏す者が後を断たない。

結界の向こうでは綺羅が目をむいている。一方、エドマンドは目を輝かせていた。

想(おも)いを断ち切るように、ラザフォードが声を張り上げた。
「皆、中央に寄れ！　これより安全圏へ転移する！」
魔書を開き、自動人形(オートマトン)を呼び出す。首が長く、尾を持つ、異形の機械人形だ。
「バシン公、我らを〈道標(マーカー)〉へ導いてくれ！」
『可能です、我が君。魔力があれば、ですが』
「すぐに足りる。魔術式を起動せよ！」
『可能です、我が君』
自動人形が両手を掲げ、魔術回路を稼働させる。ラザフォードは皆に怒鳴った。
「さあ寄れ！　範囲から外れたものは取り残されるぞ！」
「学院長！　パーシヴァル先生は!?」
「助からん！」
誰(だれ)かの問いに、ラザフォードは断言した。
「だが、ほかの者は助かる。急げ！　この機を無駄にする者を、私は許せぬ！」
ロキはジブリールに飛び乗り、上から姉を引き上げた。もみくちゃにされるガルム犬を念動で浮かせ、周囲の邪魔にならないよう気を配る。
視界のすみでは、既(すで)に半身を失ったパーシヴァルが、命の灯を燃やし尽くすように魔力を生み出している。右手が蒸発する前に、指をひと振り――これが合図だ。教授陣が魔防を壊すと同時、バシンの尾が舞台を取り囲み、転移魔術が発動した。

「いい手だったが、無理筋だ」
というエドマンドの声が、頭上から聞こえた。
まばゆい魔力の中に、いきなり闇が侵入してくる。瘴気ではなく、巨大な腕だ。大河を思わせる黒い巨腕――無数の眼と流動的な肌を持つ、巨大な怪物の腕！
「逃がすなよ、ギュネス！　雪月花をもぎとれ！」
怪物のかたわらに浮き、エドマンドが命じる。巨人は転移魔術の効力圏に腕を突っ込み、雪月花をわしづかみにしようとした。
ギュネスの存在と転移魔術が干渉し、魔活性が不協和する。干渉光が飛び散り、魔術式が不安定となった。
教授陣が再び魔防を展開し、巨人の腕を押し返そうとする……が、それは自動車を人力で押し返そうとするような、甲斐のない行為に過ぎなかった。
抵抗に加わりながら、ロキは舌打ちする。このタイミングで例の巨人が出てくるとは思わなかった。敵の手に落ちていること自体、完全な『想定外』だ。
ラザフォードも裏をかかれたに違いない。今度こそ、詰み――
「う、ロキ……この子たちのこと、お願いね」
「――なに？」
振り向く。フレイは普段通りに微笑んで、こう続けた。
「ごはんは一日二回。ときどきお風呂に入れてあげてね。散歩も欠かさないで」

「何を言って——姉貴！　やめろ！」

遅い。フレイはもうジブリールを蹴って、巨人の方へ跳んでいた。

鈍臭い姉のこと、跳躍力はない。だが、姉の腕にはもう、ラビに噛ませた傷痕があり、鮮血がしたたっていたのだ。

魔炉心解放。フレイの生き血が魔力に変わり、爆発的な力を生む。

フレイは下手くそな念動で自分を飛ばす。ロキは必死に追いすがり、姉に向かって手を伸ばした。しかし、追いつけない。こちらも秘術に訴えようと思い至ったとき、フレイが巨人の前に自らをさらし、そのまま圧し潰された。

ギュネスの動きが鈍る。一瞬だけ——本当に、一瞬だけ。

あまりに微力だ。が、巻き込まれたねずみ一匹が大きな歯車を止めることもある。この一瞬の干渉で、転移魔術のコントロールが回復した。

その一瞬を逃すラザフォードではない。躊躇なく魔術を完成させ、姉弟を引き離す。抗いようのない大きな力で、ロキはいずこかへ飛ばされる。

姉に向かって伸ばした手は、届かなかった。

ロキは喉が張り裂けるほどに叫びながら、どことも知れぬ場所へと転移した。

Chapter 5 再び、惑い

1

それは、冬の初めの山の中――

叩きつけるような水音の中、雷真は半べそをかいていた。

「ぐっぞぉ……ぐぞ寒いっづーのぉぉぉ！」

ずびっと鼻水をすする。その音も、叫びも、激しい水音にかき消されてしまう。

「静かになさい。叫べば楽になりますが、代わりに雑念が入ります」

となりから涼しい声がする。雲雀が両手を合わせ、滝に打たれていた。

「それからね、ハナはすすらず、かみなさい。風邪をひきますよ」

「このクッソ寒い中、滝行やらせて言うことか!?」

やけくそ気味に石を投げる。師は目を閉じたままひょいとかわし、

「『やらせて』とは人聞きが悪いですね。そもそも私は『ついてこい』なんて言いませんでした。君がどうしてもついてくると主張して譲らなかったんです」

そうだった。山ごもりをするという雲雀に、雷真が無理やりくっついてきたのだ。
「いや、でもさ……俺だけ道場に残って、何すりゃいいんだよ？」
「素振りでもやっていればよかったんです。静かに座禅とか。いいものですよ？」
「嫌だね。もううんざりするほどやってきたし、そもそもつまんねえし！」
「子どもですねえ……。剣の道に――いえ、何事にも王道なんてありません」
「おうどう……って何だ？　立派な道？」
「安易な道という意味です。王さまのために整備された、歩きやすい近道ですね。素振りのような地道な修練こそが、君をはるか遠くへ連れて行きます」
このときの雷真には、師の言葉は理解できなかった。もっと言えば、ごまかしに思えた。真面目に素振りを続けたところで、師に勝てる日がくるとも思えない。近道があるなら、使わない手はないだろう。それが合理性というものだ。
むすっとふてくされていると、雲雀は噴き出し、瞑想をやめた。
「このへんにしておきますか。夕飯もかかっているようですし――南無阿弥陀仏」
水中から仕掛けのカゴを引き揚げる。名前のわからない川魚が三尾、沢蟹が五匹、入り込んでいた。蟹は味噌汁に入れるといい出汁が出る。雷真の腹がぐうと鳴った。
「それじゃ、君は水汲みを頼みます」
「うへえ、また俺が水ぅ……？」
雷真はげんなりした。宿を借りている山寺まで、桶を担いで一五分はかかる。過酷な肉

体労働だが、師は雷真を労うどころか、嗜虐的に笑った。
「これも鍛錬です。あ、濡れた着物は早めに替えなさいね。肺炎で死にますよ」
自身は濡れ鼠のまま、ひょいひょいと飛ぶように崖を登って行く。体重を感じさせない身軽さに、雷真は感心を通り越してあきれた。
「天狗かよ……？」
真面目に鍛錬を続けていれば、いつか、あんな力が身につくのだろうか？
強くなった自分を想像すると、重い水桶も多少は軽くなる気がした。雷真はもう弱音を吐かず、水桶ふたつにたっぷりと水を汲み、棒で吊るして斜面を上がった。
古ぼけた石段を踏むことしばし、煤けた門が現れる。
その門の前で、雲雀が東の空をにらんでいた。
「師範？　どうかしたのか？」
「――明日、山を降りましょう」
「マジで？　やった！　東京に戻ったら、真っ先に蕎麦屋に行くぞ！」
「いえ、君は町遊びなどしてないで、まっすぐ里帰りするんです」
意外なことを言われた。雷真はぽかんとして、師を見上げる。
「急に何だよ？　そりゃ、兄貴や撫子の顔は見たいけどさ」
「お母さんにも会いたいでしょう？」
「はあ⁉　全然だ！　そこまで子どもじゃねえ！」

「不孝者ですね〜。あちらは大層心配されてますよ、君みたいな鉄砲玉のドラ息子」
ひどい言われようだと思ったが、考えてみると、確かにその通りだった。
家を出て以来、まったく戻っていない。道場からは目と鼻の先だと言うのに。
「……いや、おふくろだって別に心配してねえよ。家には出来のいい長男がいるんだし。心配してるなら、道場に様子を見にくるさ」
「いらしてましたよ、頻繁に。知らないのは君だけです」
えっ、と思わず声が出た。雲雀は突き放すように、
「君は〈見〉の力が足りませんね。道場での食事と山での食事を比べて御覧なさい。道場で食べるものには、おふくろの味がしたでしょう？　筑前煮とか、煮豆とか」
「そりゃ……だって師範、近所のおばさんに差し入れてもらったって！」
「その言葉通りでしたね」
そのとき、雷真は自分がどれだけ子どもだったのかを知った。
家を出るときの、気遣わしげな母の笑顔を思い出す。さばけた人柄だと思っていたが、気丈にふるまっていただけかもしれない。
幼い息子を手放す母親というのは、どういう心持ちなのだろう？
プライドだけは一人前の息子をおもんぱかり、物陰から見守る気持ちは？
むせかえるような郷愁が胸にあふれ、つんと鼻の奥が痛くなった。母に会ったら、確実に泣いてしまう。それは恥ずかしいので、雷真はごまかそうとした。

「でも、家には親父さまがいらっしゃるしなぁ。おふくろにゃ申し訳ないけど、親父さまに鉢合わせしたら、確実に叩き出されちまう」
「手土産を持たせてあげますよ。客として訪ねて行けば、無下にはされないでしょう」
「そ、そういうもんかな？　でも、ほら、帰ってもすることないっつーか……」
「怖じ気づいてますね～。すべきことはあるでしょう？　山にくる前、お兄さんに言われたじゃないですか。妹さんと仲直りしろって」
「何で師範が知ってんの!?　神通力でもあんの!?」
「まあ、私も山で修行して長いですしね～」
とぼけた調子で言う。毎度ながら、本気か冗談かわからない。
「ただ、山伏はむしろ赤羽一門の方ですね。霊感ならば、君の方が鋭いべきです」
「……師範って、うちの流派に詳しいのな」
「君より詳しいかも知れませんね。中にいると視えないこともたくさんあります」
謎めいたことを言う。それから真顔に戻り、熱心な調子で言った。
「とにかく、山を降りたらすぐ家に戻りなさい。いいですね？」
「……俺さ、また師範の道場に戻ってきても……いいんだよな？」
雲雀は目を丸くし、そして笑い出した。
「そんなことを心配してたのですか。もちろんです。君のしたいようになさい」
雷真は安心して、素直にうなずいた。

しかし結局、雷真の里帰りが実現することはなかったのだ。

2

激しい空腹と、思い出したような胸の痛みで、雷真は目を覚ました。

「ぐ……っ」

腕の皮が突っ張る。輸血の管が刺され、包帯が巻かれていた。

約束通り、治療されている。ただ、血色は悪く、爪も白化していた。

雷真は清潔なベッドの中にいた。ここはどこだろう？　頭が全然働かない。

「くそっ……血が回ってねえ……いい加減、死ぬぞ……！」

「まったくです。本当に生傷が絶えませんねえ、君は」

とぼけた声が聞こえる。暖炉の前で、雲雀が薪をくべていた。何をやらかしたのか、顔中に絆創膏を貼っている。

助けにきてくれたのではないか――と期待したが、そんなわけはない。

「少しは楽になりましたか。軍医さんに感謝することです」

軍医と聞いて、思い出す。そう、ここは日本軍の拠点だ。

雷真は苦痛にうめきながら、己の状態を確かめた。

魔力は多少、戻っている。しかし、精瑠は落ち着いていない。めりめりと裂けるような感触があり、まだ不安定に思える。

(体が精瑠を拒絶してる……? 魔力は少し戻ったのに、なぜだ……?)

一瞬、水槽で眠る相棒の姿が脳裏をよぎった。治療しても回復しないというこの状況、あのときの夜々とどこか似ている。

考えているうちに、雲雀から漂う、金物くさい匂いに気付いた。

「師範……斬り合ったのか? 今しがた?」

「――ええ、ちょいと手強いチャンバラをやりました」

「誰と……いや、誰をやったんだ?」

返事はない。その代わり、雲雀は試すような視線を雷真にくれた。

「雷真、以前にも訊いたかも知れませんが。君に、私が斬れますか?」

技術を問うているのではない。覚悟を問うている。雷真は少し考えて、

「そりゃ無理だ。万が一やり合うことがあったとしても、一本取って終わりにしたいな。東欧でやったときみたいにさ」

雲雀はため息をついた。失望した様子で、他人事のように言う。

「まあ、それもよいでしょう。私の腕一本でもつぶせば、事足ります」

「それも無理だ。俺は師範を親みたいに思ってるし、兄貴みたいに思ってる。……出来の悪い弟は、どっちの兄貴にも頭が上がらなかったけどな」

冗談めかして言う。雲雀は笑ってくれると思ったが、にこりともしなかった。
「……君は私を誤解しているんですよ。私がどんな悪党か、本当は何も知らない」
「そりゃ、まあ……な。だが、俺だっていつまでもガキじゃねえ。異国で色々やらかして、世界ってものを見て、わかったことがある」
「ほう。何です？」
「そういうことをわざわざ俺に言う奴は、大抵いいやつなんだ」
心の底から信頼している。そういう眼で雷真は雲雀を見た。
厳しかった雲雀の口元が、ようやくほぐれた。
「……血、でしょうかね。君のそういうところは、空観殿に似ています」
「親父に？　師範……親父を知ってるのか？」
雲雀は再び笑みを消し、らしくないほど厳しい顔で言った。
「誰であれ、敵する者は斬りなさい。君に師として伝えられることは、これだけです」
「――――」
「譲れない目的があるなら、なおのこと躊躇してはいけません。でなければ、躊躇しない者に斬られます。君が先ほど経験した試合も、そうだったのではないですか？」
どう答えていいかわからず、雷真は黙った。
「ま、私からのお説教は後にしましょう。君はまず偉い人に叱られなさい」
「偉い人？　俺は誰に会わされて、何をされるんだ？」

「何を今さら。先ほど闘技場にいらしたあの方こそ、菅生少将です」
ぎょっとした。将官の地位にある者が、自らあんな危険を冒したのか。
「……軍は一体、何をやらかすつもりなんだ?」
「私の口からは言えません。直接うかがいなさい」
細いあごで扉を示す。はかったように足音が響き、扉が開いた。
廊下には四、五人の兵が詰めていて、一斉に上官に敬礼した。こんな近くにこれほどの数がいたことに、まず驚く。雷真の知覚は本当に鈍っている。
兵たちの前を抜け、闘技場で見た、あの指揮官が入ってきた。
「自分が菅生少将である。本隊は作戦行動中であるゆえ、手短に話そう」
とっさに身を起こそうとする雷真を、少将は軽く手で制す。
「そのままでいい。体力を温存せよ」
「あ……りがとうゴザイマス」
無機質な風貌とは裏腹に、菅生は気さくに微笑んで、こう言った。
「よくぞ、夜会をここまで勝ち上がった。正直、軍は貴様に〈囮〉以上の働きを期待していなかった。私も己の不明を恥じる」
雷真は阿呆面で菅生を見つめ返した。硝子が虚無石を持ち逃げしたのはつい最近のこと。雷真は私闘を繰り返し、挙げ句、綺羅に直接攻撃を加えた。叱られるネタには事欠かない。
それがまさか、誉められるとは思っていなかった。

「私は常々、兵の勲には相応の報いがなければならないと考えてきた。ゆえに、貴様にもそれなりの褒賞を出す。帰国後は准将の地位を約束しよう」
「准……将……!?」
あごが外れた。将軍？　俺みたいなごろつきが？
目もくらむような出世話だが、それは戦慄すべき未来とセットになっている。
軍が欲しているのは兵器としての雷真だ。きたるべき世界大戦に際し、『効率よく人を殺す道具』としての働きが求められている。雪月花で戦場を蹂躙することを。
「その上で、今夜の任務を申し渡す。赤羽天全を討ち、〈戦隊〉を奪え」
「――――!?」
「じき、先行部隊が標的の居場所をつかむ。貴様も討伐隊に参加せよ」
既に雷真の頭は、疲労と混乱の極みにあった。
理解できない。復讐は個人的事情だ。軍が後押ししてくれる理由などない。
（いや……話は逆……だったのか？）
軍が天全を狙っていたからこそ、雷真は英国に派遣された……？
「天全襲撃は一時間後を想定している。急ぎ食事を取り、仮眠を取れ」
「――俺はもう魔力が尽きてる。一時間後じゃ、天全には勝てない」
「貴様も帝国軍人なら泣き言は言うな。魔力に関しては、補給の手段もある」
菅生が口を閉じる。復唱を求められているのだとわかったが、雷真はそうせず、

「……いくつか、質問許可を願イマス」

「許す。言ってみろ」

「マグナスが天全だってのは、確か——なのですか?」

「その点に関しては、貴様の方が詳しいだろう?」

目つきをやわらげ、いたわるように言う。

「貴様の集めた情報が根拠だ。赤羽流秘伝〈紅翼陣〉を使うこと。赤羽撫子にうり二つの自動人形を持つこと。年齢、体格、身体的特徴の一致。容貌は魔抗銀の面で隠されているが、司令部は確定事項として扱っている」

そう——そのはずだ。だが、ここにきて、雷真は確信が揺らぐのを感じていた。

なりすましという可能性はある。紅翼陣は叔父にも従兄にもできた。

火垂が撫子にそっくりでも、マグナスが天全である理由にはならない。一門が滅亡した夜、戦隊のボディは既に完成していた。前もって顔を似せる理由などない。

なぜ、軍は天全を追う? 兄と軍に何の関わりがある?

「軍はどうして天全を追ってたんだ……?」

「叛逆者だからだ。我らは機密の漏洩を阻止せねばならぬ」

「機密? あいつが持ち出した……? 何をだ?」

「『何であるか』ということ自体が将官限の機密に相当する。答えられない」

「あいつが一門を滅ぼしたのは、その機密と関係がある……のか?」

「答えられない」
　これは駄目だ。雷真は別の角度から探ることにして、慎重に訊いた。
「俺が〈戦隊〉を奪ってきたら、あいつらは解体されるのでしょうか？」
「それを訊いてどうする――ああ、妹を禁忌材料にされたのだったな」
「……かもしれないってだけだ」
　素材をほかで調達していた可能性はある。ただ、その場合、撫子の部品を何に使ったのか、という疑問は残る。
「戦隊は貴重な戦利品だ。軍も粗末な扱いはしない」
　菅生はなだめるように言った。それから、さらに寛大なところを見せた。
「まだ納得できぬという顔だな？　訊きたいことがあるのなら、言ってみるがいい。答えられることには、答えよう」
「土門の婆さまは、俺をどうするとおっしゃった……かな？」
「何も聞かされてはいない」
「――え？」
「貴様の愚行は部下から報告を受けた。だが、それだけだ。土門さまは何もおっしゃらなかったし、軍は全力で貴様を守る。土門さまへの申し開きならば、私がする」
　雷真のとなりで、雲雀が満足げに首を上下させた。一方の雷真は、どんな顔をしていいのかわからず、唖然としていた。

厳罰を覚悟してここにきたのに、菅生の態度は何とも甘い。
「なら、硝子さんは？　軍は硝子さんをどうする――んでありますか？」
「現在、彼女の身柄は魔術師協会に抑えられている。彼女ほどの人形師を国外勢力に渡すわけにはいかない。軍が確保できぬのなら、殺害もあり得る」
「ふざけ――」
雲雀の手が雷真の肩にかかる。それだけで、膝まで透徹するような痛みが走った。
痛烈な掌打を加えた雲雀が、口ぶりだけは優しくささやく。
「少将さんはね、そうならないよう『連れ帰れ』とおっしゃったんですよ」
激痛に朦朧としながら、菅生を見る。菅生はうなずき、補足した。
「素行はともかく、花柳斎は国の宝だ。花柳斎人形の価値は軍も認識している。過去には痛い目も見せられているのでな」
菅生の顔に苦笑いが浮かぶ。他方、雷真は冷や汗をかいた。
「司令部には寛大な措置を求めるつもりだ。榊とは互いに好かぬ間柄だが、奴とて花柳斎を救うためとあれば、協力は惜しまんはず。彼女は生かせる」
つまり、硝子は無事に帰国できる。天全を倒すのは雷真の望むところで、戦隊も解体されずに済み、帰国後の雷真は将官待遇。すべてが丸く収まっている。
「ほかに質問がなければ、任務を復唱しろ」
「断る」

雲雀が天を仰ぎ、菅生が目を見張った。
「……なぜ軍令に従えない？　日輪さまに懸想するあまり、判断力を失ったか？」
「そんなんじゃねえ！」
いや、半分は当たっているのか。冷静な判断力は失われている。
だが、雷真の本能は、この命令に逆らえと言っているのだ。
「俺は俺の都合で天全をぶっ殺してえんだ。軍の命令は関係ない。責任も負えない。そして断言させてもらうが、俺は絶対、硝子さんを売らない」
「――もう少し、利口になれないものかな？」
「ご存知ねえのか？　俺は成績不振の劣等生で、大馬鹿野郎なんだよ」
菅生は長い、長い、ため息をついた。
小さく手を上げる。廊下の軍人が即座に反応し、拘束具を抱えて入ってきた。
雲雀が頭を抱える横で、菅生自ら雷真に魔封じの手錠をかける。
「作戦開始まで、少し頭を冷やすがいい。どのみち、貴様には休息が必要だ」
ぽんと優しく雷真の肩を叩く。徹頭徹尾、菅生の態度は寛大だった。

3

清潔で暖かな部屋を追い出された雷真は、不潔で冷たい地下牢に放り込まれた。

軍学校の〈懲罰房〉を思い出す。とってつけたような簡易ベッドは床よりマシな程度の硬さ。与えられた食事も質素で、干し肉とパン、冷めたスープのみ。

今さらぶり返した胸の痛みが厳しい。精瑠の具合はますます悪化している。

「くっそ……干し肉が、傷に響く……！」

噛むたびに鈍痛がくる。雷真は自嘲して、軽口を叩いた。

「何が将官待遇だよ……断った途端に牢獄送りじゃ、人間扱いされてねえ……」

「君の馬鹿が過ぎるからでしょうよ」

愚痴っぽい声が聞こえる。鉄格子の窓越しに、雲雀の長髪が見えた。

「何だよ、師範。まだ怒ってるのか」

「今日という今日は、心底あきれましたよ、私は……」

仏頂面。普段飄々としているだけに、こうまで愚痴っぽいのは珍しい。

「少将さんのご厚意を足蹴にして……日本に帰りたくないんですか？」

「……ま、帰ったところで、もう待ってる奴もいねえしな」

日輪と縁が切れた今、本当にそうなってしまった。軍学校時代の友人とは連絡も取っていない。唯一の心残りは、夜々と花火を見に行くと約束したことくらいだ。

「……なあ、師範。日輪の婚約相手ってのは、誰なんだ？」

「ふん、急に未練なことを言い出しましたね。それを聞いてどうするんです？」

「そりゃまあ……ナットクするっつーか」

「君が納得したいだけですか？」

何も言えなかった。師は誰とは言わず、こんなふうに続けた。

「数年前から、お館さまはあれこれと手を回していたようです。軍にも働きかけて、この英国行きには特に信頼できる人物を推されたとか」

「日輪を心配して？　あの婆さまが？」

「姫君が異国にいらっしゃるのを、お館さまが放任されるはずはないでしょう」

日輪に厳しく当たる一方で、裏では軍に警護を依頼していた、ということだ。そもそも、昴と六連の同行も、綺羅の許しがなければできないことだろう。

綺羅は決して日輪を捨ててはいなかった。勘当されたと思っていたのは日輪だけ。それはどこか、自分と両親の関係に似ていた。

「三年経っても……俺って奴は、何にも見えてなかったんだな」

「君に比べたら猪の方がまだ利口でしょうよ。姫君がどんな気持ちで君を刺したか、足りない頭でよく考えて御覧なさい」

突き放すような言葉とともに、にゅっと鞘が突き出された。

「――え？　何だ？　刀？」

「君のねぐらから取ってきてあげたんです。持ち歩きなさいと言ったでしょう」

「……囚人に武器なんか差し入れていいのかよ？」

「構いませんよ。どのみち手錠をかけられているのですから。ただ、万が一これを抜ける

ような状況になったとき、何かの役に立つでしょう」

たとえば、仲間が助けにきてくれたとき。

「——ありがとよ、師範。遠慮なく使わせてもらう」

礼を言う。それから、可笑しくなって噴き出した。

「ほらな、師範。やっぱあんたは、俺の味方だ」

そう言った途端、すっと気温が下がった気がした。

雲雀の様子がいつもと違う。雲雀は能面のように無機質な顔で、

「これを見ても、そんな巫山戯たことが言えますかね？」

ふところから何かを引っ張り出し、鉄格子の隙間から突き入れた。

布切れだ。濡れた泥のようなものが付着している。

スカーフでも、ハンカチでもない。シャツ——かブラウスのすそを切り飛ばしたものだ。

こびりついているのは泥ではなく血で、胸の悪くなるような鉄錆びの臭いがした。

「軍に提出する証拠品です。さすがに中身を持ってくるのは悪趣味ですからね」

「軍……に？」

「そうですよ。誰を斬ったと思います？」

雷真はもう一度、布切れを見た。

女物だ。ボタンが留まったまま、きれいに輪を描いている。血液は切断面から広がっていて、着たまま斬ったのなら、胴体は完全な輪切りになっているだろう。

そっと指で血に触れた瞬間、脳裏に幻影が閃いた。
推理ではなく直感で、あるいは溶け込んだ魔力の波長で、誰の血液かを悟る。
がいんっ、と大きな音がして、眼前の鉄格子が鳴った。
――自分の頭が激突した音だ。闇雲に飛び出そうとして、ひたいをぶつけた。
生温かいものが眉間を伝い落ちる。自分の血の味を噛みしめながら、雷真はこの鉄扉と、胸の傷と、魔封じの手錠に感謝した。そのどれか一つでも欠けていたら、とっくに雲雀に斬りかかり、そして斬り捨てられていた。
「師範……あんたは……っ！」
気持ちばかりがはやって、言葉にならない。しゃべり方を忘れたように、何度も何かを言いかけ、言えず、また試みて、ようやくのことで、こう言えた。
「お師匠さまを……斬ったのか……!?」
「…………」
「殺したのか!?」
雲雀の端麗な顔に、薄笑いが浮かんだ。
「まあ、天下の魔王さまと言えど、真っ二つにされてはね」
「……俺は……信じない」
「信じなければ、事実が変わるのですか？」
「俺は信じない！」

愛想を尽かしたのか、雲雀は冷笑を浮かべて、こんなことを口走った。
「ねえ、雷真。赤羽一門滅亡の夜、私がどこにいたか覚えていますか？」
「……なに？」
「私がどこで何をしていたか、説明できますか？」
何を言っているんだ、と思った。赤羽の屋敷で火の手が上がった途端、雷真はもう道場を飛び出し、屋敷へ走っていた。師のことを考えている余裕などなかった。
「あれっきり、君は道場に戻りませんでしたね？」
「それは……硝子さんに……拾われて……」
「そうです。君は焼け跡に寝泊まりするようになり、そのまま花柳斎先生について行ってしまいました。ですが——私が君を迎えに行かなかったのは、なぜです？　そもそもあの道場は、本当に〈剣術道場〉だったのですか？」
「……じゃなきゃ、何だって言うんだよ」
「私が本当に、ただの剣術屋だと思いますか？　門弟たちが本当に、剣を学びにきていたと思いますか？　なぜ赤羽さんのご近所に、都合よく私のような者がいたんです？　傀儡嫌いの息子さんをいかにも魅了しそうな、凄腕の剣士が？」
「回りくどいぞ！　何が言いたいんだ！」
「やれやれ、勘の鈍いことで……。では、はっきり言いましょう。私のこの腕があれば、空観殿や、赤羽の皆さんを、斬り捨てられるとは思いませんか？」

「君は可愛い弟子でした。何も知らない、無垢な子ども。優しい嘘の中で安寧を得ていた、弱い子ども。こんなに可愛くて、虫唾の走るものはほかにありません」
雪原を走る吹雪のように、冷たい瞳が牢獄の闇に閃いた。
「世界を見た？　何を見てきたんです？　君はいつまで目をつむっているんです？」
雷真が答えられずにいると、雲雀は背を向け、吐き捨てるようにつぶやいた。
「……まあ、何もかも君の勝手ですね。したいようになさい」
牢の前から気配が消える。
冷たい鉄扉にひたいを押しつけ、雷真は震えた。
自分で、自分が、わからない。自分が今どんな状態なのか、説明できない。
激怒しているようにも、悲しんでいるようにも、絶望しているようにも、どこかに希望を探しているようにも思えた。
（師範……俺を……裏切ったのか……？）
弟子の信頼を？　ともに過ごした時間を？　あの記憶のあたたかさを？
（……違う！　魔王陛下がやられるわけねえ！）
だが、雲雀の業がどれほどのものか、雷真はもう知っている。
……わからない。真実が知りたい。グリゼルダの安否を確かめたい。
（だが……本当に斬られたのなら……もう……手遅れだ……！）
「――――!?」

そして、斬られていないなら、急ぐ必要はない。先に雪月花と硝子の安全を確保すべきではないか？　軍は硝子と雪月花を欲しているのだ。雲雀が軍の命令で動いているなら、次に雲雀が狙うのは、当然、花柳斎と雪月花ということになる。

とにかく、ここを出なければ。そう考えて行動を起こそうとしたとき、ずきんっ、と傷が痛み、膝から力が抜けた。この傷は本当に、雷真の邪魔をする。

「……くそったれが！」

力任せに手錠を扉に叩きつける。金具が手首の肌を破り、血が飛んだ。

「自棄になるなよ、馬鹿……」

――と、鉄格子の向こうから、か細い少女の声がした。

一瞬、聞き間違いかと思った。だが、今の声は、まぎれもなく――

「……アリス？　おまえ……いたのか」

「そんな言い方があるかい。少しは僕のことも心配しなよ」

救出にきてくれた……のではなく、アリスも日本軍に囚われていたらしい。

雷真に協力し、綺羅に敵対したからだろう。結局は雷真の責任だ。自責の念に圧しつぶされそうになっていると、アリスの方が「悪かったね」と言った。

「全部、僕の責任だよ。君をさんざんバカバカと罵ったくせに、僕の考えが足りなかった。あやうく女子たちを全滅させるところだったし、君はそんな傷を――」

「違う！　これは俺の考えが甘かったからだ！」

「本当に、すまないと……思ってるんだ……！」
アリスの声が震える。ひねくれ者の彼女が、本気の声で詫びている。
「君のその傷は……僕がつけたも同じだ。だけど、言い訳はさせて欲しい。あのお姫さまが本気で君を刺すなんて……思わなかったんだ」
「……俺も……思わなかった」
何があっても、味方でいてくれると思っていた。
日輪も、雲雀も、決して雷真を裏切ることはないと、信じていた。
「……落ち込んでるとこ悪いけど、伝えておくよ。君がさっき質問したことだけど、イザナギのプリンセスが婚約したのは、エドマンド王だ」
頭を金鎚でぶん殴られたような気がした。
エドマンド……よりにもよって、あのエドマンドか……！
「……日輪は、どうするって？」
「無意味な質問だね。拒否する権利が彼女にはない」
それは慰めだったのだろうが、要は『拒否しなかった』ということだ。
精瑠のそれとは違う痛みが、雷真の胸を激しく苛む。その沈黙を疑念と受け取ったのか、アリスは駄目押しのように言った。
「確かな情報だよ。僕がこの目と耳で確かめた。メイドに化けて……えほっ」
湿った咳を吐く。彼女がパーシヴァルの診察を受けていたことを思い出し、雷真は急に

心配になった。

「おい、大丈夫か？　おまえ、声が枯れてるぞ？」

「喉の調子が悪いだけさ。毒霧を吸ったから……大丈夫、致命傷にはほど遠いよ」

重傷ではないのか。ほんの少しだけ、気が鎮まる。

ひたいの血をぬぐい、日輪のことも、雲雀のことも、ひとまず頭から追い払う。

「……俺はもう大丈夫だ。だらしないとこ見せて、悪かった」

「そんなのお互いさまだろ。僕だって、君の前で取り乱したじゃないか」

父ラザフォードに捨てられたと思って、泣き喚いたことがある。思い出して恥ずかしくなったのか、アリスはいつもの意地悪な口調になった。

「まあ、あのときの君みたいに、平手をくれてやりたいところだったけどね」

「……ビンタなら朝もらったぞ。すっげえキツイやつ」

「君の唐変木が原因だろ。――それにしても、日本の連中は気がきかないね。同じ房に入れてくれれば、色々楽しいことができたのにさ」

「……そうだな。再会を喜ぶあまり、キスの雨を降らせたかもしれない」

負けじと冗談を言ったとき、『くっくっく』と別の笑い声がした。

「聞きましたえー、雷真はん」

「――六連か!?」

声はアリスよりさらに遠い房から聞こえた。

「夜々ちゃんが今の聞いたら、めっちゃ怒るやろなあ。角ぉ生やしますよ」
「冗談でもやめろ！　おまえどんな状態なんだ？　昴もいるのか？」
チッと舌打ちが聞こえた。六連は人が変わったように冷たく、
「昴はアホや。僕より肝っ玉据わっとるて思とったんに……！」
六連の気持ちは痛いほどよくわかった。六連もまた、信頼していた者に裏切られたように感じている。だが、昴に関しては、雷真は逆の見解だった。
「ああ、据わってるな。昴は俺たちのために、あっち側についたんだ」
「――はい？」
「ライシン。それはどういう意味だい？」
アリスが訊いてくる。雷真は一応順序立てて、発言の根拠を説明した。
「おぼろげに記憶があるんだ。昼間、婆さまに追い詰められたとき、追っ手の式神が急に弱まったよな？　あれはなぜだ？」
「そら……僕の六角法陣結界が、何かの加減で復帰して」
「ひとりでに復帰するような術かよ。誰かが復旧させたんだ」
ばさっと布の音がする。あちらの房で六連が立ち上がったらしい。
「昴がやった……て、ゆうんですか？」
「そう仮定すると、あいつがあっちに残った理由もわかる。俺たちがしくじった場合、婆さまに取り成してくれる奴がいないと、本当に詰む」

「アホな……それ、僕らに裏切り者呼ばわりされますよ！」
「そういう奴だろ、あいつ。頑固くて、意固地でさ。だが、日輪のためなら、自分が痛い目見ることを何とも思わねえ」
「……いや、そんなんわかりません。昴はお館さまに逆らえんだけや」
「だが、決定的な証拠がある――ほら」
コンコンと扉を叩き、二人の注意を廊下に向ける。
それで、二人も来訪者に気付いた。
はー、と、六連が苦笑混じりのため息をつく。
「……悔しいわぁ。僕のが付き合い長いのに、雷真はんの方が昴をよう知ったはる」
「殴られた回数なら俺の方が多いからな。――昴、逃がしてくれるんだろ？」
返事の代わりに、ゆらりと闇がうごめき、黒い獣が飛び出してきた。
狐――いや、狸の式神だ。その後ろに、しかめっ面の男子学生がいる。
「……でかい声出すな、阿呆」
静まり返った房内に、ちゃらりと金属の音が響く。
昴の手にあったもの、それは文字通り、希望の〈鍵〉だった。

4

壁のおぼろげな明かりが、昴の浮かない顔を浮かび上がらせた。
「ほんましぶといやっちゃな、雷真。まーだ生きとるんか」
昴はかすかに微笑みを浮かべ――いきなり土下座した。
「この通りや。お嬢のこと、どうか堪忍したってくれ」
「……おまえまで、何だよ。そういうのやめろ」
「おまえの夜会をふいにするとこやった……ほんまにすまん……！」
「やめろ！　俺はロキに勝った。俺の夜会は終わってねえ。それに……それによ」
割れたひたいを鉄扉に押しつけ、胸の傷を押さえる。
「日輪がこんなことをしたのは、俺のせいかもしれない。俺がもう少し頼り甲斐のある男だったら、日輪も命運を委ねてくれた……んじゃねえかな？」
昴も、六連も、アリスも、答えなかった。
その沈黙の意味を噛みしめ、雷真は鉄格子の窓へ手を寄せた。
「昴、手錠を外してくれ。俺は相棒のところに戻る」
「……上は大騒ぎやぞ。おまえ、状況わかっとるんか？」
「いや。だが、脱出が先だ。ここで時間を食ってると、おまえが勘付かれる」
「話を先にした方がええ。俺はおまえらより信用あるし、こいつらもおるしな」
足もとにまとわりつく狸たちを示す。こうして見ると、なかなか愛嬌がある。
「素流狸ゆう式や。西洋の魔術師に対しては、アリスちゃんや小紫ちゃんの方がよっぽど

ええけど、瘴気に溶け込んで陰陽師から身を隠す権能がある」

「……いざなぎ流って、そういう術、多いな。同士討ち用っつーのか」

過去、陰陽師同士の争いが激しかったことを思わせる。ひょっとして、赤羽一門が式神を捨てたこととも関係があるのかもしれない。

「そいつを使うってことは、婆さまだけじゃなくて、ほかにも陰陽師がいるのか？」

「いるも何も……」

「ぎょうさんきとりますよ。僕のオトンもね……っ」

きつい折檻でも受けたのか、六連が情けない声を出した。昴もうなずき、

「百人近くおる。いざなぎの精鋭ぞろいやぞ。ただ、もうほとんど出払っとる」

「——結界の構築作業かい？」

アリスが鋭く問う。昴はすんなり肯定した。

「弓削さんは穢土を作るゆうとった」

「エド？　エドってのは何だい？」

「地獄や」

昴の答えは、これ以上ないほど簡潔で、そして不可解だった。

「機巧都市はお館さまの支配領域になる。目ェ盗むためには素流狸に案内してもらうしかない。俺はお嬢んとこ行くし、雷真も連れてってる」

「——助かる。話が終わりなら、早く魔封じを解いてくれ。傷に障るんだ」

昴は不満げだったが、不承不承、外してくれた。魔力循環が解放され、呼吸が楽になる。だが、精瑠の調子は戻らない。痛みがやわらぎもしない。
それでも刀をひっつかみ、干し肉をくわえて出発の準備をする。昴が蝶番に油を差し、よくなじませてから鉄扉を開いた。
「ほな、行くで。ついてきぃ」
「ちょ――待てよ。アリスと六連は？」
「アリスちゃんは動けん。おまえは早ぉ学院戻って、夜々ちゃんたちを探せ」
雷真は無視してアリスの房へ走り、鉄格子越しにのぞき込んだ。
アリスはベッドの上でシーツを引き寄せ、不自然に体を隠した。
「アリス……おまえ、ひょっとして足が……？」
「……取られたのは機械義肢だよ。だけどご覧の通り、僕は歩けない。そもそも、うちの不良執事がいないと、僕は戦力にならないからね」
「昴、ロープかベルトを調達してくれ。俺が背負って行く」
「この馬鹿！」
低くおし殺した声で、アリスは投げつけるように怒鳴った。
「君もわからない男だね……僕は置いて行けと言ったんだ！」
「おまえもわからない女だな……俺がどんな野郎か、いい加減わかれ！」
断固、仲間を見捨てはしない。アリスがこんなところにいるのも、元を正せば雷真の責

任なのだ。

「昴、早く開けてくれ。置いて行けなんて、馬鹿なこと言わせてんな！」

「馬鹿はおまえや。自分の体をよう見てみぃ。アリスちゃんはあきらめや」

「──おい、ふざけんなよ。俺は絶対、誰一人、あきらめるつもりはねえ！」

「せやから、それはもう、無理なんや！」

昴が雷真の胸倉をつかみ、壁に押しつける。傷に激痛が走り、意識が朦朧とした。抗議したいところだったが、昴の真剣な眼差しに圧され、文句が引っ込む。

「……おまえはずっと、そやったな。おまえの我武者羅がいつも俺らを引っ張ってきた。今までは、それでよかったのかもわからん。けど、それはもう通らんのや」

「……何でだよ」

「おまえに助けられたモンが皆、おまえを助けようとするからや。おまえのわがままは、もうおまえだけのもんやない。俺かておまえを死なさへん。結果、どうなる？　おまえがわがまま通したら、皆が死ぬんや。夜々ちゃんも、シャルちゃんも、皆が皆、おまえに付き合うて死ぬんやぞ？」

昴の言葉は、どんな刃物よりも鋭く、雷真の胸をえぐった。

先ほど雲雀に見せつけられた、グリゼルダの血がフラッシュバックする。

「アリスちゃんは足手まといになりたないんや。何でそれがわからん！」

ぐうの音も出ない。雷真は「……悪い」と二人に謝った。

昴はぎりっと奥歯を噛み、うめくように言った。

「阿呆、謝るのはこっちや……俺らは、おまえに……謝っても謝りきれんのや！」

「それは……どういう意味だ？」

「いざなぎ一門は……おまえの——！」

ずどんっ、と地響きのような音とともに、アリスの牢が噴き飛んだ。

鉄の扉が軽々と飛んでくる。あやうくぺしゃんこにされるところだ。

「アリス！　大丈夫か⁉」

返事はない。代わりに房から瘴気が噴き出し、視界が黒く染まった。

その瘴気にまぎれ、ぬっと巨体が姿をあらわす。はちきれんばかりに筋骨隆々。剛毛が生え、角があり、牙が突き出している。まさしく伝承の通りの——

「鬼⁉」

綺羅が連れていたものとよく似ている。別の個体なのか、ふた回りほど小さい。

多少体格が劣っていても、脅威の度合いは変わらない。やすやすと鉄扉を蹴破るその力、人体に向ければ何が起こるか、火を見るよりも明らかだ。

鬼のかたわらに、すっと人影が立った。

「それをゆうたらあかんやろ、昴さん。あんたも悪い子やねえ？」

それは、いざなぎ流の当主にして、もっとも力ある術者——

土門綺羅が、あの鬼神を従えて、そこにいた。

「何で、素流狸が効かん……⁉」
昴が怯んだ声を出す。綺羅は嫌みったらしく笑った。
「そんなことやろうと思ぉとりましたんえ。若い時分は道理が見えん。いっときの人情に流されて、道を踏み外すもんどす」
「――お言葉だがな、婆さま。そんな台詞は『踏み外してない』奴が言うもんだ」
横から口答えする雷真を、綺羅は毛虫を見るような目つきで見た。
「ほんに、しぶとい化け物や。胸貫かれて、まーだ生きとる。まあ、おかげさんで始末をつけられます。捕虜をさらって脱獄未遂――これなら菅生さんの顔も立つやろ？」
今さらカラクリに気付き、雷真は自分自身を殴り飛ばしたくなった。
（アリスの存在そのものが、罠か……！）
雷真に制裁を加えるための餌。ならば当然、餌の周囲を見張っていたはず……。
「へっ……さすが海千山千の婆さまだ。アリスや俺より腹黒いぜ。俺をバケモノ呼ばわりしてくれたが、俺に言わせりゃあんたの方がよっぽど妖怪――」
「ドアホ！　下がれ！」
風を切って鬼の鉄拳がうなる。瘴気のせいで察知が遅れた。首を折られると思ったが、昴が壁妖怪〈婦守磨〉を呼び出し、雷真を守ってくれた。
こぶしの振りに耐え切れず、婦守磨が破れる。勢い余った鉄拳が石壁にめり込み、六連の房の壁を崩した。瓦礫に巻き込まれ、六連が悲鳴をあげる。

鬼の圧倒的な力に、雷真は改めて戦慄を覚えた。
こちらの武器は刀一本。おまけに瀕死。勝てる手段も、余力もない！
一刻も早く脱出すべきだが、綺羅が現れてしまってはもう、逃げるのも難しい。
打つ手を探し、周囲に視線を走らせる。それだけで目が回って、天地が逆転した。
「…………!?」
べりっと嫌な感覚があって、ついに精瑠が剥落した。
呆気なく呼吸困難に陥る。口一杯に血の味が広がり、視界が急速に暗くなった。
「雷真!?　何寝とんのや！　立て！」
昴が印を結び、何かの式神を呼び出そうとした――が、綺羅の方が数段速い。周囲の壁から黒い手のようなものが沸き、昴をがんじがらめにしてしまう。
そして、鬼がゆらりと雷真の方を向いた。
（待てよ、おい……これで終わり……なのか……!?）
衝撃を通り越して、あきれた。綺羅の強さにではなく、自分自身の弱さに。
もともと一門の落ちこぼれだった。この三年間、無様に地べたを這いずってきたつもりだ。しかし、それでも、これほどか？　ここまで弱い男だったのか？
それなりに力をつけたはずだ。もう、生家の焼け跡で歯噛みするだけの子どもではない。
相棒がいて、仲間がいて、数多の試練をくぐり抜け、変われたはずなのだ。
（何とか、しろ……！）

鬼がこぶしを振りかぶる。その動きから目をそらさず、雷真は己に命じた。

（さんざん大口叩いてきただろ！　どうにかしろ！）

最後の瞬間まで活路を探せ。持っているもの、与えられたものをすべて出せ。何もかも、一切合切を、選り好みせずに、本当にすべてを！

——すべて？

ばあん、と闇が弾けるような感覚があって、思考の扉が開いた。

（ある！　まだ打てる手が……ある！）

持っているのに、出していないものがあった。まだ、たったひとつだけ！

皮肉にもそれは、心底から嫌っている人物が与えてくれたものだった。

ふところに手を突っ込み、祈りを込めて握りしめる。

鬼の鉄拳が雷真ごと床を叩き割る——寸前、足もとから揺らめく闇が噴き上げた。

何が起こったのかわからないまま、落ちる。暗闇の中を、どこまでも落ちる。

やがて唐突に闇が晴れ、赤黒く変色した空と大地が目に入った。

むせ返るような硫黄の臭気、目に染みる黒煙がきつい。

「おおお落ちる！　何やこれっ？　どうなっとる？」

「やっぱし僕……地獄行きやったんやああ！」

背後の空中で男子二人が狼狽している。だが、落体の運動法則に反し、三人の落下速度は上がらない。三人は羽毛のようにふんわりと、焼けた大地に着地した。

その程度の衝撃でも、今の雷真には耐えられない。胸から後頭部に激痛が抜け、その場に倒れた。昴と六連があわてて駆け寄ってきて、助け起こす。
「おい、説明する前に死ぬな！　何やここは!?　童子はどこや!?」
「親切な方が……助けてくれたのさ……アリスは……どこだ？」
「おあいにく。さすがにそこまで手が回りませんでしたわ」
どこからか女性の声が聞こえ、昴と六連がびくりとする。二人が身構える間もなく、赤い大地に亀裂が走り、地中から何かが突き上げてきた。
枯れた巨木のような、巨大な人骨。そのてのひらに、一人の少女が腰掛けている。白い肌、黒い髪の、可憐な少女――否、『少女のような見た目の』魔女だ。
「我がアプラクサスの所領、冥府へようこそ、愚かで騒がしい子どもたち」
度肝を抜かれ、六連が腰を抜かす。一方、昴は何かを察したように雷真を見た。
黒薔薇は艶然と微笑み、雷真に問うた。
「冥府に堕ちる覚悟が決まった、ということで、よろしいんですのね？」

5

（どこまでも綱渡りだな、俺って野郎は……）
血の泡を噴きながら、雷真は笑った。

綱渡りではあったが、可能性はつながった。綺羅の脅威は遠ざかり、代わって黒薔薇の魔女が目の前にいる。

「……雷真、説明せえ」

強張った声で昴が言う。雷真は手を開き、握っていた指輪を見せた。

薔薇のレリーフが刻まれたリング。結社幹部の身分を示す印章だ。

「こいつで……呼んだんだ。助けてくれってな……」

「『呼んだ』ゆうたな？　ほなおまえ、結社の犬っころになったんか！」

「結社じゃねえ……黒薔薇さまに——」

「おんなしや！　黒薔薇ゆうたら、金薔薇と双璧やないか！」

雷真の襟首をつかみ、揺さぶる。傷の痛みよりも、昴の視線の方が何倍も痛い。

「魔女に魂売ったんか!?　そんなん、おまえがいっとう許せんやつやろ!?」

「……俺はもともと兄貴殺しの外道志願だし、手段を選ばないクズ野郎だよ」

「開き直んなボケ！　いつや!?　いつから魔女とおる！」

「まだ知り合ったばかりさ……仲良くなるのはこれからだ」

捨て鉢な冗談を言う。事実、黒薔薇と接触したのは、ほんの数時間前のことだ。

夜会に向かう前の『寄り道』——それこそが黒薔薇との交渉だった。

「二度までわたくしを呼び出すとは、不遜な子どもですわ。けれど、わたくしは情の深い魔女ですの。助けを求める者を見殺しにはしません」

黒薔薇がにんまりとする。獲物を前に、舌なめずりしているように見えた。
「ふふ、警戒していますわね。結構なこと。せいぜいお行儀よくすることです。わたくしの機嫌を損なえば、おまえは最後の希望を失うのですから」
「希望……ってことは、助けてくれるおつもりなんだな……条件は何だ？」
「ほほほ！　わかってきたではありませんの！」
見た目だけは少女のように、あどけなく笑う。それから毒蛇のごとき瞳を向け、
「先に、いま助けてあげたぶんの代償を回収してもよいのですけれど――」
「聞くことないわ！　六連！」
「はいな！　間土里、きたりま征！」
いきなり魔力を解放し、六連が転移の式神を呼び出す。やけに静かだと思っていたら、式神を準備していたらしい。黒薔薇の目を盗んで術を編んだのは見事だが、式神が三人を転移させる前に、さらにその下の地面が割れた。
間土里が奈落に落ち込み、代わって半裸の亡者が這い上がってくる。肌は青白く、痩せこけ、腹部ばかりが肥大化した者たち。意外な俊敏さに対応できず、二人はたちまち組みつかれ、大地に倒された。泥まみれの手で口を塞がれ、声も出せなくなる。
黒薔薇はあきれ顔でため息をついた。
「お行儀よくなさいと言った側から……。おまえたちをくびり殺すなど造作もありませんのよ？　わたくし、子どもを殺すことに何のためらいも感じませんの」

漆黒の瞳に殺意が閃く。昴も、六連も、凍りついたように動かなくなった。

ここは黒薔薇が支配する異界。ここでは彼女が神だ。反抗は死を意味する。

雷真は二人をかばい、黒薔薇の前に出た。

「ちゃんと感謝はしてるさ……アリスも助けてくれれば、なおよかったが」

「助けてもらって文句をつけますの？　あの状態では骨が折れそうでしたのよ」

「状態……？　どういうことだ？」

「雷真はん、たぶんですけど」

亡者に邪魔されながら、六連が必死に言った。

「さっき僕らを襲った童子、あれがアリスはんや！」

「何を……言ってるんだ？」

理解できない。見かねたように、昴も口を出す。

「おまえかてガキの頃に見とるぞ。お嬢と婚約した日、俺らとやり合うたやろ」

雷真は記憶を手繰り寄せた。あの日、あの山で見たものと言えば——

「山犬に……式神が憑いた」

「そや、依り代は式符や禁刀に限ったもんやない。獣や古物に降ろすんが変化式。仏像に降ろすんは護法ゆうて、徳の高い和尚さんが使てはる」

「……なら、生きてる人間に憑けるのは」

「鬼神式や。当たり前やが、並みの術者では使われへん」

「でも……おかしいですよ」
六連が不満げに漏らす。
「犬ころでさえ、言うこと聞かすんは大変です。アリスはんほどの人を」
「阿呆、そのための穢土やないか」
六連があっとなった。だが、雷真にはわからない。
「どういう意味だ？　穢土ってのは、何なんだよ！」
「地獄ですわ」
意外にも、解答は黒薔薇から飛んできた。雷真は困惑しつつ、
「地獄は……ここだろ？」
黒薔薇は不愉快そうにそっぽを向いた。
「こことよく似た異界ということです。我がアプラクサスが冥府を統べるように、彼らも穢土とやらを統べるのでしょう。そして、その穢土を地上に拡張し、支配下に置いた……。わたくしの頭上で別の地獄を作るなど、何とも不遜ではありませんの」
ちっ、と舌打ちをする。
「既に地上は瘴気に沈み、魑魅魍魎が跋扈しています。この桁違いの瘴気、アストリッドが見たら歯噛みして悔しがったでしょうねえ……」
亡者の下敷きにされたまま、昴は無力を噛み締めるように言った。
「穢土ができとるなら、もうお館さまを止められるモンは……おらん」

「……それじゃ、アリスはどうなる？　元に戻せるのか？」
「俺かて知らんわ！　術そのものが秘中の秘や！」
昴が知らないことを、雷真が理解できるはずもない。雷真は一縷の望みをかけて黒薔薇を見た。黒薔薇は意地悪な、そして楽しげな薄笑いを浮かべていた。
……なるほど、その情報自体、黒薔薇の手札か。
歯噛みしたくなる。これから行われるのは、絶対的に不利な交渉だった。
「ふ、そんな顔をするものではなくてよ。そもそもの責はおまえにあるのですから」
黒薔薇は意地悪く、雷真をなぶった。
「金、銀、灰薔薇がことごとく自滅した今、紫薔薇と狂王の覇道を止められる者はこの国にはいません。おまえがキングスフォートのような有力議員を失脚させ、王妃失脚に一役買い、金色ババアを痛めつけ、灰薔薇を叩きのめしたからです。おまえがこれまで仕出かしてきたことのすべてが、今日のこの日につながっているのですよ」
血の気が引く。エドマンドが雷真にこだわっていた理由が、心底、腑に落ちた。
雷真の行動の大半が、エドマンドの利になっている！
まして、彼が最大の窮地に陥ったときには、ともにバッキンガムを襲撃した……。
「さ、理解できたのなら、取引を始めましょうか。望みを申してごらんなさい」
「俺を戦えるようにしてくれ」
即座に言う。昴と六連がぎょっとしたように目をむいた。雷真は続けて、

「黒薔薇さまは死霊術と霊薬学のエキスパートなんだろ。その力で、俺を戦わせてくれ。俺がエドマンドと綺羅の婆さまを倒す」
「いいでしょう。代金は心臓の肉一ポンドです」
「……俺の聞き間違いか？　心臓の『肉』って聞こえたんだが」
「そう言ったのです。我がアプラクサスに伝わる秘術、由緒正しき冥府の魔契約ですの。旧くは『魂を奪う』なんて表現したものですが」
　魔術知識に疎い雷真は、やはり意味がわからなかった。黒薔薇は嘆息し、
「鋼の忠誠を強いる偉大な契約魔術ですのよ。まあ、〈呪い〉と言う者もいますけれど。おまえの心臓を一部、わたくしの身の内に置くのです」
「……それ、俺は死ぬよな？」
「死にません。切断するのではなく、異界を経由して導き入れるのです。つながっているのですから、問題なく拍動を続けます。ただし」
「……あんたのものも、同然だ」
「わかりの早い子は好きですよ。そう、わたくしがいつでもつぶせるということ」
　薔薇のように麗しく、悪魔の笑みを浮かべる。
「わたくしの体内はわたくしの支配領域。勝手な解呪などできませんし、魔活性の負担もわたくしの意のまま。その上、わたくしが死ねば術も壊れ、異界も消える仕組みですの。この意味は理解できて？」

「……こっちと、そっちで、俺の心臓が生き別れになるってことだ」
その光景を雷真はイメージした。一ポンドぶんの肉が黒薔薇の体内に残り、雷真の方の心臓が破れる。無論、大量出血を引き起こす。
死なれては困るのだから、雷真は今後、黒薔薇の命も護らなければならなくなる。
「だが、その条件を呑めば、俺は戦えるようになるんだな？」
「おい馬鹿！　させへんぞ！」
亡者の下でもがきながら、昴が怒鳴った。
「今の説明で、何でやる気になっとる！　おまえ一生、結社の言いなりになる気か!?」
「だが、黒薔薇さまに助けてもらわなけりゃ、俺には戦う手段がない」
「信じんな！　甘言を弄する——古今東西、魔女の常套手段やないか！　黒薔薇は金薔薇と並ぶ悪名高き冥府の女王や！　俺かて知っとるわ！」
「じゃあ訊くが、この魔女さん、実際何をやったんだ？」
「それや、それ！　惑わされんなゆうとんのや！」
雷真の足をつかむ。踏ん張った拍子に雷真の胸が裂け、また傷が開いた。
「ぐっ……おお……！」
本気で苦悶する雷真を見て、昴はあわてて手を離す。一方、黒薔薇は『おや』という顔をして、大骸骨の手を降りた。雷真の胸にそっと手を触れ、内部を探る。
「この傷痕……血生臭いと思ったら、まだ生傷ですのね？」

「ああ……硝子さんに処置してもらったんだが……開いちまった……」
「──花柳斎の処置を受けて、こんな無様なありさまですの？」
驚きもあらわに、美しい顔を近付ける。そして、黒薔薇は急に笑い出した。
「おや、まあ！　ほほほ！　おまえの体、既に別の呪いがかかってますわ！」
「呪い……？　どんな……呪いだ？　誰が……かけた？」
「それは、おまえの方が詳しいのではなくて？」
そう言われても、心当たりがない。考えられるのは、この傷をつけた張本人──
「……日輪か？」
黒薔薇はゆったりと首肯した。
「短刀に魔術式を仕込み、刺すことで感染させたのでしょう。様式は違えど、効能は我がアプラクサスにもなじみ深いものです。何とはなしに読み取れました」
「……教えてくれ」
「ひとことで言えば、〈停滞〉です。この傷口は決して癒えません。花柳斎の精瑠でさえ、定着できずにはがれ落ちるでしょう」
「お嬢……そこまで念入りにやっとったんか……！」
昴がうめく。六連も地べたに鼻を押しつけ、すまなそうに言った。
「ほんまに……雷真はんを殺す気ィで……！」
「いや……そうじゃない……！」

雷真の声が上ずった。昴たちとはまったく別の衝撃を受けている。
黒薔薇は『我がアプラクサスになじみ深い』と言ったのだ。
「この呪い……死ぬ方向にも停滞するんじゃ……？　レーテの水みたいに！」
黒薔薇はにやりとして、細いあごを引いた。
「存外、お利口ですわね。その通り、〈恒常性定律〉と呼ばれる魔術の系統は、よくも悪くも変化を嫌います。わたくしの肉体がそうであるようにね」
それが黒薔薇の若さの秘密らしい。
「生かさず殺さずの拷問ですけれど、結果的に、その呪いはおまえを永らえさせたことになります。現におまえは花柳斎の手術にも耐え、死なずに生き延びている」
あのとき、仮に日輪が味方してくれても、綺羅には勝てなかった。多分、逃げることすら叶わなかった。だが、雷真は殺されなかった。それは、綺羅が深追いしなかったからだ。なぜ深追いしなかったかと言えば、綺羅がこう考えたからだろう。
雷真はもう、放っておいても死ぬだろう、と。
『姫君がどんな気持ちで君を刺したか、足りない頭でよく考えて御覧なさい』
先ほど聞いた雲雀の言葉が、別の意味をともなって甦る。
日輪があんなことをしたのはおまえのせいだぞと、非難されたのだと思った。見切りをつけられて当然だと。刺されても当然なのだと。しかし、違った。
師はその言葉通り、日輪の真意を考えてみろ、と言ってくれたのだ。

(俺は本当に……どこまで……馬鹿野郎なんだ……!)

日輪の想いに気付かないで——わかってやれないで。

疑って。戸惑って。恨みがましくも思って。

日輪はきっと、雷真に恨まれるとわかっていて、刃を突き立てた。

彼女は一体どんな気持ちで、雷真に別れを切り出したのだろう?

あたりを漂う噴煙のように、自己嫌悪が胸を満たす。だが、己に失望しきった後では、驚くほど晴れやかな気分になっていた。

思い込みの憑依は落ちた。それは同時に、極めて重大な気付きをもたらす。

(俺は一体、『本当のこと』をどれだけ知ってる?)

あまりに深い心の傷が、冷静な思考を奪っていた。傷を受けた直後は、精神を守るために必要なことでもある。だが、いつまでも妄執に囚われてはいないか?

雷真の変化は黒薔薇にも伝わったようだ。面白がるように雷真を見る。

「顔つきが変わりましたわね。自暴自棄とは違うようですけれど」

「……ヤケを起こす理由がない。ありがとう、黒薔薇さま。今の今まで、俺はあんたを出し抜いて、どうにか丸め込む手はないかと考えていた」

「愚かなこと。できはしません」

「俺もそう思う。今日、俺は本当に何もできなかった。日輪に、シャルに、アンリに、お師匠さまに、何もしてやれなかった。そして今、どうやら馬鹿王が大暴れしてるってとき

に、何もできずに死にかけている。その失点を取り返すチャンスを、あんたが与えてくれるんだな。そんな人を騙そうなんざ、愚の骨頂だった」

「アカンですよ雷真はん！　そのひとは魔女やで！」

六連が叫ぶ。だが、雷真は断固として、

「俺は、黒薔薇に従う」

黒薔薇は満足げにうなずき、念を押すように訊いた。

「健気な少女が救ってくれた命を、わたくしに捧げると申すのですね？」

雷真は目を閉じ、過去を振り返った。

エドマンドとともにバッキンガムを襲ったとき、二度とこんなことはするかと思った。

結社に利用されるのは二度とごめんだと、心から思った。

だが、ロンドン行きの列車の中で、日輪はこう言ってくれたのだ。

『ともに、この手を血で染めとうございます』

今こそ、その覚悟に殉じたい。たとえ、この手を汚すことになろうとも——

「ああ」

一片の迷いもなく、雷真は首肯した。

「黒薔薇の魔女に、赤羽雷真の心臓を預ける！」

Chapter 6 天の玉座に挑む者

1

それは、冬の初めの山の中――

年の瀬も迫った、ある日。日輪（ひのわ）は衝撃的な手紙を受け取った。
差出人は赤羽雷真（あかばねらいしん）。ごくたまにしかくれない彼の便りを、日輪は日々楽しみにしていた。
だが、この文に書かれていたのは、日輪を奈落に突き落とすような内容だった。
『ずっと言い出せなかったが、家を勘当された。ついては婚約も破談にして欲しい』
手が震える。これは真実なのだろうか。事実を確かめかったが、祖母に打ち明ける勇気はない。本当に、本当のことになってしまうかもしれないから。
誰（だれ）にも相談できず、部屋に引きこもってめそめそやっていると、重職の陰陽師（おんみょうじ）が廊下を通りかかった。日輪はすがるような思いで障子を開き、
「弓削（ゆげ）！　うちな、東京……行きたい！」
恥も外聞もなく訴える。弓削は目を丸くして、なだめるように言った。

「へえ、そらまた、ずいぶん急なお話ですけど……。いつ頃です？」
「……今すぐ」
うつむいて、目を閉じる。叱られると思った。ふもとの街を歩くだけでも、警護の者が必要になる。年の瀬に関東まで行くなど、周囲にはいい迷惑だ。
弓削は天井を見上げ、何やら計算を働かせるような間を取ってから、
「まあ、ええんとちゃいますかね？」
「えっ」
「お館さまに訊いてみますわ」
そして後日、日輪は本当に、東京行きの汽車に乗っていた。
綺羅は珍しく日輪の外出を――それも遠出を――理由も訊かずに許してくれた。普段は鈴なりの護衛も弓削一人だけで、これまた珍しいことだった。
どうして許されたのか、気にかかる。だが、訊けば魔法が解けてしまうような気もして、たずねることができない。
何はともあれ、東京を目指す。その日は浜松で宿を取り、翌日昼過ぎに東京に到着。無計画な街並みには閉口したが、弓削も日輪も陰陽師ゆえ、道に迷うことはなく、夕刻には雲雀の道場にたどり着いた。
あいにく、主は留守だった。日輪は絶望したが、弓削が「待ちましょう」と言うので、近くの洋食屋で夕食をとりつつ、帰りを待つことにした。

気もそぞろで通りを見張ることしばし、目の前を雷真が駆け抜けた。
長旅から戻ったのか、大きな風呂敷包みを抱えている。日輪はあわてて間土里を呼び出し、転移で雷真の前に回り込んだ。
もちろん、と言うか何と言うか、雷真は飛び上がって驚いた。
「ひっ、日輪!? おま……どうして……!? ここ、東京だぞ?」
「ら、ら、雷真さま! うち――わたくしに至らぬ点があるのでしたら、どうかっ」
「え!? い、い、いや、落ち着け!」
そう言う雷真もあわてている。少年と少女がいっぱいいっぱいになっていると、弓削が笑いながら店を出てきた。
「日輪さま、まずはご挨拶や」
お手本を示すように、雷真に向かって腰を折る。
「お久しゅうございます、雷真さん。いざなぎ一門、丑の弓削でございます」
「えと……ど……ドーモ」
「やあ、これはこれは、いざなぎさまの!」
すらりとした青年が、雷真の後ろから追いついてくる。たぶん、この青年が剣術の先生なのだろう。雷真からの手紙にも書かれていた。
弓削はやはり丁寧に、青年に向かってお辞儀をした。
「急に押しかけまして、すんまへん。どこぞ、お出かけのご予定でしたか?」

「——ああ、いえいえ。どうぞ寄ってってください。華族さまをお招きするには、だいぶむさくるしいところですがね」

そうして案内された道場は、確かにあばら家だった。こんな狭いところで稽古ができるのかと不安になるような道場と、二部屋しかない居住部分で構成されている。

だが、どことなく古刹を思わせる風情があり、不快には感じなかった。ここで雷真が寝起きしているのかと思うと、むしろ胸が高鳴ったほどだ。

居間に上げてもらったところで、弓削が菓子の包みを押し出した。

「つまらないものですけど、どうぞお納めください」

手土産。いつの間に用意したのだろう。まったく頭になかったので、日輪は自分が恥ずかしくなった。我ながらひどい世間知らずだ。

大人たちはそのまま居間に残り、日輪と雷真は道場の方に落ち着いた。

底冷えのする板の間に、雷真が火鉢を引っ張ってきて、手早く火を起こす。

「久しぶり……だな」

「はい……」

「いつぶり……かな」

「二年……です」

会話が弾むはずもない。しばらく沈黙が続き、火鉢がぬくみを持ち始める頃、雷真の方から「手紙のことだよな?」と切り出した。

日輪はうなずく。また悲しい気持ちが込み上げてきて、泣きそうになった。

「手紙でも書いたけどさ、俺、ここに居候してるんだ。もうだいぶ前から赤羽の人間じゃない。だから、俺とおまえが婚約っつーのもおかしな話で」

「でも！　雷真さまのお体に流れる血は、まぎれもなく赤羽一門の血です！」

「そうだが……俺、傀儡の才は全然ないぜ？　俺と結婚してもしょうがねえよ」

かっと血がのぼった。どうして伝わらないのだろう？　傀儡の才能なんて、日輪はどうでもいい。雷真が自分を悪く言うのも嫌だ。こうして会えて、日輪はとても嬉しかったのに、雷真が困っているらしいことも、少女の純真を傷つけた。

ひどく不安になったことや、必死に勇気を出したことや、悲しかったことや、今感じているいたたまれなさ――そうしたもろもろの感情が爆発し、日輪は立ち上がった。

「……嫌です！」

「ひ、日輪？　急に、どうしたんだよ？」

「日輪は、嫌です！」

叩きつけるように叫んで、道場を飛び出す。

追ってくる気配を感じたが、日輪は飛翔も転移もできる。いともたやすく雷真をまき、どこだかわからない神社の境内に降り立った。

侵入するのは不作法だと思ったが、お参りしている精神の余裕もない。境内のすみっこに身を潜め、膝を抱えてすすり泣いた。

どうして自分はこうなのだろう。情けなくて、もどかしくて、嫌になる。
せっかく東京まできて、雷真に会えたのに、自らすべてを台無しにしてしまった。
暗闇でぐずぐずやっていると、どこからか弓削の声がした。
「あきまへんよ、日輪さま。ご挨拶もせんとおいとまなんて」
足もとに間土里が生じ、するすると弓削が転移してくる。
日輪が顔を上げると、弓削は「はははぁ！」と笑い出した。
「天下無双のいざなぎ流、土門のおひーさんが、まぁたそんな泣かはって！」
「だって……っ」
「男女のことは、そらもう、思うようには行きまへん。お館さまかて――」
途中でやめて、かぶりを降る。それから、秘密めかしてこう言った。
「わてが思いますに、日輪さまも、赤羽の坊ちゃんも、相手がよぉ見えてへん。すれ違う必要ないとこですれ違てはる」
弓削は袂から手鏡を取り出し、日輪に持たせて、印を結んだ。
「簾我他、出でま征」
手鏡に式神を降ろす。鏡面に魔性が宿り、雷真の姿が映し出された。
――のぞき見だ。日輪は驚いて弓削を見たが、弓削は人差し指を口に当て、
「おいとまする前に仕込んどきましてん。内緒ですよ？」
いけないことだと思ったが、日輪は見てみたい自分を抑えきれなかった。

日輪を見失い、雷真が道場に戻ってくる。のっそり入ってくるのを、雲雀が迎えた。
日輪は鏡に魔力を送り、あちらの音声を拾おうとした。しだいにチューニングが合い、あちらの会話が聞こえてくる。
『戻りましたか、雷真。もう遅いですし、里帰りは明日になさい』
『ああ……そうだな、そうする』
『日輪さまのことなら、弓削さんが追って行かれましたよ。心配は要りません』
『……わかってるよ。つーか、日輪は俺よかよっぽど強え』
雷真は沈んでいるように見えた。怒ったのだろうか、と日輪は不安になる。
雲雀は『にへら』と顔をゆるめ、茶化すように言った。
『にしても、モテますね～。形式だけの婚約と聞いてましたが、お姫さまは君にぞっこんじゃないですか。どうやってたらし込んだんです？』
『たら……人聞き悪いな！　ただちょっと、ガキの頃にさ……』
『あー、悪霊の憑依した山犬を打ち払ったとかいう』
『そうだよ。何か、そのことを義理に思ってるらしくて……』
『私のおかげじゃないですか』
『そうだよ！』
『あんなに可愛らしいお姫さまの、どこが気に入らないんです？』
日輪の鼓動が速くなる。逃げ出したいと思ったが、その先はどうしても知りたい。

勇気を出して鏡を見つめていると、雷真はぶすっとした顔でつぶやいた。
『……気に入らないとかじゃ、ねえ。ただちょっと……まぶしすぎるんだよな。俺みてーな庶民丸出しのみそっかすとさ、合うわけねーんだよ』
その言葉は、華族の姫の心を、いたく傷つけた。
奇しくも今回の旅行が教えてくれたことだ。切符の買い方、使い方、客車でのふるまい、料亭ではない飯屋でのふるまい、手土産のこと——その一切を日輪は知らなかった。普通の人間として暮らして行く知恵が、本当にない。
常識もなく、一人では何もできない、日輪のような娘は、確かに雷真に合わない……。
雲雀は意味ありげに笑って、なぜか声を高くして、こう言った。
『いいことを教えてあげましょうか！　相手のことを好いていなかったら、そんなふうには考えません。相手を自分より好いているから、卑屈になるんです』
雷真が目を見張る。日輪もまた、鏡の前で同じ表情をしていた。
『つまりですね、君は本当は、日輪さまのことを——』
『ちょ、やめ！　俺の気持ちとかじゃなく！　もっと真面目な話をしてんの！』
『大真面目ですよ。当人の気持ちが一番大事なんですから。素直になんなさい』
『もうやめろーー！』
しばし、日輪は立ち尽くした。
顔がかっかと火照り、真冬のからっ風が涼しく思える。

今のは、つまり……そういうこと、なのだろうか？
（……雷真さまも、卑屈になったり、しはるんや）
自分をつまらない人間だと考えている。だから、あんな手紙を書いて寄越した。
ほんの少し彼のことがわかって、気付けばまた、彼を好きになっていた。
弓削が簾我他の憑依を解き、そっと日輪の手から取り上げた。
「ほな、帰りましょか。今日は、横浜あたりに旅籠借ります」
「……うん。なぁ、弓削」
「はい」
「ありがとぉ」
「もったいない」
弓削は畏まり、美しい所作で一礼した。
日輪は弓削に護られ、幸せな気分で帰路につく。

その夜、赤羽一門を襲う悲劇のことなど、考えもしなかった。

2

「市街に出るな！　この視界で捜索など不可能だ！」

「だけど、まだ友達が外に——はぐれたままなんです！」
「遭難者を増やすんじゃない！　協会の邪魔をしたいのか！」
そんな怒号が聞こえてきて、シャルは意識を取り戻した。
魔力切れで、ひどく眠い。それでも無理やりまぶたを上げると、既に闘技場ではなく、天井の高いホールにいた。
どうやら、ラザフォードの転移魔術は成功したらしい。
「ここは……礼拝堂？」
「気付いたか、シャル。魔術師協会の拠点だそうだ」
シグムントの小さな頭が、にゅっと視界に突き出される。
シャルは身を起こし、あたりを見回した。礼拝堂に数百人の人々がひしめき、不安げに身を寄せ合っている。どういうわけか、人数は半減していた。
「ほかのみんなはどこ？　夜々たちは無事？　それに、フレイは……？」
最後の瞬間は見えなかった。だが、ロキが必死に名を呼んでいたのを覚えている。
シグムントは首を左右に振った。
「ここにいない者は途中で『落として』しまったようだ。高所で放り出されたかも知れないし、生き延びた者も瘴気の中だ。どのみち、無事には済むまい」
「……そう。なら、探しに行かなくちゃね」
「下策だ。魔力の尽きた魔術師など、足手まといにしかならん」

「だからって寝てられないわ！　高貴なる者の義務よ！　それに――」
　綺羅の脅威を思い出し、ぞくりと背筋が震えた。
「ヒノワを……助けに行かなきゃ」
「日輪を？　彼女の居場所がわかるのか？」
「……わからない。だけど、何をしようとしているのかは、わかる」
　シャルは頭を抱え、己の髪を握りしめた。
「ああ……私、どうしてもっと早く気付かなかったのかしら……！　私とヒノワが約束したことよ――ううん、私と約束する前から、ヒノワはライシンに約束してた……ヒノワは魔女の言いなりになっても、約束を果たそうとしてたのに……！」
「落ち着け。いずれにせよ、今夜の君にできることはない」
「だけど、行かなきゃ！　ヒノワも、フレイも、友達なんだもの！」
　そのとき、虚空に青白い光が飛び散った。
　ラザフォードを先頭に、多数の人間が次々に転移してくる。スペースが不十分だったらしく、並んだ長椅子が荒々しく弾き飛ばされた。
　新たに百人近い人間が到着した。それでもまだ、数が足りない。雪月花もフレイもロキも見当たらない。
　ラザフォードは顔をゆがめ、転がっていた椅子を蹴飛ばした。
驚いてしまう。学院長がそんな八つ当たりをするとは思わなかった。

静まり返った礼拝堂に、アスタロトの声が響いた。
「いいようにやられたのう、エド。見事なまでの完敗じゃ」
意地悪そうに笑う。その笑い方に覚えがあり、シャルはぎくりとした。
先ほども感じた。この人形、容姿といい、表情といい、あの魔女に似すぎている。
ラザフォードは人形に背を向け、独り言のようにつぶやいた。
「パーシヴァルは……立派な教育者だった。私の誇りであり……学院の誇りだった」
人形から笑みが消える。ラザフォードの背中にも暗い影が落ちた。
誰かが嗚咽を漏らす。それを皮切りにして、あちこちですすり泣きが起こった。
パーシヴァル教授の最期は、見事だった。
最期の瞬間まで理性的に、教え子たちを護るため、最善を尽くした。
教授の講義が開講されることは二度とない。それがシャルには実感できない。
だが、途方もない敗北感だけは、現実のものとして存在していた。
ラザフォードが感じているものは、シャルの比ではないだろう。天を仰ぐ偉丈夫の背中は、今日に限って、ひどく小さく見えた。
「私の甘さが……パーシヴァルを死なせた。そして同僚たちを……敵に取られた。狂王が仕掛けてくるとすれば、それは明日であろうと……たかをくくっていた」
「夜会がなくなって困るのはあちらも同じ――はずじゃったからの。けれども、ゲームに誘った者が律儀にゲームをするとは限らぬ。遊戯盤を引っくり返し、テーブルの下から剣

を抜く。宮廷劇ではよくあることよ」
それが謀略というものだ。そして、エドマンドの奇襲は最大の効果を上げた。
「うつけだの狂犬だのといわれておった小僧が、賢者を自認する年寄りどもを残らず出し抜いたわけじゃな。実に、ぬし好みの筋立てよ。さぞ痛快じゃろうの？」
「……ええ。はらわたが煮えるほどに」
ちらりと見えたラザフォードの眼には、壮絶な殺意がたぎっていた。
「王の思い通りにはさせぬ。ああ、まったく思い通りにはさせぬ！　森羅万象、一切合切、人形一体、魔石ひとつにいたるまで、思い通りにはさせぬ！」
「熱くなるな、エドよ」
「お言葉ですが、不可能です。私は紫薔薇を学院から叩き出し、ギュネスを奪還し、王を天の玉座から引きずり下ろす！」
「おやめなさい——などと命じる権利は有しませんが」
ふと、礼拝堂の奥の方から、若々しい声が聞こえた。
皆が一斉に振り向く。奥へと続く廊下の前に、金髪の美少年が立っていた。
「今は頭を冷やしなさい。他者に救われた命を、己のために捨ててはいけません」
不思議と老成した声で言う。少年はきらびやかな白の法衣姿で、身の丈を超える宝杖を持ち、黒コートの魔術師たちを引き連れていた。
とことこと近付いてきて、ラザフォードを見上げる。

「大きくなりましたね、ラザフォード」
「……貴方は小さくなられましたな、ファザータイム」
時の翁！　この少年が⁉
　絶句する学生たちをよそに、少年はなごやかな調子で続ける。
「イシュタルと仲良くやっているようで何よりです。彼女の言った通り、手ひどくやられましたね。このような再会になるとは、予見を嗜む私としても予想外でした」
「……市民と学生を受け入れてくださったことには、感謝いたします。しかし、私個人のことは、どうか放っておいていただきたい」
「そのように逸った心で、何を為そうと言うのです？」
「私は先王より学院を任された身。無論、学院を取り戻しに参ります」
「そのために、ここを避難所として選んだわけですね？　夜会の観客と学生を我らに託し、自らは学院に取って返すつもりで」
　ラザフォードは答えない。教父は小さく微笑み、一応の説得にかかった。
「市街は瘴気に満たされています。これほどの量、現世で精製したのではないでしょう。異界の門を開け、引き入れていると考えるべきです」
「であれば、閉じてやればよいだけですな」
「頭を冷やせと言ったでしょう？　貴方ほどの魔術師が、ひとたび術を交えて、敵の技量を理解できなかったのですか？」

聞き分けのない子どもを諭すように、ゆっくりと言う。
「瘴気の中では魔力伝導が阻害されます。紫薔薇の魔力奪取を体験したでしょう？　弱い魔術師は敵を利する養分にしかなれず、強い魔術師は異形の怪物に変えられます。犠牲者はどうなりましたか？　ここにいない教授たちは？」
「……おっしゃることはわかりますが、王の野望は断固、阻止しなければなりません」
教父は声をあげて笑い出した。
「手段の不備を突かれたのに、動機の有無で応えましたね？　まるで学生の言い訳です。学院長先生らしくもない」
「……私とて超人ではありません。愚かな、人の子でありますれば」
「愚か者に状況を覆す手立てはありません。智慧と理力が必要です」
「智慧ならば、既に敵のふところに鉄杭を打ち込んであります。そして魔力ならば——盟友が遺してくれたぶんがある」
言いながら、上着の懐から大量の魔石を引っ張り出す。
透明な宝石の内側で、雷電のような火花が散っている。凄まじい魔力の凝集を感じた。
パーシヴァルの死に際に生じた、あの光そのものに見える。
魔術師たちが息をのむ。教父でさえ、感心したように目を見張った。
「さすがの手際ですね。あの一瞬にたくわえていましたか……」
「この上、薔薇にくれてやるほどお人好しではない！」

声を荒らげる。その激昂を恥じるように、ラザフォードは声を落とした。
「……失礼。すべては私の責任であろうに」
ラザフォードは教父に背を向け、礼拝堂内の数百人に言った。
「観客の皆様はもちろん、学生諸君にも謝りたい。そして教授諸君、今さら頼めた義理でもないが、最後の業務命令として頼む。どうか、ここを守ってくれ」
「待ちな、学院長」
とがった声が飛ぶ。負傷者をかきわけ、年かさの女教授が進み出てきた。
医学部副部長バレンタイン。彼女はじろりとラザフォードをにらみつけ、
「あたしらにここの防衛を任せるって？　なら、あんたはどうすんだい？」
「無論、学院を取り戻しに行く。学院を預かる者の責務として」
「よく言うよ。あんたは『個人的理由で』動きたがってるように見えるんだけどね？」
「……そう受け取られても、仕方がない」
「だったら、その業務命令ってやつはお断りだ。市民を護るのは警察の仕事だろ。ガキのお守りは教授の務めだが、学院外でまで面倒見てやる義理はないねえ」
にやっと唇の端をゆがめる。まるで女海賊のような、荒々しい笑みだった。
「知ってるだろうが、あたしとあの爺さんは腐れ縁でね。ほったらかして化けて出られるのは御免だ。あたしは仇討ちの方に参加させてもらう」
「ミズ、それは教授会の総意ということにしませんか？」

別の教授が言う。教授たちが次々に進み出て、ラザフォードを取り囲んだ。
「学生の指導は校舎で行うべきものですからな」
「職場がなければ、食いっぱぐれてしまいますしね」
「機巧学院の研究環境は気に入っています。手放し難い」
講義室で聞くのと大差ない、落ち着いた口ぶり。だが、彼らの胸にラザフォードと同種の激情が燃えていることを、シャルは肌で感じた。
彼らは皆、パーシヴァルの志に殉じようとしている。
学院奪還にかこつけて、王がぶち上げた野心──〈世界帝国〉実現の野望を阻止しようというのだ。
実際に世界大戦が始まってしまえば、戦争で勝利する以外の解決方法がない。だが、今ここで王を倒すことができるなら、世界大戦の勃発そのものを防げる……。
ラザフォードは目を伏せ、噛み締めるように言った。
「諸君らの友愛に感謝する。命が要らないと思う者だけ、ついてきてくれ」
「あの！　私も行きます！」
とっさに声が出る。シグムントがシャルの髪を引っ張って止めようとしたが、シャルは止まらず、ラザフォードの前に進み出た。
「私にもパーシヴァル先生の魔石をください！　足手まといにはなりません！」
「……学生の同行は許可できない」

「外に友達がいるんです！　夜々も、フレイも、オルガも、アリスも、それに――日輪も。」

もう友達ではない、と言われた。だが、シャルはあきらめていない。

日輪はかけがえのない――大好きな――友達だ。彼女が『約束』を果たしに行ったのなら、同じ約束を交わした者として、傍観しているわけにはいかない。

ラザフォードはいい顔をしなかったが、バレンタインが横から言ってくれた。

「連れてってやんな。置いて行くと言えば、勝手に行動しかねないじゃじゃ馬だ」

「……だが、責任問題になる」

「今さらすぎて笑えてくるね。だったらその責任、あたしが背負ってやろうじゃないか。ただし、自動人形のない者、夜会に参加できなかった学生は留守番だ。いいね？」

学生たちから不満の声が上がる。そのくらい、誰もが熱くなっていた。

まるで編入試験のように、教授たちが志願者の選別を始める。

その一部始終を見届けて、教父がラザフォードに笑って言った。

「どうやらもう、説得は無意味のようですね」

「最初から無意味でした」

「意味はありましたよ。敵の脅威を再確認した上で、彼らは決断できたのです」

ラザフォードの眉がぴくりとはねた。

「……初めから、そのおつもりで？」

「もとより貴方が、我らに協力を要請したのでしょう？」
無邪気に微笑み、背後を見やる。黒コートの魔術師たちの後ろに、秘書官アヴリルが不機嫌な顔で立っていた。
「要請通り、こちらの編成は終わっています。貴方の到着を待っていたのです」
「……私の要請は『都市防衛の支援』だったはず。『学院奪還』、まして『王への叛逆』を含めたつもりはありませんが……協会が、じかに動くと？」
「貴方のそんな表情を見られただけでも、やる甲斐があろうというもの」
くすりと笑う。それから、黒コートの魔術師たちと意味ありげな視線をかわした。
「つい先刻、私は〈最終予見〉を行いました」
「最終――ですな？」
「最終です。決戦に臨む前に悲劇的な結末を語るのは、何とも罪深いこと。外れて欲しい予見でしたが、天の父はもっとも過酷な運命を我らに課されました」
シャルの背筋が凍える。悲劇的な結末。一体、何が起こると言うのだろう？
「ですが、大切なのは未来を知ることではなく、知った上で何をなすかです。我らは善良なる傍観主義をかなぐり捨て、帝王に抗う道を選びました」
「……それほどの、結末なのですな？」
「ええ。特に、貴方にとっては」
言外に含めた意味を、ラザフォードは察したようだ。知性的な瞳の奥に、一瞬、わずか

な動揺が見えた気がした。

だが、そのことには触れず、ラザフォードは普段通りの調子で言う。

「心強く思います。ではまず、私の考えを聞いてください」

そうして、作戦会議が始まった。シャルもあきらめ顔のシグムントを抱き上げ、教授陣に混じって、ラザフォードの側に寄る。

「作戦は次の二つの戦術目標を目指すべきと考えます。ひとつはこの瘴気を生み出すもと――異界の〈門〉の破壊。いまひとつは狂王の座す〈天空城〉の破壊です」

「妥当な結論です」

教父が小さな頭を上下させた。ラザフォードは続けて、

「〈城〉攻略の指揮は私が執ります。ファザー、貴方がたにはこの、穢れきった瘴気の地を浄化していただきたい。薬学、理学、印章学の知識が必要なはず」

「それも妥当ですが、結界を破壊できたとしても、瘴気がただちに晴れるとは限りません。紫薔薇の力が衰える保証もない。その場合、天の玉座に到達できますか？」

「ご安心を。そのための〈足〉が学院地下にございます。あれならば、少ない魔力で瘴気の中を推進できる。玉座への到達も容易です」

「足……ですか？　それは予見しませんでしたが」

「私自身、このような形で使うことになるとは思いませんでした」

皮肉げに笑う。それから覇気に満ちた声で、一同に言った。

「学院中枢までは強行突破、つまり〈無策〉にて進撃する。強引に〈足〉を確保して待機、結界消滅を待って上昇。狂王と紫薔薇(しばら)を討つ！」

肌寒かった礼拝堂に、戦意という名の熱気が高まった。

状況はよくない。学院を追われ、味方を喪(うしな)い、外は死の臭(にお)いに満ちている。

だが、それでも、ここにはまだ希望がある。戦う意志さえあれば、状況を打開できるのではないか――これまでずっと、そうしてきたように。何と言っても、一九世紀最強の男と、あの灰十字(クルサーダ)の戦士たちが味方なのだ。

というシャルの期待を嘲笑(あざわら)うように、それは起こった。

時を知らせる鐘が、遠く学院の方から響いてくる。

教父が天を見上げ、それからラザフォードを振り向き、静かに言った。

「許してください、ラザフォード。私の予見は、決して覆ることがないのです」

「――どういう意味です。戦いは、まだ始まっては」

「今は安らかにお休みなさい。貴方(あなた)の想(おも)いは、若者たちが引き継ぐでしょう」

そのとき、あまりにも唐突に、ラザフォードが血の塊(かたまり)を吐いた。

どしゃどしゃと重たい音を立て、大量の血が床を汚す。

音が消え、時の流れが引き伸ばされたように感じる。その緩慢な灰色の世界で、〈一九世紀最強〉の男は血の海に沈み――

そして、もう起き上がらなかった。

3

ずいぶん前から、アリスは意識を取り戻していた。が、正気とは言い難い。黒天に流れる霧を、虚ろな眼で眺めている。

(僕は……どうなったんだ……?)

記憶がない。確か……日本軍の、地下牢にいたはずだが。

だが今、アリスは夜会の闘技場にいた。がらんとした客席にエドマンドが座し、数人の近衛を侍らせている。自動人形は朧富士一体のみで、かなり無防備に見えた。

エドマンドをはこちらを見て、泰然として言った。

「戻られましたか、紫薔薇さま。俺のライシンは死ななかったようですね?」

アリスはぼんやりとなりを見る。そこに紫薔薇こと、土門綺羅がいた。

綺羅は肩をすくめ、ため息まじりに応えた。

「ほんに、けったくそ悪い小僧どす。そんでも、さすがに死に体や。今夜はもう、陛下の邪魔にはならしまへんやろ」

「それはどうでしょう。ときに、テンゼンの方は?」

「へえ、うちのもんが制圧に向こぉとります。半刻かからんですやろ」

「——今、『制圧』とおっしゃったので?」

意外そうにまばたきする。

「彼を討つと？　彼のおかげで素敵なペットが手に入ったのでは？」

「それはそれ。あの小僧は、後の禍根となりますさかい」

会話についていけず、アリスは戸惑った。天全──マグナスを制圧する？　誰が？　何のために？　それに、ペットとは一体……？

エドマンドは難しい顔をして、疑わしげに綺羅を見た。

「なるほど、それが姫君のつとめか。ですが、彼女はテンゼンに勝てぬでしょう」

「腐っても羅生の血を引く娘どす。赤羽に紅翼があるように、わてらには玄獄門がおます。赤羽では土門に勝てん──神話の御代から続く因縁や」

確信があるのだろう。綺羅は余裕たっぷりだ。

両家の因縁など知る由もなかったが、アリスの頭には『天敵』という単語が浮かんでいた。紅翼陣は強力だが、先天的に備わる特性だ。能力の性質が遺伝で決まってしまうなら、どこまで行っても不利な相手というのが存在するだろう。

気が進まないのか、気に食わないのか、エドマンドは眉間にしわを刻んだ。

「テンゼンは殺すには惜しい才能だが……。それに、姫君の方も心配です。せっかく俺の花嫁になろうって女を、死なせてはもったいない」

刹那、ばきばきっと床に亀裂が走り、砕けた破片が浮かび上がった。

──朧富士の仕業らしい。エドマンドは一瞥もせず、冷ややかに吐き捨てた。

「勝手に魔術を使うな、七號。この腐れ木偶人形が」
「うぅ……結婚はお考え直しください！　あんな、陛下のことを何も知らぬ女！」
「おまえが知ってるていで語るな」
「でも知ってます！　陛下が毎晩、お祈り――むぎゅっ」
顔面に靴底がめり込む。エドマンドは凄絶な笑みを浮かべ、冷淡に言った。
「本気で解体すぞ、糞が」
ぞっとする気迫が飛ぶ。しかし、朧富士はむしろ勢いづいた。
「上等ですー！　この想いが届かぬなら、いっそ廃材になった方がましですー！」
「はあ？　舐めた口きいてんな。勝手に死ぬ自由が、道具にあると思うのか？」
「えっ♡　それは……私が死んだら悲しいって意味……っ？」
朧富士が機嫌を直す。綺羅は嫌悪の情を隠さず、冷笑を向けた。
「金薔薇さんもつまらん改造したもんや。差し出口どすけど、ほかの道具をお出しになった方がええんとちゃいます？　近衛さんがたも丸腰で、何や無用心に見えますわ」
近衛たちも王の顔をうかがう。エドマンドは取り合わず、笑って応えた。
「ご心配には及びません。ここには貴女がいらっしゃるではありませんか」
「――そうかて、わてがもし」
「俺の部下に瘴気を扱える者はいない。つまり、人形があったところで気休めにすぎない。ならば、貴女を頼みにした方がいい。違いますか？」

理屈ではそうだろう。綺羅を『信頼している』というアピールにもなる。だが、実行にはかなりの胆力が必要だ。綺羅は軽やかに笑い出した。
「ほんに、大したお人やなぁ……。亡のならはった人を悪う言うんはあれですけど、銀薔薇さんよりよっぽど見所がおます。ごっつい悪運をお持ちやし」
「悪運には自信がある。この地上が俺を帝王にしたがってるんだからな。何もかもが俺の都合のいいように動く──なあ、アリス？」
こちらに振る。アリスは顔を背けた。
「おまえはとんだ拾い物だよ。おまえのおかげで、俺はラザフォードに勝てる」
「……僕を人質にしたところで、パパには何の意味もないよ」
萎えそうになる気力を奮い立たせ、アリスは挑発的にエドマンドを見た。
「『こいつの命が惜しかったら』なんてお決まりの台詞を言っているあいだに殺されるさ。今のうちに僕を始末しておいた方がいいんじゃないのかい？」
「そんなふうに言われると余計に確信を抱いちまう。なに、心配せずともあの狸がおまえを見殺しにすることは絶対にない。世間じゃ冷血だ何だと言われているが、あんなにわかりやすく血の熱い男もそういない。そのことがよくわかったよ」
「熱い……パパが？」
「つまりこういうことだ。たかが娘一人のために、数多の国家を手玉に取り、薔薇の師団を敵に回して、神性機巧を求めた。これを熱いと言わずに何と言う？」

一瞬、アリスは呆けた。娘一人のため――とは、アリスのためか？
「馬鹿げてる！」
「そう、馬鹿げているのさ。俺じゃなく、ラザフォードがな」
エドマンドには確信があるらしい。アリスは自分の心が揺れるのを感じた。
一度は考えたことだ。ラザフォードが学院を掌握し、神性機巧開発を推進していたのは、自分のためではないかと。
だが、その考えは否定された――はずだ。父がアリスを切り捨てた、あのときに。
雷真に救われた、あのときに……。
（だけど、あのときパパは……本当は、僕を捨てては……いなくて……）
わからない。疑おうと思えばいくらでも疑えるし、信じたいと思えば、確かに、信じる余地もあるような気がした。
「……やっぱり、馬鹿げてるね。パパの目的がそんなちっぽけなわけがない」
「ちっぽけか。それは意見の相違だな。こんなに身勝手で、エゴ丸出しの、でかい動機もほかにない。まさしく帝王の動機さ。俺といい勝負だ」
エドマンドは愉快そうに肩を揺すった。
「ゆえに、俺は全力でラザフォードを倒すことにした。あいつ以上の脅威は……そう、俺のライシンくらいだからな。おまえを抱え込むのはリスクだが、それに見合う利もある。手放せるわけがない。今はせいぜい丁重にもてなす――」

そこで、不意に口をつぐむ。
それから、じっとアリスを見下ろし、何やらひとり言をつぶやき始めた。
「そうか……そうだな。俺は確信している。だから絶対、おまえを手にかけない。そうとも……大事な大事な人質を……簡単には壊せないよなあ!?」
ははは、と大声で笑い出す。風向きが変わったのを感じ、アリスは戦慄した。
エドマンドが立ち上がり、融けて斜面になった階段を降りてくる。
「なるほど……一見は危ういが、危険にさらせばさらすほど、そこは死角に近付いていく。黒薔薇さまと何をこそこそやっていたかと思えば、そういうカラクリがあったのか……。いやはや、何年越しの付き合いなんだか……」
不安げな近衛、怪訝そうな綺羅の前を素通りし、ついにアリスの眼前に立つ。
こちらの狼狽を見透かし、エドマンドは嫌みったらしく笑った。
「どうした、おまえは頭のデキが自慢だったはずだろ？　俺が何を言っているのか、まだわからないのか？」
「……意味不明だね」
「だからさ。おまえこそが真実、ラザフォードの急所だったということだよ」
彼の手が胸に伸びてくる。アリスは思わず叫んだ。
「僕に触るな！　自害するよ？」
警告を無視して、エドマンドはブラウスを引き裂く。あまつさえ、下着にまで手をかけ

た。抵抗したかったが、体が縛られたように重く、身動きが取れない。
気がつけば、朧富士の〈天手力〉がアリスの動きを封じていた。重力がゆがみ、骨格が荷重に軋んで、呼吸が苦しくなる。
胸を隠すこともできない。アリスは力の入らない舌で、かろうじて毒づいた。
「下衆……め……！」
「俺は王だよ。こい、イカロス」
呼びかける。綺羅が気を利かせ、瘴気の霧をやわらげた。本当に遠方に配置していたらしく、数十秒もかかって、蒼い装甲の自動人形が床をすり抜けてきた。
そして、そのまま、人形の貫き手がアリスの胸にめり込んだ。
内部で心臓を握られた、と思ったときにはもう、血管ごと引きずり出されている。
胸骨が押し広げられ、心臓が胸から出る。天手力と空間歪曲が不協和し、激しいスパークが飛び散った。言語に絶する痛み。叫ぶことすらままならない。
頭が朦朧とする。心臓を抜かれた部分は空洞になり、胸を裂かれたはずなのに、一滴の血も流れなかった。……どうやら、空間歪曲で安全に取り出したらしい。
エドマンドは脈打つ心臓を掲げ、にやりとした。
「ほう、ひとつしかない……相互契約で交換してやがるのか？　あるいは俺の読みが外れているか……さて、お立会い。世紀のショーの始まりだ！」
無造作にナイフを取り出し、心臓に突き立てる。

刃はやすやすと心筋を突き破った。大量の血があふれ、アリスの顔を汚す。
その瞬間、アリスが感じた痛みは、せいぜい殴られた程度のものだった。
――心臓が破れたにしては、軽すぎる。これは『刺された』痛みではない。
目の前に、ゆらゆらと幻影が見える。
ここではないどこかの光景……だ。それは薄暗い礼拝堂であり、周囲には大勢の魔術師たちがいる。灰十字(クルサーダ)の戦士たち、教授たち――シャルの姿もある。彼らの視線を集めているのは、血をまき散らして倒れ伏す、立派な体躯(たいく)の成人男性――
エドワード・ラザフォード。
「ははは……やっちまったなあ、ラザフォード！」
返り血を浴びたエドマンドが、天に向かって哄笑(こうしょう)をあげた。
「誤算はどこにあった？　いつ計画が狂った？　だから予知なんてのはあてにならない。あんたや教父ほどの直感があってなお、運命は思い通りにならないんだ！」
恍惚(こうこつ)とする。アリスが呆(ほう)けているのに気付き、エドマンドはなぶるように言った。
「その様子じゃ、マジで知らなかったらしいな？」
わかりかけている。だが、心が理解を拒む。
今朝方、パーシヴァルに聴診器を当てられたことを思い出す。あれは一体、誰(だれ)の、何を診(み)て――いや、考えるな。もう何も考えるな！
アリスは目をそらそうとしたが、血まみれの手にあごをつかまれ、適(かな)わない。

　湯気の立つ心臓をアリスの眼前に突き出し、エドマンドはさらになぶった。
「何とも泣かせる話だな？　娘と父は常につながっていた──異国にあるときも、敵地にあるときもだ。ひねくれ娘は何も知らず、不器用な父は何も語らない。父は最後まで非情を演じ、真意を知られることなく死んでいく──どうした？　ガッカリするほど血の巡りが悪いな？　これはおまえの心臓じゃないって言ってるんだぜ？」
　考えたくもなかったが、アリスにはその知識がある。
　ヴェニスの強欲な商人も用いたという、伝説的な魔術契約──
「そうとも！　これは一九世紀最強の男、エドワード・ラザフォードの心臓だ！」
　破れた心臓を足もとに叩きつけ、ブーツで踏み潰す。心臓がただの肉塊になり、魔術が壊れる寸前に、アリスの胸部に本来の心臓が戻った。
　破術の衝撃に翻弄されながら、アリスは己の愚かさを呪う。
　どうして、もっと早く気付かなかったのだろう？
　気付いていれば、父子の関係は、今とは違うものになったはずだ。
　アリスとて、きっと、もっと、素直になれた。
　過去、父は幾度もアリスを危険にさらした。見捨てられたと思ったこともある。だが、本当に捨てられるはずはなかったのだ。娘に己の心臓を預けていたのだから。
　そしてアリスの心臓は、この世で一番安全な場所──最強の魔術師の胸にあった。
　その表情の冷たさとは裏腹に、父はいつでも、アリスを守ってくれていた。

落涙するアリスの前で、エドマンドが天に吠えた。

「奪ったぞ！　この日、この夜、この瞬間、俺が魔術世界の帝王だ！」

4

「夜々姉さま！　うしろ！」

小紫の警告を受け、夜々は振り向くことなく跳躍した。

直前まで夜々がいた場所に、粘着質の影がぼとりと落ちる。その途端、しゅうしゅうと音を立てて石畳が溶け始めた。どうやらこの影、強酸性の怪物らしい。

あたりは百鬼夜行といった風情で、獣のようなもの、古物のようなもの、さまざまな影が徘徊している。二本足のものが走ってきても、人間とは限らない。足の上に胴体がなく、巨大な顔が直接のっていたときは、夜々も思わず悲鳴をあげた。

いざなぎ流の式神に似ている。が、よりおぞましく、より明瞭な姿を持つ魔物たち。多くは打撃が通らない。この手の怪物には、どうしても苦手意識がある。

「うう、気味が悪いですっ……小紫、そっちは大丈夫ですか？」

逃げ回りながら、妹の様子をうかがう。小紫は目を閉じ、動きを止めていた。

「小紫？　何をやって――あぶない！」

大きな車輪のような怪物が、小紫めがけて転がってくる。怪物は小紫を素通りし、夜々

に向かってきた。夜々が身構えるのを無視して、さらに通り過ぎる。
そしてそのまま、戻ってはこなかった。
のみならず、ほかの怪物たちまで、こちらに興味を失くしたように離れて行った。
「……つかんだ！」
小紫がぎゅっと両手のこぶしを握る。夜々はぽかんとした。
「え？　どういうことですか？　今のは、小紫のしわざ？」
「日輪さんと戦ってると、どうしてかこっちの居場所がバレちゃうでしょ？　だけどバレないときもあって……何でかなって、ずっと考えてたの」
「じゃあ、そのコツ？　を、つかんだってことですか？」
「うん！　いつまでも雷真頼みじゃ、いざってとき困るもんね！」
久方ぶりで、ほがらかな顔をする。夜々は素直に感心した。
「すごいです……独力で新しい術を身につけるなんて」
「えへへ。自動人形っていうのは、『成長できる』ものなんだよ！」
誰の言葉なのだろう。そう言った小紫は、少し大人びて見えた。
そのとき、ひゅうと凍てつく風が吹き込んで、周囲の瘴気を払った。切り開かれた闇の中から、姉妹の長姉、いろりが姿を見せる。
「夜々！　小紫！　おまえたち、無事なのだなっ？」
妹たちを案じていたと見え、いろりはとっくに涙目だった。夜々は笑って、

「小紫がいたから大丈夫です。迷子の姉さまより、よっぽど頼りになりました」
「うっ、すまぬ……だが、合流できてよかった」
ひとまず、雪月花がそろった。だが、孤立無援の状況は変わらない。
三姉妹は背中を預け合い、瘴気が立ち込める路地を眺めた。
ここが都市のどこなのか、よくわからない。周囲に味方の気配はなく、瘴気の化け物が無数に蠢いているだけだ。
「うむ、どうやら……ほかの方々とは違う場所に出てしまったらしいな。転移術が破られたとき、我らは巨人に近付きすぎていた」
巨人ギュネスの手が、すぐそこに迫っていた。結果、三姉妹の転移は不完全に発動したと考えられる。海に放り出されなかっただけマシだが……。
「よくない状況だな。あの怪物がエドマンド王の手に落ちていたとは」
「昨日の今日で、先生方が見張っていたはずですけど……いつ奪取したんでしょう？」
「……おそらく、闘技場で日本軍が騒ぎを起こしたときだろう。あのような耳目を集めるやり方、なぜ強行したのかと思ったが……そう考えれば腑に落ちる」
「ねえ！　これからどうするのっ？」
術を維持しながら、小紫が訊く。いろりは頬に手を当て、困り顔で思案した。
「ともかく、まずは雷真殿をお助けしなければなるまい」
「それは夜々も賛成ですけど、雷真がどこにいるのか、わかりませんよ？」

「うむ……こんなとき、雷真殿がここにいらしてくだされば……」
のっけからつまずく。だが、いろりを笑うことはできない。雷真がここにいてくれたらと思ったのは、夜々も同じだ。
妹たちの口が重くなる。一方、言い出したいろりは、くすっと笑った。
「む？　姉さまったら、こんなときに何ですか？　思い出し笑い？」
「いや……可笑しなものだと思ってな。我ら雪月花、自分たちを究極の自動人形と信じて疑わなかった。日本にいた頃は、人形使いが何するものぞと侮っていた」
「確かに……そうでしたね」
「それがいつしか、人形使いの雷真殿を頼みに思うようになっている」
「姉さまが頼りにしてるのはー、人形使いじゃなくて雷真だよね？」
小紫が茶化す。いろりはわかりやすくあわてた。
「お愚か者！　そこが主旨ではない！」
「じゃー、魔術師なら誰でもいいの？」
突っ込んで訊く。いろりはたじろぎながら、取り繕うように言った。
「無論、シャルロット殿でも、ロキ殿でも——そうか、お味方と合流しよう！」
妹たちもはっとする。雷真を救出するつもりなら、それが一番の近道だ。
そして雷真の方も、味方に合流しようとするだろう。
「小紫、味方の位置はわからぬか？」

「うん……わからない。魔力感知も駄目だった」
「……やはりな。これだけ瘴気が濃いと、魔術師の知覚もあてにはならぬだろう」
誰かが探しにきてくれる可能性は小さく、下手に動くと迷子になる公算が大きい。
夜々は考える。雷真ならこんなとき、どうするだろう？
雷真は無思慮で直感的に思えるが、意外と理詰めで行動するのだ。だから――
「あっ、学院長先生の行き先を推理してみるのはどうでしょう？　術の仕組みはわかりませんけど、転移が直線的に進むと仮定すると、方角は合ってるはずですよね？」
いろりの表情が明るくなった。
「冴えているぞ、夜々！」
「あ、姉さまこっち！　標識があるよ！　通りの名前がわかりそう！」
小紫が示す方に、そろって駆け出す。記された番地から現在地が割り出せた。
「ふむ……都市中心部とは逆だな。ラザフォード殿は郊外に避難されたのか？」
「千人もの人を受け入れてくれそうな場所なんて、あったでしょうか？」
「あ！　私、わかるかも！」
小紫が背伸びして言った。
「夜々姉さまが眠ってたとき、雷真と電話を借りに行ったの！　魔術師協会の建物！」
「――その場所なら、夜々もわかります。今朝方、雷真が行きましたから！」
「待て待て。そのような場所なら、当然、敵も把握しているはず。途中で遭遇する危険も

あるし、最悪の場合、既に陥落してるやも知れぬ」
「そのときは蹴散らすまでです。『戦うな』なんて言っても無駄ですからねっ！」
先回りして言う。いろりは寂しげに微笑み、観念したようにうなずいた。
「……もう、言わぬよ」
そっと夜々の前髪を払い、ひたいを撫でる。夜々は驚き、されるがままになった。
「天全殿と戦うにせよ、綺羅殿と戦うにせよ、おまえを欠いて勝てはせぬ。おまえは雷真殿の戦いに、なくてはならぬ存在なのだ」
姉の言葉も眼差しも、いつになく優しい。——いや、夜々が見ないふりをしてきただけで、怒っていないときのいろりは、ずっとこうだった気がする。
「だから、約束だ。この先何があろうと、おまえは雷真殿の身を案じてはならぬ」
「え？　どうしてですか？」
意外なことを言われる。雷真を案じるな、とはどういう意味だろう？
夜々が望んだような、明確な答えを、いろりは返さなかった。
その代わり、いたわりを込めて、優しく言った。
「案じるのはやめ、信じよ。それが雷真殿の力になり、一番の助けになる」
「よく……わかりませんけど」
「わからずともよいのだ。その代わり、私もおまえを信じる。もうおまえの戦いを止めはせぬ。……どうだ？　約束できるか？」

「――はい」
うなずく。煙たいはずの姉に対して、とても素直な気持ちになっている。
いろりも同じ気持ちなのか、小紫と夜々を相互に見て、穏やかに言った。
「夜々、おまえは人間の娘に生まれたかっただろう。小紫、おまえはもっと力が欲しいと願っていただろう。だが私は、雪月花に生まれたことを、とても幸せに思っていたのだ。この身体も、力も、主のお側に仕えられることも、嬉しかった。そして何より」
遠い昔を懐かしむような目で、妹たちを見つめる。
「おまえたちの〈姉〉でいられることがな」
夜々の鼻の奥に、懐かしい香りが甦った。それは硝子の煙草の匂いであり、真夏の庭木の緑の匂いであり、黄昏どきの煮炊きの匂いであり、日なたの匂いだった。
想いがあふれて、おぼれそうになる。何も言えずに立ち尽くす夜々を、小紫が小さな体でちょんと押した。
「夜々姉さまもー、ショージキに言っといた方がいいと思うよ?」
「こ……小紫がお先にどうぞっ」
「先に元気いっぱいに言われちゃったら、言いにくくなっちゃうんじゃない?」
「それも……そうですね……」
顔が赤くなるのを自覚する。夜々は目をそらし、ぼそぼそと言った。
「夜々も、姉さまの妹で、よかった……ですよ?」

ちらっと横目で反応を確かめる。いろりの眼が見る間に潤み、透明なしずくが光るのを、夜々は気恥ずかしく、そして幸福な気分で見た。
「お小言が減ってくれたら、もっといいです」
「おまえが言わせなければよいのだ！」
微笑み合う。その笑みが消え、闇に向き合う頃には、全員の覚悟が決まっていた。
これから決戦が始まるのだ、という予感がある。
姉妹はもう言葉もなく、瘴気の海の中へ飛び込んで行った。

5

黒いドレスをひるがえし、火垂が動いた。
熱気とともに陽炎が立つ。両手の短剣がうなりを上げ、式神の群れを薙ぎ払う。
火垂が開いた道を、蜜蜂、姫蜘蛛、玉虫が駆け抜ける。実体を持たない式神を、戦隊の刃はたやすく切り裂く。呪符が切断され、次々に散った。
「やるわ、あの傀儡！」
「流石は赤羽天全やな……大式、いけるか!?」
「行くわ！　玉藻媛、きたりま征！」
「奇稲田媛、きたりま征！」

陰陽師たちが数人がかりで儀式を行い、大式神を次々に召喚する。身の丈五メートルにもなろうという威容がずらりと並ぶさまは壮観だ。

大式神一体で、戦隊一体を押し返す。腕力や攻撃能力ではほぼ互角、仮に破壊されたとしても、穢土で瘴気が潤沢な上、儀式に十分な人数がいるので、こちらの攻め手は切れることがない。一騎当千のいざなぎ流は、手錬れがそろえばさらに力を強める。集団戦法は何も赤羽一門の専売特許ではない。

だが、それでも、決定打を与えられていない。戦隊は戦場を縦横無尽に躍動し、動きの鈍い大式神を撹乱していた。

「何や、手ごたえが無ぉなってきたぞ……」

「押してる……はずやけどな」

「踏ん張りぃ！　あちらさんはじき息が切れる！」

陰陽師たちも怪訝そうだ。時折り戦隊に痛撃を加えるのだが、裂傷も骨折もすぐに癒え、戦線に復帰する。結果的に、戦闘は膠着状態となっていた。

その戦線から少し離れた地点、〈愚者の聖堂〉から百メートル以上離れた場所で、日輪は味方の奮闘ぶりを観察していた。

（なんちゅうお人や……！　さすがは雷真さまのお兄さま……！）

マグナスは戦隊の中央にあって、ほとんど立ち位置も変えていない。無防備に見えるが、雷電にしろ火炎にしろ、こちらの攻撃はすべて戦隊に阻まれている。

術者も凄いが、その主に応えられる自動人形も凄い。
たった六体の人形相手に、数十人の陰陽師がてんてこ舞いさせられているのは、滑稽ですらあった。ただし、味方も達人ぞろいゆえ、まだ犠牲者は出ていない。
それにしても、解せない。この穢土にあって、天全は平気で魔術を使っている。一般的な魔術師ならば、瘴気に魔力伝導を阻害されるはずだが。
「……皆、下がりよし！　うちがやる！」
日輪が叫んだ途端、戦闘とは別の緊張が味方に走った。
「──お嬢、もうちょい待ったってください！　俺らだけで、もう少し！」
若い陰陽師が反対するのを、年長者が制する。
「もう日輪さまにお任せする！　あてらは邪魔や。皆、退け！　退け！」
式神をまいて囮とし、一斉に後退する。策を警戒したらしく、マグナスも戦隊を手元に引き戻した。ほどなく戦闘音が途切れ、地下大空洞に静けさが満ちた。
頭上の穴から落ちる月光で、朽ちた宮殿のような〈愚者の聖堂〉が浮かび上がる。
そちらへ歩を進めながら、日輪は得体の知れない恐怖にとらわれる。
敵に臆したのではなく、己の未来が怖かった。
自分が何のためにこんなことをしているのか、一瞬、わからなくなる。
綺羅とエドマンドが為そうとしていることは、恐ろしい。世界のありようを変えてしまうような野望だ。戦火を世界に広げ、巨大な帝国を造り上げようなどと。

その恐ろしさがわかっていて、日輪は二人に従い、天全を討とうとしている。
二人の障害となる者を排除し、神性機巧を手にしようとしている。
これは本当に……正しいことか？
（迷ぉとる場合ちゃう！）
日輪は心でかぶりを振った。いざなぎ流は力こそすべて。まず力を示さねば、誰もついてきてはくれない。綺羅を止めるためには、一門の総意がどうしても必要だ。
それに、天全を倒すことは、日輪自身の望みでもある。
赤羽天全を倒すことは——彼の悲願だから。
だから、日輪も戦う。
捨て石でもいい。ひと当て、ふた当てでもできれば、きっと何かの足しになる。
その気持ちだけを支えにして、日輪は天全と向き合った。
戦隊が武器を構え、凍てつくような殺気を放つ。日輪は無視して、
「赤羽天全さまと、お見受けいたします」
「——人違いだと言っても、信じてはいただけぬのでしょう？」
「はい。陰陽師に嘘は通じません」
「ご自身は愚弟を欺かれたのに」
仮面の下で唇が弧を描く。笑われた！
「ぐ、愚弟とおっしゃいましたね!?　では、やはり貴方が！」

「左様、赤羽天全でございます」

恭しく一礼。ただし、仮面を取る気はないらしく、つけたままだ。

「ですが、その名はとうに捨てました。何ゆえ、このような御無体をされるのです。つい先刻、私は綺羅さまに〈素体〉の代価をお支払いしたはず」

「……ええ、おかげさまで我らは労せず巨人を手に出来ました。ですが、やはり、足りぬのです。貴方のお命、ならびにその傀儡六体、我らが頂戴いたします」

「お断りします。どちらも先約がありますれば」

舞いのように両手を掲げ、日輪は身構えた。

「ならば、力尽くにて」

「お出来になりますか？」

仮面の奥で、紅い双眸が冷たく光る。侮られても文句は言えない。ここが夜会の舞台なら、確かに日輪が負けていた。

だが、ここは闘技場ではなく、瘴気に満ちた〈地獄〉だ。

「天全さまは、〈般若〉をご存知ですか？」

「般若——ですか？　能面の？」

「はい。般若とは本来、仏の智慧をあらわす言葉です。それがなぜ、口を開いた鬼女の面であるか、そのわけをご存知ですか？」

「……いえ、寡聞にて」

「死魂を食らうためです。——このように！」

こーっ、と気管が鳴る。日輪は印を結び、呼吸法で瘴気を吸った。肺で己の血中に溶け込ませ、十分になじんだところで、祭文を唱える。

「百錬刀一下せば何ぞ鬼の奔らざるや。千妖万邪ことごとく奔るべし——急々如律令、式王子、きたりま征！」

「その召喚は、無謀——」

過去に二度、日輪は夜会で式王子を出している。いずれの場合も、式王子の潜在能力を発揮できずに終わった。だが、この召喚は過去のそれとは性質が違う。かつては霊験あらたかな禁刀を用いたが、今は己の肉体を依り代としていた。

「もとより穢土のみで勝てるとは思っておりません！　玄獄門〈言鬼宿〉！」

日輪に式王子が憑依し、ひたいから二本の角が突き出した。

魔力の青白い輝きは失せ、瘴気の黒が全身からあふれる。

綺羅が用いる鬼と同じ原理だが、日輪の体は膨れ上がることもなく、体内に力を凝縮している。式王子を体内に閉じ込め、瘴気と権能のみを己のものとしていた。

かくて、強大な力を持つ式王子が、まるまる日輪の体におさまった。魔力の高まりだけで爆風が生じ、あおられた戦隊が数歩、下がる。

天全はひと目で脅威を見抜いたようだ。紅翼陣の糸をこちらに撃ち出す。弾丸のようなそれを、日輪はつかんで止めた。

糸を伝って黒い炎が走る。瘴気は一瞬で相手の魔力循環系に到達し、本物の糸のように、天全の肉体に食い込んだ。糸を通じて、ごっそり魔力がこちらに渡る。

「マスターを離せ！」

火垂が激昂し、紫電のごとく突っ込んできた――が、遅い。

日輪は見切って半身引き、隙をさらした火垂に掌打を叩き込んだ。

火垂は熱を収束させ、高圧にて防いだようだが、それでもはるか彼方へ飛ばされた。

聖堂の外壁に激突。跳ねて浮いた火垂の体を、蜘蛛の糸がからめ取る。

象ほどもある蜘蛛が三匹、瘴気の糸で火垂の身動きを封じていた。無論、日輪が召喚したものだ。もがく火垂めがけて、片手を払う。それだけで黒炎が腕から噴き出し、あたり一帯を嘗め尽くした。

日輪自身も予想しない高火力。火垂のみならず、戦隊全体が火炎に包まれた。

大爆発が生じる。聖堂の屋根が消え、魔鉱の地面が赤熱した。

陰陽師たちは結界にて身を護ったが、一様に青ざめていた。日輪自身、肝が冷えている。

正直、ここまでとは思わなかった。加減してこれでは、味方も危ない……。

くすぶる黒炎のただ中に、次々と戦隊が出現する。

……転移で逃れていたようだ。やはり簡単には倒せない。それでも、あちらも無傷ではない。戦隊のドレスが焦げ、焼けた肌から血がにじんでいる。

改めて、日輪は相手の技量に脅威を覚えた。

（この穢土にあって、転移のような高等魔術を易々と使う……！）

「……驚きました、姫」

あちらも感心したらしい。意外にも饒舌に、天全が感想を述べた。

「いざなぎさまは一騎当千と聞いておりましたが、穢土の地では一鬼当十万のようですね。よもや、これほどの力をお持ちとは」

「上からおっしゃるのはやめてください。強者の言い分を押し通すため、いざなぎ流は常に最強であらねばならぬのです！」

言葉だけで黒炎が噴き上がり、周囲に式神がわいていく。式王子を宿した日輪は、その権能も自在に扱える。先刻までとは文字通り桁が違う数の式神に包囲され、さしもの戦隊も判断を仰ぐように天全をうかがった。

かつてない強敵を前に、弱気になっている。同じく『かつてない』彼女たちの態度に、日輪は直感した。この瞬間、日輪の力は天全に伍した！

だが、肝心の天全は怯まず、淡々と言葉を続けた。

「御身を依り代とし、武神の荒魂を降ろす――とても正気を保つことなどできますまい。神代の系譜につらなる、土門さまでなければ。つまり、それこそが羅生血」

「――そうです。これは天つ神が持つべき力、人間では倒せません！」

「ふ……般若の面が恐ろしげなのは、『正気を失った』からではありませんか？」

日輪は思わず顔に手を当てる。顔に変化はなかったが、確かめてしまった時点で、相手

の術中にはまった気がした。日輪は屈辱に頬を染め、

「お覚悟召されませ！」

間合いの外から手刀をふるう。ひと薙ぎにて万象を屠る、式王子の一刀万殺。黒々とした炎が敵をのみ込み、同時に大量の式神に変異した。

天全はまたも転移し、闇色の劫火をかわす。

（無駄です！　逃げれば逃げるほど、そちらの息が上がる！）

穢土の瘴気が日輪の知覚を助け、居場所は瞬時に捕捉できる。出現地点に次の火炎を打ち込もうとして、思わず手が止まった。

天全が現れたのは、まったく予測しない場所だった。

火炎の発生源――日輪の目の前！

手首をつかまれ、炸裂寸前の二撃目が引っ込む。日輪は瞠目した。鬼神の腕力を持つ今の日輪に、直接触れてくるとは思わなかった。軽く払った程度でも、人間の体など引き裂いてしまえる。まして日輪は瘴気の火炎を帯びているのに！

「く……っ、力が……抜ける……！」

天全を振りほどくことができず、日輪はもがいた。

鬼神どころか、これでは女の細腕だ。紅翼陣で魔力循環系を乱された？　いや、紅翼陣の糸など、今の日輪なら力任せに引きちぎれる。

たまらず繰り出す掌をかわされ、鮮やかに腕を極められて、大地に膝をついた。

「なぜ……こんなことが……!?」
「お見事な術でしたが、貴女は大切なことをお忘れだ」
「わたくしが……何を忘れていると言うのです！」
「都を追われて以後も、赤羽一門はいざなぎさまに負け通しでした。式神と瘴気の扱いにかけては、ついぞ土門さまに勝ることはなかった」
「……もちろん存じています。それゆえ赤羽は傀儡に走りました。式を捨てて！」
「傀儡に鞍替えしただけでは、いざなぎさまには勝てぬでしょう?」
はっとした。いや、『ぞっとした』と言うべきか。
赤羽一門の瘴気術は、確かに廃れた。だが、廃れ方にも色々ある。
使い手が生まれなくなっただけなら、いい。だが――
果たして、天全は想像した通りのことを言った。
「我ら一門、既に瘴気を破る術を編み出しております」
ずんっと体に重みがかかった。いや、忘れていた体重を思い出したような感じだ。付近の瘴気が急速に薄らいでいき、呼吸が苦しくなってくる。
瘴気が晴れたことで、眼前を飛び交う魔力の燐光に気付く。蛍火のようなそれは、天全と乙女たちを結びつけるように、相互に連絡し、六芒星を描いていた。
「蛍火の……結界……!?」
「七条断幕法陣結界呪、〈断法陣〉でございます」

式神を蹴散らし、戦隊がこちらを向く。全方位から殺気をぶつけられ、日輪は本能的な恐怖を覚えた。
とっさに極楽蝶を呼び出し、天全の鼻先で炸裂させる。
隙を作って転移で離脱――したつもりだったが、転移先に戦隊が先回りしていて、日輪は包囲の外に飛び出すことができなかった。
再度、転移を試みる。が、何度跳躍しても、包囲は崩せない。やむなく式神を殺到させ、戦隊の背後を突こうとしたが、戦隊は躊躇なく背中をさらし、式神の迎撃に回った。代わりに天全が転移してきて、再び日輪の真正面に立つ。
反射的に殴る。魔鉱を砕く鬼の一撃を、天全は受けずにかわし、日輪を翻弄した。
(これが……瘴気を捨てた理由……!?)
当たらない攻撃を繰り返しながら、日輪は悟った。
土門と同じ土俵で張り合っても、赤羽一門は勝てなかった。ならばと新しい技術を取り入れ、同時に瘴気術に対抗する技を編み出す。
式神は召喚のコストがかかる。自動人形に召喚は不要だし、新兵の訓練時間も短く済む。赤羽一門の現実主義、合理主義は、現代機巧文明の考え方に合致している。
(それに比べて、いざなぎ流は古い……!)
掟、伝統、由緒に格式。祭事や食事の作法に至るまで、生活のすべてが様式化されている。一見は厳しく見えても、土門の千年は変化を嫌う勝者の慢心の上にあった。

攻防のたびに瘴気をむしられ、着物をはぎとられるように、式王子の憑依が解けていく。己が融解させた地面にあぶられ、肺が焼けるようだ。自分の炎で火傷を負う段になって、日輪は式王子を解除した。

はあっ、はあっ、と息が乱れる。まだひたいに角が残っているが、鬼神と呼べるだけの力はない。日輪の力が減じたのを見て、天全が戦隊を手元に引き戻した。

日輪は肩で息をしながら、『きっ』と天全をにらみつけた。

「どういうおつもりです！　そちらから包囲を解き、わたくしを結界外に置くなど！」

「先ほどの爆発、獄炎、鬼の拳。いずれも凄まじい威力でした」

「……え？」

「あの威力から御身をお護りください。これより、蜻蛉がお返ししますゆえ」

言葉の意味は理解できなかったが、何が起こるのかは第六感が教えてくれた。

戦隊の一体、蜻蛉だけが前に出て、差し出すように両腕を開く。

「ふっ、婦守磨！」

瞬間的に二四枚、あらかじめ〈身固め〉で仕込んだものが二四枚、計四八枚の婦守磨を立ててなお、その一撃には耐えられなかった。

暴威が日輪をのみ込み、吹き飛ばす。火炎の熱まで『お返し』されていたら死んでいたが、蜻蛉が返すのは衝撃力のみのようで、日輪が蒸発することはなかった。

凄まじいまでの威力に打たれ、ほんの一瞬、意識が飛ぶ。

気がつくと、日輪はうつぶせに倒れ、全身から出血していた。

血まみれの己の手を、日輪は興味深く見つめる。皮膚から血を流すなど、いつ以来だろう。新鮮な痛みに驚くとともに、想い人のことが思い出された。

（ああ……雷真さまは、いつもこんな痛みの中で……戦ってらしたんだ……）

「ひ、日輪さま!?」「お嬢っ！」「ご無事どすか、お嬢ぉ！」

陰陽師たちの声が聞こえる。だが、絶望的に遠い。たまらず駆けつけようとする彼らを、戦隊の三体が迎撃に向かった。無論、陰陽師たちも退かない。再び魔術の爆炎が飛び交い、激しい戦闘が再開される。

日輪のためなら、死も辞さぬ覚悟で彼らは戦う。穢土が有効でない以上、前がかり気味のこちらに勝ち目はない。一旦退いて、態勢を立て直さなければ全滅だ。

日輪の迷いを見透かしたように、天全が言った。

「兵を退かれよ。『勝者の言い分がまかり通る』、それがいざなぎ流でしょう?」

言葉を返され、恥辱を感じた。

正直に言えば、日輪は逃げ帰りたかった。しかし――

「いざなぎの姫が……いっぺん口に出して言うたことや……！」

膝の震えを必死に殺し、立ち上がる。

視線が定まらない。血でむせて、咳き込む。痛くて、苦しい。だが、止まらない。

「うちかて、天全さまと大差ない……外道かもわかりませんけど……！」

己のことを思えば、嫌悪感が込み上げる。
この体が憎い。この身に流れる、いざなぎの血が憎い。
こんなときにも涙が出る、自分の弱さが憎い。
しかし、それでも——
「今だけ、ここだけは……死んでも譲らん」
残された気力を振りしぼり、天全をにらみつける。
「雷真さまに代わり、赤羽天全を討つ！」
「その気持ちは嬉しいけどよ、日輪」
ぽん、とやわらかく、誰かが肩に手をかけた。
「兄弟喧嘩に手出しをするのは、野暮ってもんだ」
「ら——雷真さま……!?」
気配は背後。必死に振り向く反対側を、声の主が通り過ぎる。
ようやく捉えた背中は、確かに雷真のものだった。細身の人影が三つ、彼の後ろに着地する。日輪は己の正気を疑った。これは夢か？　今わの際に見るという？
「悪かったな、日輪。兄貴が怪我させてよ」
声音は優しい。捨てたはずの感情が甦りそうになり、日輪は顔を背け、角を隠した。
「……このような浅ましい姿、雷真さまにはお見せしたくありませんでした」
「その『なりたくない』姿になってまで、約束を果たそうとしてくれたんだろ」

（ああ……うちはほんまに……自分が嫌や……！）
彼が現れ、こうして話しかけてくれることを、嬉しいと感じてしまっている。
そんな資格はないのに、雷真にすがりつきたいと思っている。今すぐひたいを地にすりつけて、許しを請わねばならないはずなのに。
我慢できず、日輪は生の感情をぶつけた。
「どうして……きてしまったのですか……っ！　こうならないために……あんな深手を負わせましたのに……っ」
「いざなぎさまはとことん赤羽に祟るよな。だが、おまえ一人に背負わせはしねえ」
雷真は穏やかに受け流し、照れくさそうに笑った。
「阿呆の俺にはさ、何もかもサッパリなんだ。三途の川から戻ってみりゃ、馬鹿王は好き放題に暴れてるし、婆さまと日本軍はおかしな真似を始めてる。学院はいよいよつぶれちまって、教授も学生も見当たらねえ。けどまあ、合理的思考ってのがうちの流派の持ち味でね。俺もちょいと頭を使って、冴えたやり方ってやつを考えてきた」
「……それは、どのような？」
「まずは兄貴をぶっ飛ばす。そんでもって、おまえを助ける」
「戯れ言を！　私は雷真さまの敵ではありませんか！　仮に雷真さまが復讐を遂げたとしても、わたくしが貴方を討ち果たすだけです！」
「もう大丈夫ですよ、日輪さん」

ふんわりと優しく、夜々が言った。
「あとは雷真に任せてください。きっとみんな、幸せになれますから！」
日輪の胸に、彼女と恋の火花を散らしていた、あの日々が甦った。
夜々にとって、雷真は誰よりも大切な人だ。その雷真を瀕死に追いやった日輪に、夜々はわずかな怒りさえ見せない。
引け目と、負い目で、日輪はもう何も言えなくなった。
雷真と三姉妹が遠ざかる。気持ちの糸が切れ、日輪の膝から力が抜けた。そのまま倒れ込みそうになるのを、筋肉質の身体が受け止める。
「しっかりせえ、お嬢。まだ終わりと違うぞ」
「昴――」
身内の陰陽師たちに先駆けて、昴が日輪を支えていた。
「な、俺の言うた通りやろ？」
「え……」
「いっちゃんおまえのためになるもん、持って駆けつけたやろ？」
にっとたくましい笑みを見せる。日輪はもう一度、雷真の背中を見た。
一門の者たちが集まってきて、日輪と昴を護るように布陣した。
「若大将！　どうゆうこっちゃ！」
「何で赤羽の小僧が出歩いとる？」

「あいつ、軍の命令を受けたんか？」
「皆、俺の話を聞いてくれ」
昴は毅然とした声で、無数の疑問をねじ伏せた。
「今から俺が、いざなぎの〈陰〉を言うて聞かせる。ここにおるんは若手ばかり——大半が知らん話や。全部聞いたら、おのれで判断して欲しい」
皆が顔を見合わせる。昴は何を言い出したのか。
「何もむつかしぃことない。お館さまにつくか——」
がしっ、と日輪の肩をつかみ、背中を押して、皆の前に立たせる。
「土門日輪につくか、や！」
昴が何をするつもりかを悟り、日輪の心がざわめいた。
恐怖を覚える。この瘴気のどこかから、綺羅が今すぐ現れるのではないかと。
当然、昴も感じているはずだが——その横顔にはもう、迷いがなかった。
そのまっすぐさを、日輪はまぶしいと感じた。昴も、雷真も、夜々も、皆まぶしい。
かすむ視線の先では、雷真と天全、二人の赤羽が対峙していた。
天全は表情を消し、声の抑揚も消して、冷ややかに言った。
「何をしに、ここへきた？」
「俺はあんたを殺すために、この国にきた。撫子の——一門の仇を討つために」
雷真が応える。そして、自嘲気味に笑った。

「留学の動機としちゃ不純だな。『世界を救うため』魔王になるって奴もいたのにさ」
「おまえを否定する資格は、敗者にはない。この学院が謳っていることだ」
「実力主義か。なら、これから俺がどうしようと、俺の勝手だよな？」
「兄貴。俺は本当のことが知りたいんだ。あの夜、本当は何があったのか」
ぱきぱきと指の骨を鳴らす。それから、雷真はささやくように静かな声で言った。
「知っているはずだ」
「俺は何も知らない」
「その目で目撃したはずだ」
「違う。俺は何も見てない。俺が見たのは死体だけ——あんたが誰をどうしたのか、本当は何も見ちゃいないんだ」
「言ったはずだ。俺が母を手にかけ、撫子を解体した。すべては『神を造るため』」
「そのカミってのが——」
熱を帯びかけた雷真の声が、ふっと浮いた。
「……いや、よそう。あんたも、師範も、親父殿も、硝子さんも、みんなそうだ。本当に大事なことは言葉にしてくれない。ずいぶん恨みに思ったが、今ならわかる。俺みたいな馬鹿が言われて理解できるようなことなら、こんなにこじれてねえってな。だから、もし本当のことが知りたけりゃ——こうするしか、ないんだろう？」
印を結び、呼吸を整え、両手の指を開いて、雪月花に向ける。

仮面越しの天全の目が、わずかに細められたような気がした。

「そうだ。知りたいことは、己の腕で確かめるがいい」

「上等。これが〈夜会〉決勝戦ってことで、いいんだな？」

「決勝戦？　殺し合いにきたのだろう？」

雷真は肯定も否定もせず、とぼけた顔であたりを見回した。

「決戦の舞台にしちゃ殺風景だが、日陰者の赤羽一門にゃ似合いだな」

天から差し込むおぼろげな月影の下、銀の仮面が水滴のように光った。

「照明ならば、月で十分」

「喝采なんざ、似合いもしねえ」

笑みをひとつ。雷真は三姉妹に向かって、天全は戦隊に向かって、糸を伸ばした。

「行くぞ、雪月花。俺たちの旅は、ここで決着だ！」

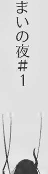
『はい！』

一分の乱れもなく、三姉妹の声が重なる。

かくて、夜会執行部も、紳士淑女も、国王すらあずかり知らぬところで――

ついに、決戦の幕は上がったのだ。

Intermission おしまいの夜＃1



赤羽対赤羽。同じ流派の兄弟が互いの軍勢を率い、紅翼陣を張って対峙する姿は、穢土の瘴気がかすむほど、鮮烈な輝きに満ちていた。

「若大将……〈陰〉てな、何ですの？」

そちらをうかがいながら、陰陽師が問う。昴は日輪を立たせ、冷静な声で言った。

「皆、まずは遮蔽結界や。瘴気を使ぉて陣を張るえ。今から俺がゆうことは、お館さまの逆鱗に触れることやしな」

困惑が広がる。昴は強制せず、自分で結界の構築に取り掛かった。

「手伝わんでええから、負傷者を手当てしとけ。なるたけ力を戻しとくんや」

やわらかく言う。昴に敵意がないのはきちんと伝わり、皆がぎこちなく動き始めた。

脱落者こそいないが、無傷の者もいない。戦隊との戦いで、皆がどこかしらを負傷し、足を折った者もいる。日輪もまた、火傷と裂傷を負っている。

秘薬の軟膏を塗られながら、日輪は赤羽兄弟の方をうかがった。

二人は互いの隙をうかがっている。雷真と天全が共倒れになってくれるなら、いざなぎ一門にとっては願ったり叶ったりということになるが……。

それは数日前、綺羅本人の口から聞かされた、いざなぎの忌むべき秘密だった。
昴は一度深呼吸をして、静かな口調で語り始めた。
「こっちはこっちで、やることやっとかんとな」
昴が釘を刺す。それから、日焼けした顔で笑った。
「お嬢、今は手出し無用や。雷真のことは雷真に任しとき」

「今からゆうこと、よう聞きや。いざなぎの〈陰〉、教えたるさかいな」
綺羅が語った内容は、日輪にとっては呪いに等しいものだった。
「およそ千年の昔、平安の世において、わてらと赤羽はひとつやった」
「——ひとつ？　流派がですか？」
意外だったので、日輪は確かめる。同門という意識はなかった。
綺羅はうなずき、声を潜めて言った。
「あちらさんも高位のもんにしか伝えとらんやろな。〈紅翼〉の血ゆうんは、わてら玄獄、北の白角、南の朱手らと同じ、いざなぎ流の『力ある』血脈や」
「……ならばどうして、赤羽だけがわかれたのでしょう？」
「そもさ、瘴気とは何か。式とは何か」
いきなり問われ、言葉に詰まる。昴と六連も困惑気味に視線をかわした。瘴気も式神も身近すぎて、かえって深く考えたことがない。

だが、もちろん、日輪にはひと通りの知識がある。

「瘴気とは〈陰〉の性質を持つ〈気〉――生者に障る死の気です。そして式とは、死の気を帯びたさかさまの〈生〉――すなわち〈屍鬼〉です」

それがいざなぎ流の世界観。陰と陽の二元論で世界のありようを説明する。

綺羅はうなずき、言葉を続けた。

「その〈鬼〉は大陸の言葉で〈魂〉を意味する。陰陽道には道や台密、天竺わたりの影響もあるさかいな。けど、いざなぎ流のほんまの根っこは『いざなぎさまの御業』や。いざなぎさまが何しはったか、あんた、知っとるな？」

「それはもちろん、国産みの神話で学んでいます」

「その後や。夫のいざなぎさまは、妻のいざなみさまを喪い――そして？」

「黄泉の国へ行かれました。イザナミノミコトをお迎えするために」

「そや、いざなみさまを黄泉還らせようとしはった。黄泉から命を取り戻す……機巧学院でも習うとるんちゃうかな、そうゆう術を何ちゅうか」

「反魂の術――では、いざなぎさまは、今で言う魔術師ということですかっ？　わたくしたちは神術を継承していると!?」

「そうゆうんを文化英雄ゆうんやろ。ぷろめてうすの火とか、ぐれごりの知識とおんなじ考え方や。神さんの御業を教えてもろて、わてら人間は力を得る」

綺羅の意外な知識に驚く。国外の魔術になど興味がないと思っていた。

「反魂は決して叶わん。ゆえに、いざなみさまは今も黄泉におはす。せやし、反魂の研究は『死の何たるか』をいざなぎさまに教え、瘴気と屍鬼の術が生まれた」
「史実だと……おっしゃるのですか？　国産みの神話もっ？」
日輪は混乱した。いざなぎ流の歴史は千年と少し。国産み神話が史実だとすれば、それはもっとずっと古い話になる。
そもそも、こんな昔話が何だと言うのだろう？
日輪のいら立ちを見抜き、綺羅は小さく笑った。
「まあ、信じるも信じんもあんたの勝手や。けど、これだけは知っときや。わてらはいざなぎ流。ほな、赤羽の陰陽師は何流や？」
「それはもちろん、赤羽流です」
「それは傀儡の流儀や。陰陽師としては、いざなみ流を名乗る」
「――――！」
「紅翼の血が目ェ醒ますとき、あの連中がどう見える？　連中の気性そのまま、まるで火のように見えるやろ。あれはかぐつちさまの血や」
紅翼陣を展開するとき、彼らの背中、肩甲骨のあたりから赤い霧が飛ぶ。生き血を気化させ、莫大な魔力に変えるのだ。
綺羅は顔をゆがめ、忌ま忌ましげに続けた。
「かぐつちさまご出産のおり、いざなみさまはお隠れになった。いざなぎさまはかぐつち

さまを憎み、なますにしはった。母親のいざなみさまは、どう思わはった？」
問われ、神話を思い返す。いざなみのみことが息子をどう思ったのかは覚えていない。
だが、黄泉還りのくだりを思い返せば、夫婦仲がどうなったのかはわかる。
黄泉に赴いた男神は、蛆虫のたかった女神を目撃し、逃げ帰る。そして黄泉平良坂――あの世とこの世の境い目で、夫婦の決裂は決定的となるのだ。女神は地上の人間を一日に千人殺すと宣言し、男神は一日に千五百の産屋を建てると言い返す。
夫婦は互いに憎み合うこととなった。その神話がそっくりそのまま、土門と赤羽の関係性を顕している。
赤羽一門は都を追われ、未開の東国へ追いやられ。
いざなぎ一門は権力中枢で、典雅な暮らしを続けた。
日輪はめまいがした。既に、まともに聞く気が失せている。
「そんな御伽噺、今のわたくしたちには何の関係もありません！」
「バチ当たりな娘やな……！　けどあんたのゆう通り、伝承の真偽は関係ない。この因縁が両家を縛り、千年にわたる憎しみの根っこにあり続けたゆうことや。実際問題、赤羽は都を追われた負け犬の末裔、ずいぶん貧乏もしたやろし、ひがんで、ねじくれて、血の一滴にまでわたらへの憎しみが溶け込んどる」
「馬鹿げた言いがかりです！　雷真さまにそのようなお気持ちはありませんでした！」
「あのぅ……何や、僕もぴんときてませんけど……」

ひどく遠慮がちに、後ろから六連が口を挟んだ。
「僕……覚えとるんです。お嬢と雷真はんが婚約しはったあの日、いざなぎのお山に満ちとった、ピリッピリした空気」
日輪はきょとんとした。彼は何を言い出したのだろう？
「あんとき、昴が山犬に式を降ろしてもうたやないですか。僕らようけぶん殴られましたけど……今にして思えば、大人は誰も本気で怒っとらんかった」
「何を……あほなこと……」
「そもそもですよ。あんときの僕らに、生き物に式を降ろせるほどの魔性、あったんですかね？　一〇歳そこそこのちびっこですよ？　僕は今でもようできん」
「……阿呆、六連。めったなこと言うな」
押し殺した声で、昴がとがめた。
「あれは俺の間違いや。悪い神さんが寄ってきて、これ幸いと俺の術をのっとった。俺の力が足らんでも、そうゆうんは起こり得る」
「そうかて……お嬢が危なかったのに、誰も駆けつけてくれへんかったやないですか。術達者があんだけおって、気付かんわけあらへんわ」
「赤羽の人がぎょうさんいてるのに、術使われへんやろ。接待で忙しかったんや」
昴の言うこともわかるが、六連の疑問もわかる。
つまり、六連はこう言っているのだ。雷真を亡き者にするために、誰かが昴を利用した

のではないか、と。
　雷真と日輪の婚約を快く思わない陰陽師は、大勢いた。
　日輪は祖母の方へ膝を進め、詰め寄るように訊いた。
「どうなのですか、お祖母さま」
「阿呆言いな。そんなん、全面戦争になる」
「で、ですよね。雷真さまを亡き者にして、いいことなんてありません！」
「そやそや。それに、わてらやのぉて、あちらさんの仕業かもわからんしな」
「……馬鹿馬鹿しい！」
　ついに堪忍袋が破裂して、日輪は怒鳴った。
「一門の成り立ちだとか、歴史だとか、そんな苔むしたいさかいは無意味です！　むしろ同じ根を持つ者として、手を取り合うべきではありませんか！」
「馬鹿はあんたや。洋行までして、なーんも学んどらんのやな」
　綺羅はやれやれというふうにかぶりを振った。
「肌の色が同じでも――むしろ同じときにこそ、人は些細な違いが許せん。言葉が違う、信じとる神さまが違う、食べ物が違う――そんな理由で憎み合う。となり合う国と国、袖振り合う民族と民族こそ、いがみ合うもんや。阿呆丸出しでな」
　せせら笑う。この手の皮肉は日輪の嫌うところだが、綺羅のような人物の口から聞くと、普段の三倍気障りに思えた。

「苔むすゆうんは風化することやのぉて、時経るごとに深みを増すゆう意味や。関ヶ原で殺されたもん、五稜郭で殺されたもん、ぎょうさんおるのや。昔のことは水に流しまひょゆうて、あちらさんかておさまるかいな。あんた、わてが小僧を殺しても、おんなじこと言えるんか？ わてを許せるて？」
「そ、それは詭弁です！ 戦の悲劇とは別のことではありませんか！」
「ほな、戦で死ねば、人の命は軽く済むんか？」
「……………っ」
「赤羽は土門に祟るんや。あんた、今年の凶兆、忘れとらんやろな？」
年始の占で綺羅がひどい凶兆を見た――という話は聞いている。一門の存続すら危ういという、過去最大の凶だ。綺羅が金薔薇に暗殺されかけたことが、それではないかと言われていたが――今のところ、綺羅はぴんぴんしている。
「ほんに、気味の悪い話や……。赤羽一門はもうおらんゆうのに」
「います！ 雷真さまが！」
「小僧に心を許すなゆうてますのや！」
ついに雷が落ちる。日輪も日輪で、荒々しく立ち上がった。
「つくづく、くだらぬお話でございました。そんなお話ならもう結構です。何が〈陰〉ですか。こんなお話で、わたくしの心が揺らぐことなどありません！」
「阿呆、せくな。こっからや」

苦笑いで言う。どうやらこれは前説に過ぎなかったらしい。
先ほどからの嫌な予感が、はっきり大きくなるのを感じた。
日輪は本能的に逃げ出したくなったが、既にそれが許される状況ではない。
「なあ、日輪。あんたは優しぃ子や」
思いがけず柔和な目をして、綺羅が言った。
「わての孫とは思えんくらい、まっすぐで、清廉で、人の心を思いやれる。強情やけど、それは芯が強いゆうことや。ほんまは不憫にも思ぉとるよ。平凡な家に生まれて、平凡な娘として生きたなら、幸せになれたかもわからん」
らしくない発言に思えた。懐柔しようとしている……？
「けど、あんたは土門の家に生まれ、土門の乳で育った。その事実は決して消えん」
「……迂遠です。それが何だとおっしゃるのですか？」
「鈍いなぁ、鈍い鈍い！　それでも陰陽師の娘かいな！」
ふふっと笑う。普段の小馬鹿にしたような笑い方ではなく、不出来な子どもを慈しむような、あたたかな笑いだった。
そのぬくもりを消し、ただ意地悪な笑みになって、綺羅は言った。
「つまりな、あんたを産み、育て、護てきたわてらが、愛しぃ愛しぃ雷真さんの、憎い憎い仇の一味やったら――どや？」
一瞬、何を言われたのかわからなかった。

足もとの床が不意に崩れ、断崖に突き落とされたような気がする。
頭は理解を拒んでいる。だが、体はもう理解している。膝が萎え、声が震えた。
「な……にを、おっしゃって……」
待って欲しい。頭が回らない。ついていけない。
綺羅が滅亡に追いやった？　赤羽一門を？　どうやって——何のために？
立ちすくむ日輪を、綺羅はさらに追い詰める。
「あんたの体に流れとるんは、小せがれの怨敵、いざなぎ一門の血や。お姫さんお姫さん言われて、なに不自由せんと暮らしてきたやろ。どや、日輪。あんたこの先、雷真さんにどんな顔して会いよるの？」
この身がたまらなく汚らわしいものに思えて、日輪は震えた。
己の体から死臭がたちのぼったような気がする。常にともにあり、日輪を護ってくれた式神たちが、恐ろしい魔物に思えた。
生物の死を根源とする禁忌の魔術系統——〈瘴気〉を操る魔性の血族。
もとをただせば同門の、赤羽一門の憎しみを買い続けた一族。
それが、自分。土門日輪。
日輪の足もとには無数の骸が——雷真の親族の骸が転がっている。
日輪の心を折ったとみるや、綺羅はさらに口調をやわらげ、こう言った。
「ほな、じっくり〈陰〉の話をしまひょか。赤羽一門滅亡の経緯を、ゆるりとな」

あとがき

「ここで終わりかよおおおお！」
という声が聞こえる（気がする）海冬レイジです、こ、こんにちは。

またしても、前回から間が空いてしまいました……。

待っていてくださった皆さま、お待たせしてしまって大変申し訳ありません。僕も本当は早く出したい！　責められる毎日は心底つらくて……（※誰も責めてない）。次の巻もそうなるに違いないと思うと今から憂鬱の極み……（※誰も責めてない）。
ですがこの期待される痛み、苦しみ、それは書き手にとって至上の幸福、小説家冥利に尽きるというものです。僕が今こうして生きていられるのも、待っていてくださる貴方のおかげです。いつもありがとうございます！

さて、前回のあとがきで『次巻は衝撃的な感じのアレになる』と申しましたが――
半年ほど頭を悩ませた結果、その部分は最終巻に持ち越しとなりました。僕の計算が正

しければ、これで最高のカタチになっている……はず。これで次回、最高のエンディングを迎えられる……はず。
最後までついてきてくださった方には、是が非でも最高のエンディングをお見せしたい――と考えるのは作家の性であり、自分に課すハードルもうなぎのぼりであり、またしても筆が相当遅くなるに違いない予感がします。ひぃっ、ごめんなさい……！

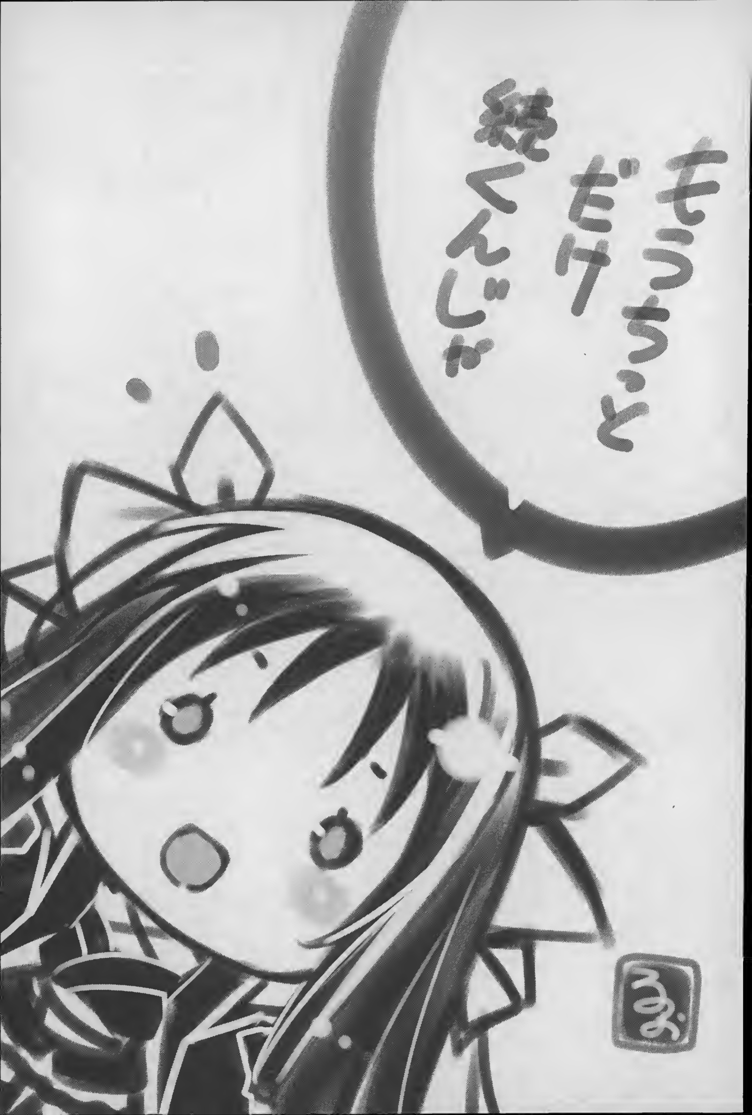
でも、一年は、待たせないよ！

できれば半年もかからずに出せたらいいな、と思っております。
多少時間がかかってしまうぶん、内容に関しては超☆ご期待ください（※積極的に自分の首を締めにいくスタイル）。作者本人は極めて気合が入っております。
持っているものは、全部出す。もらったものは、全部返す。ここですべてを注ぎ込んで、己の天分を使い切る――その覚悟で臨みます。この21世紀の日本に、海冬レイジとかいうちっちゃくもふてぶてしい存在がいたということ、その存在の証を時空に刻みつけてやりますよええ！
泣いても笑ってもこれが最後、どうか結末を見届けてくださいね！
るろおさん、池本さん、今回もありがとうございましたああ！　お二人のスケジュー

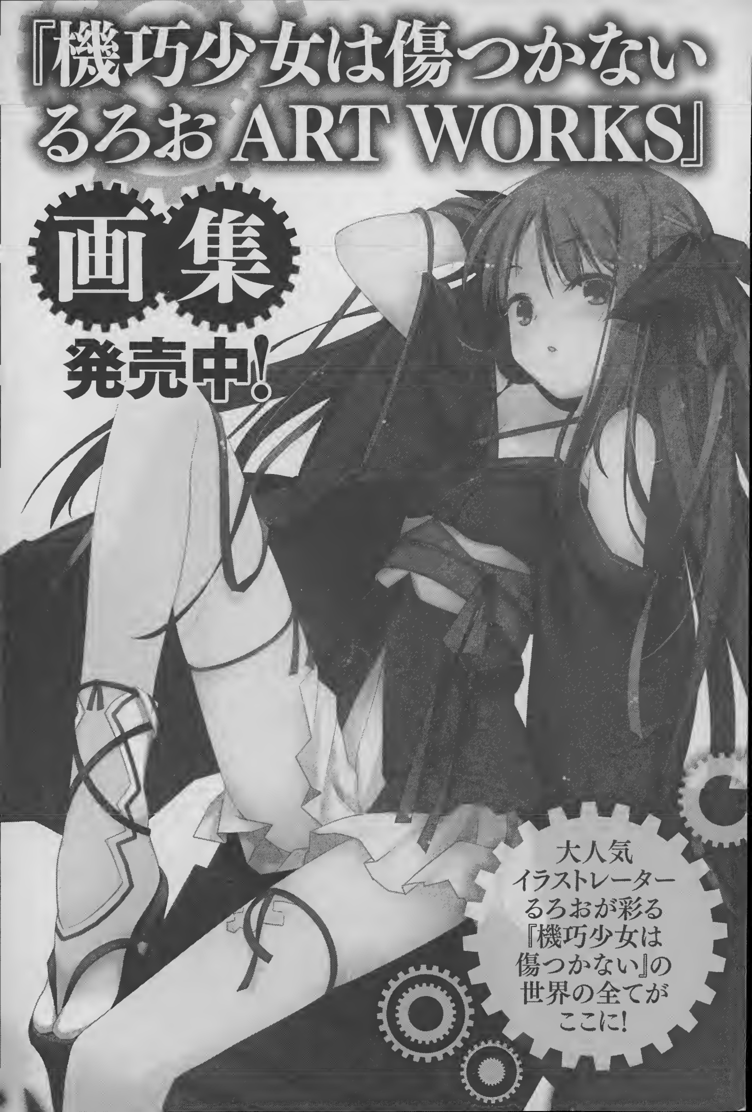
ルを壊滅に追い込む大怪獣それが俺！　毎度すみません……！
物語を素敵に広げてくださる高城さん、コミックサイドの担当さん、デザインや校正、印刷関係の皆さま、いつもありがとうございます……！　地獄につき合わせてしまってる感すごいです！　すみませんありがとうすみません！
ほかにも多くの方のお力添えで、今回も出版に漕ぎつけることができました。この場を借りてお礼申し上げます。
そして誰よりもまず、今日まで僕を待っていてくださった貴方に最大の感謝を！　次回いよいよ最終巻、『機巧少女』という物語のしめくくりでお会いしましょう！

追伸。
春にファミ通文庫さんのモンハン小説に寄稿しました！　まだ売ってるかな……？
今をときめく最強ユニットGARNiDELiAの新盤『BiRTHiA』初回限定版に中編（ほぼ長編）を寄稿しました。コンポーザーのｔｏｋｕさんにはMachine-doll Projectで大変お世話になりました……！
海冬レイジの本が読みたいよー、という天使な貴方はチェックしてくださいね！

２０１５年７月　海冬レイジ


もうちっとだけ続くんじゃ

「機巧少女は傷つかない」
コミカライズ
月刊コミック
アライブにて
連載中！
機巧と魔術の香り立つ
正統派学園バトルファンタジー
毎月27日
発売！
マシンドール
機巧少女は傷つかない
Unbreakable Machine-Doll
高城 計 原作／海冬レイジ
キャラクター原案／るろお
comic alive 月刊コミックアライブ
GeneMetallica
ジーンメタリカ
―機巧少女は傷つかない Re:Acta―
漫画：釜田みさと 原作：海冬レイジ
キャラクター原案：るろお
海冬レイジ
完全書き下ろし
「機巧少女は
傷つかない・スピンオフ」！
毎月15日
発売！
月刊コミックジーン
全2巻好評発売中！


『機巧少女は傷つかない
るろお ART WORKS』
画集
発売中!
大人気
イラストレーター
るろおが彩る
『機巧少女は
傷つかない』の
世界の全てが
ここに!

MF文庫J

機巧少女(マシンドール)は傷つかない15
Facing"Machine doll Γ"

発行	2015年9月30日　初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行者	三坂泰二
発行所	株式会社 KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 0570-002-001（カスタマーサポート） 年末年始を除く 平日10:00〜18:00 まで
印刷・製本	株式会社廣済堂

©Reiji Kaito 2015

Printed in Japan　ISBN 978-4-04-067470-4 C0193
http://www.kadokawa.co.jp/

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁・落丁本は、送料小社負担にて、お取替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。
（古書店で購入したものについては、お取替えできません。）
電話:049-259-1100（9:00〜17:00／土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-12
株式会社KADOKAWA　MF文庫J編集部気付「海冬レイジ先生」係「るろお先生」係

二次元コードまたはURLより本書に関するアンケートにご協力ください。

http://mfe.jp/wpc/

- 一部対応していない端末もございます。
- お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待受をプレゼント!
- サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
- 中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。